

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国立国語研究所

令和元年度業務の実績に関する外部評価報告書

国立国語研究所 外部評価委員会

令和2年9月10日

はじめに

令和元年度（平成 31 年度）の外部評価書をお届けします。令和元年度は第 3 期中期計画の終盤に差し掛かり、4 年次中間評価の年でもありました。外部評価委員の方々には第 3 期の国語研の研究について、より広い観点から中間評価報告書へのコメントもいただき感謝します。

令和元年は国語研創立 70 周年、人間文化研究機構移管 10 周年の年であり、10 月 1 日には、周年記念として、国語研の 70 年・10 年を振り返ると同時に第 4 期の構想を発表し、識者の方々からご意見をいただく会を開きました。その際のご意見、ご提言を取り入れながら、現在第 4 期の準備を進めております。

令和元年度末にはコロナ感染症の発生・拡大に伴って、国語研も大きな影響を受け、年度末の研究會、ワークショップ、シンポジウムもそのほとんどが中止を余儀なくされました。また、4 月、5 月の緊急事態宣言下では、ひと月以上研究所を閉鎖せざるを得ませんでした。そのため外部評価委員によるヒアリングも行えず、外部評価委員の皆様にはご迷惑をおかけすることとなりました。

幸い、テレワーク、オンラインでの事業、研究會、會議等が行えるようになると、計画は着々と進み、それほどの遅滞なく研究、事業を行うことができています。外部評価委員会もオンラインにより行われました。その際は国語研の活動に対し高い評価を与えてくださったこと、また、貴重なご意見・ご提言をくださったことに対し、外部評価委員会委員の皆さまに感謝いたします。

いよいよ、令和 3 年度は第 3 期の最後の年になります。来るべき第 4 期に備えて、所員一同この評価と提言にこたえるべく誠心誠意、国語研のより一層の発展のために努力を重ねていきたいと存じます。ますますのご指導ご鞭撻をお願いいたします。

令和 2 年 9 月

国立国語研究所長 田窪 行則

目 次

1. 評価結果報告書	1
1. 令和元年度「機関拠点型基幹研究プロジェクト評価・センターの研究活動」 に関する評価結果	2
2. 令和元年度「管理業務」に関する評価結果	87
2. 資料	93
1. 国立国語研究所外部評価委員名簿	94
2. 国立国語研究所令和元年度業務の実績に関する評価の実施について	95
3. 機関拠点型基幹研究プロジェクト一覧	96
4. 国立国語研究所外部評価委員会規程	97
5. 国立国語研究所外部評価委員会【令和元年度実績評価】（第1回）議事次第	99

1. 評価結果報告書

令和元年度の国立国語研究所の外部評価を次のように実施しました。

令和2年9月10日 国立国語研究所外部評価委員会【令和元年度実績評価】(第1回)

その結果を以下の通り報告します。

外部評価委員会
委員長 坂原 茂

国立国語研究所令和元年度外部評価にあたって

本報告書は、機関拠点型基幹研究プロジェクト「多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓」の令和元年度分実績についての外部評価委員会の評価のまとめである。評価対象は、(1) プロジェクト全体、(2) 6つの共同研究プロジェクト（「対照言語学」、「統語・意味解析コーパス」、「消滅危機言語・方言」、「通時コーパス」、「大規模日常会話コーパス」、「学習者コミュニケーション」）、(3) 2つのセンター（コーパス開発センター、研究情報発信センター）、(4) 「管理業務」である。

令和元年度のプロジェクト全体に対する評価は「順調に進捗している」であり、(1) 研究成果・研究水準、(2) 研究体制、(3) 教育・人材育成、(4) 社会連携・社会貢献、(5) 国際連携・国際発信のいずれにおいても高い評価に値し、次年度以降もこのレベルの研究の継続が期待できると判断された。6つ共同研究プロジェクトの評価は、A（計画を上回って実施している）が5、B（計画どおりに実施している）が1であり、今年度はA評価が1つ増え、全体的に充実した研究が行われていると評価された。2つセンターの評価はA（計画を上回る成果を上げている）とB（計画どおりに実施している）が1つずつで、センターの多方面の活動とデータベース構築の成果が高く評価された。管理業務については、A（計画を上回って実施）とB（計画通り実施）がそれぞれ2つずつで、全体的に良好な業務運営が行われていると評価された。

今年度は新型コロナウイルス感染拡大のため研究活動に予期せぬ制約が課されたにもかかわらず、さまざまな工夫を凝らして研究水準を維持できたことは賞賛に値する。また、今年度は新型コロナウイルス感染拡大のためヒアリングが実施できなかったが、昨年度実施して、評価にきわめて有益であることが確認できたので、来年度以降、事情が好転したら再びヒアリングを実施することが強く望まれる。

以上のように、外部評価委員会は、令和元年度の本プロジェクトの進捗状況は全体的に計画をやや上回り、順調に伸展していると評価した。本プロジェクトは、種々のコーパス開発を始めとして、これ以降の日本語研究を大きく変える可能性を秘めたきわめて重要なプロジェクトであるので、外部評価委員会としては、プロジェクトに携わる各人がそのことを意識しつつ、これ以降もこの順調さを維持して、プロジェクトの完遂に励むことを強く希望する。

令和2年9月
外部評価委員会
委員長 坂原 茂

機関拠点型基幹研究プロジェクト評価報告書

評価に関する総括

《達成状況の評価》

順調に進捗している

(判断理由等)

(1) 研究成果・研究水準, (2) 研究体制, (3) 教育・人材育成, (4) 社会連携・社会貢献, (5) 国際連携・国際発信, のいずれにおいても計画通り順調に進んでいる。

【プロジェクト全体の連携活動に関する評価】

(1) 研究成果・研究水準について

令和元年度の研究成果・研究水準は量的・質的にもきわめて高い評価に値する。

研究は量的に期待以上の成果を上げている。国際シンポジウム 18 件を実施した。国内シンポジウム・ワークショップ 53 件を企画し, 中止になった 10 件を除き, 43 件を実施した。書籍・報告書は英語書籍 2 冊を含む 20 冊を刊行した。コーパスについては, 通時コーパス班が新規に『日本語歴史コーパス』「江戸時代編Ⅲ近松浄瑠璃」及び『日本語歴史コーパス』「奈良時代編Ⅱ宣命」作成し, またそれぞれ研究班が開発中のコーパスの追加・拡充を行うなど活発に研究が進んでおり, データの蓄積も順調である。

研究水準はきわめて高く, 学界をリードする最先端の研究である。研究活動が先進的な研究にとどまらず, それぞれの研究分野全体を見通すパースペクティブから入門・解説にも力を入れ, 研究の広がりにも多大な貢献をしている点も好感がもてる。前者の例としては, 「対照言語学」班『日本語と世界の言語のとりたて表現』(野田尚史 (編). くろしお出版), 「統語コーパス」班“Ideophones, Mimetics and Expressives” (K. Akita and P. Pardeshi (eds.). John Benjamins), 「危機言語・方言」班“Proceedings of International Symposium Approaches to Endangered Languages in Japan and Northeast Asia - Poster Session” (H. Aoi (ed.). アジア・アフリカ言語文化研究所) などが挙げられる。後者の例としては, 「対照言語学」班『よくわかる言語学』(窪菌晴夫 (編). ミネルヴァ書房), 「学習者のコミュニケーション」班『日本語教師のための実践・読解指導』(石黒圭 (編). くろしお出版) などが挙げられる。全体として, バランスの取れた高度な研究活動が行われていると評価できる。

(2) 研究体制について

研究体制は, 研究推進のための合理的でバランスの取れた構成になっており, 他大学と組織的に連携し, 大学機能強化に貢献するなど, 高い評価が与えられる。

研究は 6 つの基幹プロジェクト (「対照言語学」, 「統語・意味解析コーパス」, 「消滅危機言語・方言」, 「通時コーパス」, 「日常会話コーパス」, 「学習者のコミュニケーション」) を中核として国内外の 590 人の研究者を共同研究員として組織されている。

各班の研究の進捗状況を管理するために共同研究プロジェクト推進会議, 自己点検・評価委員会を設置し, 研究情報の共有化, 班同士の連携, 合同シンポジウムの企画, プロジェクト全体の自己点検・評価を行っている。

研究の共同利用に関しては、今年度から、これまでの活動に加えて、研究所が保有する言語資源等の研究資料や実験機器等を活用する公募型プロジェクト「共同利用型」を新たに導入し、12件のプロジェクトを採択するなど、日本語研究の共同利用拠点としての役割を強化した。

プロジェクト間の連携強化に関しては、全基幹プロジェクト参加の合同シンポジウムの成果をとりまとめた『データに基づく日本語のモダリティ研究』（くろしお出版）を刊行し、また各班が開発する言語資源の有効な活用を進めるため定期的に「領域横断コーパス会議」を開催し、複数のコーパスを活用した共通テーマに基づく合同シンポジウムを開催するなど、活発に取り組んでいる。

「対照言語学」「統語・意味解析コーパス」「学習者のコミュニケーション」の各班ではアドバイザリーボードを設置し、海外の研究者からのアドバイスを積極的に取り入れプロジェクトの運営に反映させるなど開かれた研究姿勢を取っている。

(3) 教育・人材育成について

教育・人材育成についても、大学との連携、教材開発、若手研究者の育成や社会人の学び直しなどに多大な貢献をしており、高い評価が与えられる。

大学院教育では、一橋大学で3人が授業を行い、博士学位論文審査の主査5件、副査2件を担当した。また東京外国語大学においても2人が講義を担当した。「危機言語」班は、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所との協定に基づき、特任助教の雇用、フィールドワーク事前研修、報告書の作成、英語論文集の作成などさまざまな活動を共同で行った。

教材及び教育プログラムの開発に関して、「危機言語」班は、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 LingDy3 と『フィールドワーク事前研修報告書』を、機構広領域連携型プロジェクト「地域社会」と、鹿児島大学大学院との連携授業の報告書『地域文化の可能性』を共同で刊行した。

若手研究者の育成では、博士学位を取得した若手研究者をプロジェクト研究員（PD フェロー）として7人、ほかに非常勤研究員を26人雇用し、専門的研究指導を行なった。そのうち、1人が日本学術振興会特別研究員に採用され、4人が大学・研究所へ常勤・非常勤として就職した。

若手研究者のキャリアパスとして特任助教を4人雇用し、また大学院生32人、JSPS 特別研究員8人（国語研受入者4人を除く）を共同研究員としてプロジェクトに参画させ、若手研究者が経験を積む機会を作った。また研究発表の便宜を計る、調査旅費を支援するなど、若手研究者に好適な研究環境を提供した。

青森県八戸市方言の方言調査では、参加する学生・大学院生を全国に公募し、応募した8人に対して事前講習・方言調査・事後指導を行い、フィールドワークの実践的な研究力を身につけさせた。

こうした若手研究者の研究支援の結果として、特任助教2名とプロジェクト非常勤研究員1名が学会等の賞を受賞した。また若手研究者のモチベーションを高めるため、若手研究者向けの賞を設置し、優秀発表賞を1人に授与した。

若手研究者の育成のため、若手研究者向けのチュートリアル・講習会を20回企画・開催（3件中止）し、合計で379人（学生152人）が参加した。

社会人の学び直しへの貢献として、海外では、ウズベキスタンのサマルカンド国立外国語大学と日本センターで日本語教師を対象としたセミナーを開催し、シンガポール国立大学でシンガポール日本語教師の会と共催で日本語教育の公開セミナーを行った。国内でも日本語教師セミナー、日本語教育ボランティアのスキルアップ講座、現役教師の学び直し講演・講習を行った。

中学校・高等学校の国語科教員及び教職課程の大学院生向けに『日本語歴史コーパス』活用の講習会を企画したが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止となった。鹿児島県沖永良部島和泊町と知名町で役場職員向け方言の保存と復興に関する研修会を4回開催した。

(4) 社会連携・社会貢献について

社会連携・社会貢献については、一般向けの多数のシンポジウム・講演会の開催、地方自治体と連帯した方言語彙集の作成やワークショップの開催、産業界との連携、一般人・子供向けの研究成果の発信などさまざまな努力がなされた。また本研究所作成の各種言語コーパスの重要性が広く認識されるようになってきており、この面に関しても高い評価が与えられる。

一般向けシンポジウム・講演会としては、第14回NINJALフォーラム「私の日本語の学び方」、小・中学生向けに「ニホンゴ探検」を開催した。また研究所創立70周年・移管10周年記念事業の一環として、オープンハウス2019を開催し、ポスター発表35件、研究資料室中央資料庫見学ツアーなどを行なった。プロジェクトの最新の研究成果を発信する研究情報誌『国語研 ことばの波止場』6号・7号を刊行した。

地方自治体との連携では、『宮崎県椎葉村方言語彙集』の作成、鹿児島県沖永良部島の和泊方言復興活動、鹿児島県薩摩川内市甕島での甕島方言講演会、沖縄県竹富島でのワークショップなどを行なった。また文化庁や鹿児島県などと連携して「危機的な状況にある言語・方言サミット(奄美大島)」を開催した。日本・海外の危機言語の保存・継承に携わる人々が参加し、活動報告や意見交換を行ない、この模様は地元の新聞やメディアに取り上げられた。

展示を通じた研究成果の公開については、人間文化研究機構の「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業」と共同で、八丈島の方言動画作品を3本作成し、昨年度に作成した与論島の方言動画作品4本を公開した。可搬型展示ユニットを「れきはく出開帳」を各所で展示し、東外大で講演会を開催した。

産学連携については、異分野融合研究を推進するために、東京大学や日本IBMなど複数の研究機関と連携し Universal Dependencies (言語横断的な係り受け構造を設計する世界的試み)の研究を推進し、日本語の自然言語処理ライブラリ「GiNZA」をリクルート Megagon Lab. より公開した。『日本語歴史コーパス』とジャパンナレッジ「新編日本古典文学全集」本文とのリンクの追加や、日本テレワーク学会などとの連携によるビジネス日本語のプロジェクトの実施などさまざまな活動を行った。また、『三省堂全訳読解古語辞典』や『岩波国語辞典 第八版』の編纂・改訂に本研究所作成の各種コーパスが活用されるなど、産業界での注目が高まっている。

(5) 国際連携・国際発信について

国際連携・国際発信に関しても、高いレベルで研究活動が行われており、高い評価に値する。

海外機関研究者83人を共同研究員に加え、14人を外来研究員として受け入れ、共同研究を推進した。今年度は新たに2件の国際学術交流協定を締結した(ケラニア大学日本学研究センター(スリランカ)、オーストリア科学アカデミー・デジタル人文学センター(オーストリア))。これまでに締結した16件(第2期に締結したものを含めると19件)の国際連携協定を活用して、「オックスフォードNINJAL上代日本語コーパス」の共同整備(オックスフォード大学人文科学部)など、国際共同研究体制を強化した。18件の国際シンポジウム・ワークショップ・フォーラム等を開催し、参加者が合計1,570人となるなど、研究成果を広く国際的に発信し、海外の機関と連携して国際的な共同研究を推進した。

共同研究の成果の国内外への発信のために、論文集 Ideophones, Mimetics and Expressives を John Benjamins 社から刊行した。2017年開催の国際シンポジウムの研究成果が海外の研究雑誌 Linguistic Issues in Language Technology (LiLT) の特集号に採択され刊行されたほか、2018年度に東京外大 AA 研と共同で開催した国際シンポジウムにおけるポスター発表を元にした

Proceedings of International Symposium Approaches to Endangered Languages in Japan and Northeast Asia -Poster Session- (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所) を編集して刊行した。

日本語研究のさらなる国際化に向けて、NINJAL チュートリアルを台湾の東呉大学で開催したほか、中国、インド、ミャンマー、カンボジアでも NINJAL 日本語学講習会を実施し、日本語研究者を中心に合計 236 人が受講した。

国連の定める国際先住民言語年 2019 の一環として開催された Perspectives Conference (2019 年 10 月 31 日～11 月 2 日、パデュー大学、アメリカ) において、パネルセッション “Endangered Languages in Japan: Focus on the Ryukyuan languages and dialect of Tohoku districts” を東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所と共同で企画・実施した。同じく国際先住民言語年 2019 のイベント (2019 年 12 月、ユネスコ本部、パリ) において、日本の危機言語データベース・電子的アーカイブスペースについて報告した。

(6) その他特記事項

特になし。

【今後の活動に向けた意見】

研究、コーパス作成・公開、教育・人材育成、社会連携・社会貢献、国際連携・国際発信のいずれに関しても高い水準の活動が行われており、次年度以降もこのレベルを維持した研究継続が期待できる。

したがって、効率よく機能している現在の研究体制を維持しつつ、積極的な研究活動を継続することを期待する。

各プロジェクト・センターの評価

対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法

プロジェクトリーダー：窪菌 晴夫

I. プロジェクトの概要

1. 目的及び特色

日本語の研究は日本国内に長い伝統と優れた成果を有している一方で、他の言語と相対化させる努力が十分ではなく、(i)世界諸言語の中で日本語がどのような言語であるのか、(ii)一般言語学・言語類型論の視点から見ると、日本語の分析にどのような知見が得られるのか、(iii)日本語の研究が世界諸言語の研究や一般言語学・言語類型論にどのように貢献するのか、いまだ十分に明らかにされたとは言えない。現代の日本語研究に求められているのは、日本語の研究が世界諸言語の研究、とりわけ一般言語学や言語類型論研究にどのように貢献できるのかという「内から外を見る」視点と、一般言語学や言語類型論研究が日本語の分析にどのような知見をもたらすかという「外から内を見る」視点である。

本プロジェクトは、この両視点から日本語の言語事実を分析することにより、日本語（諸方言を含む）を世界の諸言語と対照させて日本語の特質を明らかにし、それにより日本語研究の国際化を図ることを主たる目的とする。日本語の音声・音韻、語彙・形態、文法、意味の構造を、言語獲得（第一言語獲得、第二言語習得）はもとより、言語に関する他の学問分野（心理学、認知科学他）との接点・連携をも視野に入れて、対照言語学・言語類型論の観点から分析することにより、諸言語間に見られる類似性（普遍性）と相違点（個別性・多様性）を明らかにする。このような対照研究を通じて得られた研究成果を国内外に向けて発信する。

上記の目的を達成するために、本プロジェクトは音声・音韻特徴を分析する音声研究班と、形態・文法・意味構造を分析する文法研究班の2つの研究班（サブプロジェクト）を組織する。音声研究班は「語のプロソディーと文のプロソディー」を主テーマに、文法研究班は「名詞修飾表現」「とりたて表現」「動詞の意味構造」の3つをテーマに研究を進める。ともに海外の研究者との国際共同研究と国際シンポジウムの開催・誘致を軸に、論文集（英文、和文）の刊行や、アジアを中心とする諸言語の構造の異同を可視化する言語地図（電子媒体）の刊行を目指す。

2. 年次計画（ロードマップ）

● 全体計画・研究組織

音声研究班と文法研究班は研究成果発表会や研究文献リスト作成などの日常的な活動をそれぞれ独自に行う一方で、「対照言語学の観点から日本語の特質を解明する」という共通の目標に沿って国際シンポジウムを定期的で開催し、その成果を英文論文集などの成果刊行物として公刊する。また、日本語や言語類型論に関する国際会議を合同で誘致し、プロジェクト全体で日本語研究と国語研の国際化を推し進める。

	28年度	29年度	30年度	元年度	2年度	3年度
シンポジウム等	オノマトペ国際シンポジウム, NINJAL フォーラム「オノマトペ」開催	「プロソディー」に関する国際ワークショップ開催	「プロソディー」「移動動詞」「動詞の意味構造」に関する国際シンポジウム開催	「プロソディー」に関する国際ワークショップ開催, 国際認知言語学会共催	NINJAL チュートリアル開催	国際会議 JK 2021 の開催
刊行・出版		NINJAL フォーラムの成果の刊行, 音声関係の啓蒙書刊行	論文集の編集作業, 「プロソディー」に関する研究論文集刊行	「名詞修飾」「とりたて表現」に関する各研究論文集刊行	英文論文集の編集作業, 「移動表現」に関する研究論文集刊行	「日本語と言語類型論」「動詞の意味構造」「移動動詞」に関する各研究論文集の刊行
データ		言語地図の作成				公開

・研究組織

リーダー:

窪園晴夫

班リーダー:

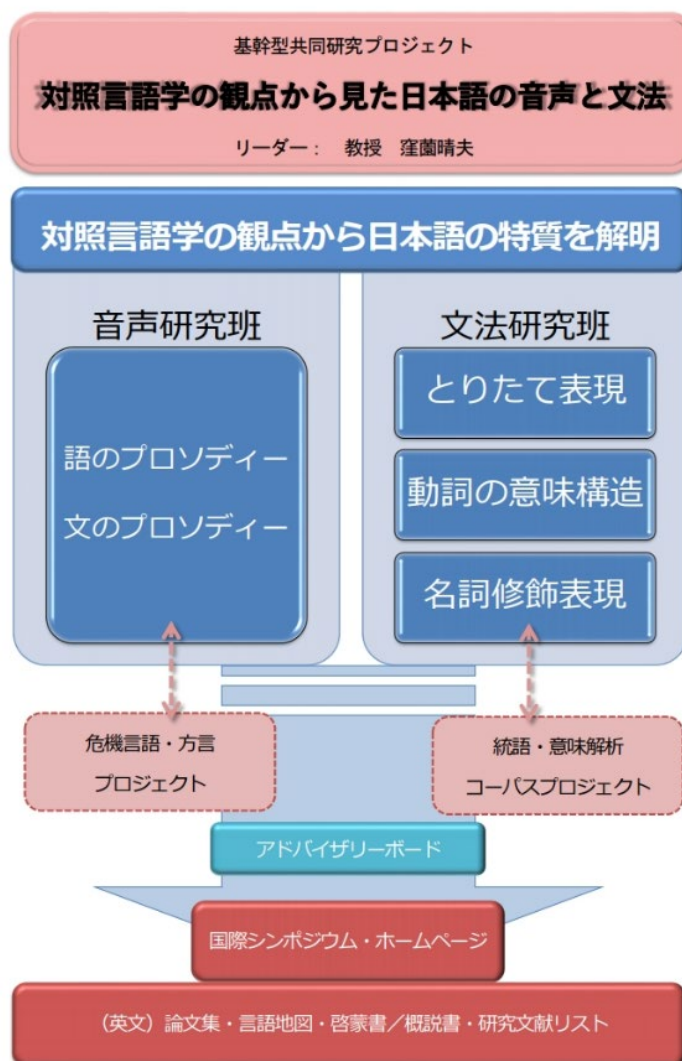
窪園晴夫 (音声)

野田尚史 (とりたて表現)

松本曜 (動詞の意味構造)

プラシャント・パルデシ

および窪田悠介 (名詞修飾表現)



● 年次計画

平成 28 年度（研究プロジェクトの始動）

1. 日英語によるプロジェクト HP を開設し、以後、随時更新する。
2. 若手研究者をプロジェクト PD フェローとして合計 2 名雇用し、研究指導を行う。また日本学術振興会外国人特別研究員（PD）2 名に対して研究指導を行う。
3. 国内外の主要研究者から成るアドバイザリーボードを設置し、プロジェクトの運営や成果発信について随時アドバイスを求める。
4. 研究班、研究テーマごとに研究成果発表会と打合せ会議を年数回開催する。
5. NINJAL 国際シンポジウムとして The 24th Japanese Korean Linguistics Conference (JK 24) (10 月 14~16 日) とオノマトペ国際シンポジウム (12 月 17~18 日) の 2 つを開催する。またその成果の取りまとめ（論文集の編集）に着手する。
6. オノマトペをテーマに一般社会向けの NINJAL フォーラムを開催する（1 月 21 日）。
7. 第二期中期計画期間に着手した『日本語版連濁事典』, Mouton Handbook (Japanese Contrastive Linguistics の巻), *The Phonetics and Phonology of Geminate Consonants, Tonal Change and Neutralization* の編集作業を完了する。
8. 言語地図の立案を開始する（項目・言語の選択, 刊行方法等）。
9. 大学院生向けのチュートリアル（国内）を開催する。
10. 年度末にプロジェクトの合同研究発表会を開催し、客員教員や共同研究員を含めたプロジェクト全体の成果を共有する。

平成 29 年度（研究プロジェクトの展開）

1. 引き続き若手研究者をプロジェクト PD フェローとして合計 2 名雇用し、研究指導を行う。また日本学術振興会特別研究員（PD）1 名に対して研究指導を行う。
2. 研究班ごとに研究成果発表会を年数回開催する。
3. 「プロソディー」と「名詞修飾」をテーマにそれぞれ国際シンポジウムを開催する。
4. 年度末にプロジェクトの合同研究発表会を開催し、客員教員や共同研究員を含めたプロジェクト全体の成果を共有する。
5. Mouton Handbook (Japanese Contrastive Linguistics および Syntax の巻), *Tonal Change and Neutralization* の編集作業を完了する。
6. 前年度に開催した NINJAL 国際シンポジウム 2 件と NINJAL フォーラム 1 件の成果を取りまとめ、それぞれ論文集、啓蒙書として編集を行う。
7. 『移動表現の類型論 II (仮題)』の編集作業を行う。
8. 音声関係の啓蒙書を執筆する（1 冊目）。
9. 言語地図の作成を開始する。

平成 30 年度（研究成果の中間とりまとめ）

1. 引き続き若手研究者をプロジェクト PD フェローとして合計 2 名雇用し、研究指導を行う。
2. 研究班、研究テーマごとに研究成果発表会と打合せ会議を年数回開催する。
3. 年度末にプロジェクトの合同研究発表会 (Prosody and Grammar Festa 3) を開催し、客員教員や共同研究員を含めたプロジェクト全体の成果を共有する。
4. 音声（プロソディー）と文法（移動動詞、動詞の意味構造）に関する国際シンポジウム・ワークショップをそれぞれ開催する。
5. 前年度に開催した「プロソディー」に関する国際ワークショップの論文の編集を行い、出版社に入稿する（公刊は 1 年後）。また「とりたて表現（和文）」「移動表現（和文）」「名詞修飾（和文）」に関

する各論文集の編集作業を進める（公刊は1年後の予定）。

6. 引き続き言語地図の作成用のデータ収集を行う。
7. 大学院生向けのチュートリアルを国内と海外でそれぞれ開催する。

令和元年度（研究プロジェクトの拡充）

1. 若手研究者をプロジェクトPDフェローとして合計2名雇用し、研究指導を行う。
2. 研究班、研究テーマごとに研究成果発表会と打合せ会議を年数回開催する。
3. 年度末にプロジェクトの合同研究発表会（Prosody and Grammar Festa 4）を開催し、客員教員や共同研究員を含めたプロジェクト全体の成果を共有する。
4. 「プロソディー」に関する国際シンポジウムを開催する。また、国際認知言語学会を共催する。
5. 前年度に開催した「移動動詞」に関する国際シンポジウムの成果を研究論文集（英文）として取りまとめる（公刊は1~2年後）。また「動詞の意味構造（和文）」に関する論文集の編集に着手する。
6. 「とりたて表現（和文）」「名詞修飾（和文）」に関する各研究論文集を刊行する。
7. 引き続き言語地図の作成を行う。

令和2年度（研究成果のとりまとめ）

1. 引き続き若手研究者をプロジェクトPDフェローとして合計2名雇用し、研究指導を行う。
2. 研究班、研究テーマごとに成果取りまとめのための研究発表会と打合せ会議を年数回開催する。
3. 年度末にプロジェクトの合同研究発表会（Prosody and Grammar Festa 5）を開催し、客員教員や共同研究員を含めたプロジェクト全体の成果を共有する。
4. 前年度に開催した「プロソディー」に関する国際シンポジウムの成果を英文論文集として取りまとめる（公刊は1~2年後）。また「移動表現（和文）」に関する研究論文集を刊行し、「移動動詞（英文）」「動詞の意味構造（和文）」に関する各論文集の編集作業を完了する。
5. 言語地図の取りまとめを行う。

令和3年度（研究成果の公刊）

1. 引き続き若手研究者をプロジェクトPDフェローとして合計2名雇用し、研究指導を行う。
2. 一般社会向けのNINJALフォーラム（第2回）を開催する。
3. 大学院生向けのチュートリアルを開催する。
4. 「移動動詞（英文）」「動詞の意味構造（和文）」「日本語と言語類型論（和文）」の各論文集を刊行する。
5. 言語地図を公刊（公開）する。

【3年目までの成果物】〔編者〕

1. *Sequential Voicing in Japanese Compounds* (John Benjamins). 2016年6月〔バンス〕
2. 『日本語コーパス活用入門：NINJAL-LWP 実践ガイド』（大修館）2016年7月〔パルデシ〕
3. *The Phonetics and Phonology of Geminate Consonants* (Oxford University Press). 2017年4月〔窪菌〕
4. 『日本語を分析するレッスン』（大修館書店）2017年4月〔野田〕
5. 『オノマトペの謎』（岩波書店）2017年5月〔窪菌〕
6. 『通じない日本語』（平凡社新書）2017年12月〔窪菌〕
7. *Handbook of Japanese Syntax* (De Gruyter Mouton). 2017年12月〔野田〕
8. *Japanese Korean Linguistics 24* (CSLI). 2018年1月〔船越〕
9. *Handbook of Japanese Contrastive Linguistics* (De Gruyter Mouton). 2018年2月〔パルデシ〕
10. *Tonal Change and Neutralization* (De Gruyter Mouton). 2018年3月〔窪菌〕

11. *The Linguistic Review* 36 卷 1 号, 特集 Prosody and Prosodic Interfaces in Japanese and Korean, 2019 年 2 月 [窪菌]

【5 年目までの成果物】 上記に加え次のものを刊行する。

1. 『日本語と世界の言語のとりたて表現』 (くろしお出版) 2019 年 [野田]
2. 『よくわかる言語学』 (ミネルヴァ書房) 2019 年 [窪菌]
3. 『日本語と世界の言語の名詞修飾表現』 (ひつじ書房) 2020 年 [パルデン]
4. *Broader Perspectives on Motion Event Descriptions* (John Benjamins). 2020 年 [松本]
5. 『移動表現の類型論と第二言語習得』 2020 年 [松本]
6. 『動詞の意味と百科事典的知識 (仮題)』 2021 年 [松本]
7. *Motion Event Descriptions from a Cross-Linguistic Perspective*. 2021 年 [松本]
8. 『日本語と言語類型論 (仮題)』 (開拓社) 2021 年度 [窪菌他]
9. 『日本語の歴史的対照文法』 (和泉書院) 2021 年 [野田]

II. 令和元年度活動概要

令和元年度予算総額 29,630 千円

令和元年度 成果の概要

1. 研究に関する計画

対照言語学研究を推進するために、国内研究者 22 人を共同研究員として追加し、国内外あわせて 155 人の組織で事業を遂行した。4 つの研究班ごとの公開研究発表会を計 11 回 (国内学会でのワークショップ 2 回を含む)、4 班合同の発表会 (Prosody and Grammar Festa 4) を 1 回、国際シンポジウム・ワークショップを 8 件開催した。これら 20 件の企画において計 559 件の研究発表が行われ (うち学生が筆頭発表者のもの 169 件)、計 1369 人 (延べ) の参加者が得られた (うち海外機関研究者 508 人、大学院生を含む学生 420 人)。国際シンポジウム・ワークショップのほとんどは国内外の機関 (理化学研究所, 日本音声学会, ソウル大学, カリフォルニア大学, 北京師範大学, デカン大学, ムンバイ大学, 国際認知言語学会) との共同事業として立案・実施したものである。

またプロジェクト全体で図書 6 冊, 論文 65 編 (ブックチャプター 29 編含む), 学術発表・講演 110 件 (一般向け除く) を公開・刊行した (いずれもプロジェクトへの謝辞を記したもののみ)。このうちプロジェクトの所内メンバー (教員 5 名) は 2 冊の図書 (研究論文集 1 冊, 概説書 1 冊), 論文 15 編を刊行し, さらに 7 冊の研究論文集の編集を行った。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

前年度に締結した学術交流協定に基づき, 神戸大学大学院人文学研究科と Kobe-NINJAL-Oxford 言語学コロキウム「日本語研究の最前線」(令和 1 年 7 月 21 日, 神戸大学) と上記の Prosody and Grammar Festa 4 をともに共同開催した。

また平成 31 年 1~3 月に構築した言語地図作成用のデータベースを利用し, 名詞修飾表現の言語地図の試作版を構築し, β 版を内部公開した。文献目録については, 諸言語の移動動詞に関する文献目録 (英文) の増補版 (ver. 3.2) と, 鹿児島県甕島方言の研究文献目録 (和文) をそれぞれ公開した。

この他, 国際シンポジウムの開催や出版企画についてアドバイザーボードのメンバーに意見を求め, その意見をテーマや招待講演者の選定, 出版企画の立案に活用した。

3. 教育に関する計画

若手育成としてPDフェローを2人雇用し、学振PD2人を外来研究員として受け入れ、それぞれ研究指導を行った。またプロジェクト全体で6人の非常勤研究員を雇用し、対照言語学の事業を推進した。

さらに大学院生8人、学振PD4人を共同研究員としてプロジェクトに参画させ、プロジェクト主催の発表会等で研究発表の機会を与えた。また研究発表会や国内／国際シンポジウム・ワークショップ等において延べ169人の大学院生（筆頭発表者）に発表の機会を与え、大学院生20人に対して発表旅費を支援し、加えて計3名の大学院生に対して言語調査の旅費を援助した。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

プロジェクト全体で地域社会と連携した講演を計5件、それ以外の講演を2件行った（プロジェクトへの謝辞を記したもののみ）。このうち所内メンバー（教員5名）は鹿児島県薩摩川内市と交わした連携協定に基づき、同市・甕島の全小学校（5校）において小学生・教員・地元住民を対象として方言講演会を開催し、計298人（小学生156人、教員・一般142人）の参加者を得た。また東京言語研究所主催の小学校～大学教師向けのワークショップ（『教師のためのことばワークショップ』）などにおいて日本語に関する講演を行った。

5. グローバル化に関する計画

国内外において合計8件の国際シンポジウム・ワークショップ等を開催し、合計941人の参加を得た。このうち国内では国際シンポジウム Learning Sounds of Asian Languages（理化学研究所脳神経科学研究センタープロジェクトと共催）、6th International Conference on Phonetics and Phonology（ICPP 2019, カリフォルニア大学と共催）、Pre-IPP Workshop（日本音声学会と共催）、15th International Cognitive Linguistics Conference（国際認知言語学会他と共催）、ワークショップ Lectures on the Japanese language from cognitive/typological perspectives の5件を開催した。海外ではソウル大学との学術交流協定に基づき国際ワークショップ JK 27 Satellite and the 1st NINJAL-SNU Joint Workshop（ソウル大学）を共催し、またインドのブネーで International Workshop on nominalization and noun modification , ムンバイで公開講演会 “What is nominalization? -Towards the theoretical foundations of nominalization” をそれぞれ開催した。

海外の日本語研究者を対象とした NINJAL 日本語学講習会を4ヶ国（中国、インド、ミャンマー、カンボジア）の計5ヶ所で開催し、合計236名の参加者を得た。

また人的交流として海外の研究者5人を外来研究員として受け入れた。

プロジェクト全体では48件、国際会議で研究成果を発表した。このうち所内メンバー（教員5名）は2019 Joint Conference of Linguistic Societies in Korea（慶熙大学）、Neglected Aspects of Motion Event Description (NAMED) 2019（パリ高等師範学校）、上海外国語大学創立70周年記念「新しい時代における日本語文学研究フォーラム」などにおいてそれぞれ招待講演・基調講演を行った。

6. その他

該当する活動なし。

Ⅲ. 項目ごとの状況

1. 研究に関する計画

自己点検評価	計画を大きく上回って実施した
(1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画	
1. 対照言語学研究を推進するために、4つの研究班(下記)ごとの <u>公開研究発表会を計11回(国内学会においてシンポジウム・ワークショップ2回を含む)</u> 、4班合同の発表会(Prosody and Grammar Festa 4)を1回、 <u>国際シンポジウム・ワークショップ等を8回開催した</u> 。これら計20件の企画において計559件の研究発表が行われ(うち学生が筆頭発表者のもの169件)、計1369名(延べ)の参加者が得られた(うち海外機関研究者508人、大学院生を含む学生420人)。	
① このうち、班ごとの研究発表会および国内学会シンポジウム・ワークショップ計11回の内訳は音声研究班が3回(令和1年5月11日、7月21日、11月17日)、とりたて班が1回(令和1年7月28日)、動詞の意味構造班(以下「意味構造班」)が3回(令和1年9月21日、令和2年2月6日、2月17日)、名詞修飾班が4回(令和1年6月23日、9月19日、12月6日、12月17日)であった。これらの発表会に合計341人の参加が得られた(うち海外機関研究者10人、大学院生を含む学生64人)。発表数は合計46件であった。(国内学会シンポジウム・ワークショップの詳細については下記2を参照)。	
② プロジェクト全体の統合を図るために、令和2年2月15-16日に、プロジェクト全体の <u>研究発表会(Prosody and Grammar Festa 4)</u> を開催し、87人の参加者を得た(うち海外機関研究者1人、大学生を含む学生20人)。この合同発表会では「日本語と言語類型論」と題するシンポジウム(発表5件)と6件の口頭発表および15件のポスター発表により、対照言語学および言語類型論に関する研究成果を報告した。	
③ 国際シンポジウム等(計8件)	
・理化学研究所脳神経科学研究センターのプロジェクトと合同で言語獲得に関する国際シンポジウム Learning Sounds of Asian Languages を東京大学で開催した(令和1年7月6日)。参加者は51人(うち海外機関研究者9人)、発表件数は7件(すべて口頭、海外機関研究者による発表5件)であった〔音声研究班〕。	
・前年度に締結したソウル大学人文学部との学術交流協定に基づき、国際ワークショップ(JK 27 Satellite and the 1 st NINJAL-SNU Joint Workshop)をソウル大学で開催した(令和1年10月17日)。参加者は35人、発表件数は5件(口頭、海外機関研究者による発表3件)であった〔音声研究班〕。	
・カリフォルニア大学SPOTプロジェクトとの共催で、The 6 th International Conference on Phonetics and Phonology (ICPP 2019)を開催した(国文学研究資料館、令和1年12月13-15日)。参加者は異なりで128人(うち海外機関研究者48人)、発表件数は61件(口頭16件、ポスター発表45件; うち海外機関研究者による発表38件、学生が筆頭発表者の発表23件)であった〔音声研究班〕。	
・ICPP 2019 前日の12月12日に日本音声学会と共催でPre-ICPP Workshop: Introduction to pitch accent systems around the world を開催した。参加者は48人(うち海外機関研究者26人)、発表件数は5件(口頭、すべて海外機関研究者による発表)であった〔音声研究班〕。	
・The 15 th International Cognitive Linguistics Conference を令和1年8月6-11日に関西学院大学で国際認知言語学会他と共催した。参加者は558人(うち海外機関研究者311人、学生数186人)、発表件数は398件(口頭発表322件、ポスター発表76件; うち海外機関研究者による発表301件)であった〔意味構造班〕。	
・ワークショップ Lectures on the Japanese language from cognitive/typological perspectives	

を The 15th International Cognitive Linguistics Conference のプレイベントとして令和1年8月6日に関西学院大学で開催した。参加者数は55人（うち海外機関研究者45人，学生数20人），発表件数は3件であった〔意味構造班〕。

- ・International Workshop on nominalization and noun modification を Deccan College Post-Graduate and Research Institute（インドPune）で令和1年12月19-20日）で開催した。参加者は48人（うち海外機関研究者45人），発表件数は7件（すべて口頭，うち海外機関研究者による発表3件）であった〔名詞修飾班〕。
- ・公開講演会 “What is nominalization? -Towards the theoretical foundations of nominalization-” を University of Mumbai（インドMumbai）で令和1年12月24日）で開催した。参加者は18人（うち海外機関研究者18人）であった〔名詞修飾班〕。

2. 国内学会において下記のワークショップを企画した。

- ① 日本言語学会第158回大会（令和1年6月22-23日，一橋大学）において国語研の共同利用型研究プロジェクト「大規模コーパスを利用した言語処理の計算心理言語学的研究」と合同でワークショップ「計算心理言語学—概要と展望—」を開催した。参加者は75人であった〔名詞修飾班〕。
- ② 日本言語学会第159回大会（令和1年11月16-17日，名古屋学院大学）において「鹿児島県甕島方言の音声と文法」と題するワークショップを企画・開催した。参加者は45人であった〔音声研究班〕。

3. プロジェクトの所内メンバー（教員5名）が合計2冊の書籍（研究論文集1冊，概説書1冊）を刊行し，さらに7冊の研究論文集の編集を行った。

- ① 音声研究班は共同研究員・客員教員等の協力を得て，言語学の概説書『よくわかる言語学』（窪菌晴夫編，ミネルヴァ書房）を令和1年10月に刊行した。また国際シンポジウムICPP2019の成果を英文論文集として出版すべくOxford University Pressへ出版企画書を提出し，提出原稿の編集作業を開始した。
- ② とりたて班は研究論文集『日本語と世界の言語のとりたて表現』（野田尚史編，くろしお出版）を令和1年11月に刊行した。また，研究論文集『日本語の歴史的対照文法』（野田尚史・小田勝編，和泉書院から令和3年度に刊行予定）の編集を進めた。
- ③ 意味構造班は，*Broader Perspectives on Motion Event Descriptions*（John Benjamins社から令和2年度出版予定）の編集を行った。また『移動表現の類型論と第二言語習得』（くろしお出版から令和2年出版予定）および*Motion Event Descriptions from a Cross-Linguistic Perspective*（Mouton社から出版予定）の執筆・編集を進めた。
- ④ 名詞修飾班は論文集『日本語と世界の言語の名詞修飾表現』（パルデン・プラシャント，堀江薫編，ひつじ書房）の編集を進め，令和1年9月に出版社に原稿を入稿し，校正作業を進めた（出版社の都合により令和2年前半に刊行予定）。
- ⑤ プロジェクト全体の論文集『日本語と言語類型論（仮題）』の執筆陣と出版社（開拓社）を確定し，編集作業を開始した。

4. プロジェクト全体

プロジェクト共同研究員の研究成果も含め，プロジェクト全体で図書6冊と論文65編（ブックチャプター含む）を刊行し，発表・講演を110件行った（いずれもプロジェクトへの謝辞を記したもののみ）。

5. 言語調査

- ・プロソディーの対照研究を推進するために令和1年7月と10月に鹿児島県甕島でそれぞれ方言調査を行った〔音声研究班〕。
- ・令和1年4月，5月（名古屋），8月（インド），9-10月（ウズベキスタン），12月（インド），令和2

年1月（沖縄）で名詞修飾表現に関する調査を行った〔名詞修飾班〕。

- ・トルコで令和1年9月と令和2年3月の2回、エチオピアで令和2年3月に、それぞれ動詞の意味に関する調査を行った〔意味構造班〕。

6. 音声研究班が編集に携わり前年度に刊行された研究論文集『英語学を英語授業に活かす』（開拓社、池内正幸・窪菌晴夫・小菅和也共編）が、『英語教育』2019年10月号（大修館書店）の「2019年度英語教育資料」において「英語学／言語学・今年のベスト3」に選定された。
7. とりたて表現班が編集に携わり平成29年度に刊行された研究論文集 *Handbook of Japanese Syntax* (De Gruyter Mouton 社) が、*Journal of Japanese Linguistics* Volume 35, Issue 2 に掲載された K. Mihara 氏の書評において、"an excellent overview of Japanese syntactic researches, containing both descriptive studies and theoretical studies", "a very well compiled book that helps researchers and (graduate) students" と評された。

(2) 研究実施体制等に関する計画

9. 前年度に締結した神戸大学大学院人文学研究科との学術交流協定に基づき、Kobe-NINJAL-Oxford 言語学コロキウム「日本語研究の最前線」（令和1年7月21日、神戸大学）と、Prosody and Grammar Festa 4（令和2年2月15-16日、神戸大学）をそれぞれ共催した。参加者は前者が38人（うち海外機関研究者3人）、後者が87人（うち海外機関研究者1人）であった。
10. 対照言語学研究を実施するために、国内研究者22人を共同研究員として追加し、国内外あわせて155人の組織でプロジェクトの事業を遂行した（うち大学院生8人、海外研究機関に属する研究者15人）。また海外から5人（米国2人、イギリス、ブルガリア、台湾各1人）を、国内から2人の研究者（ともに学振PD）を外来研究員として受け入れ、共同調査を行った。

「計画を大きく上回って実施した」と自己評価した理由

国内研究会11回（国内学会ワークショップ2回を含む）と国際シンポジウム・ワークショップ8回の開催は計画を大幅に上回るものであった。とりわけ国際シンポジウム・ワークショップについては理化学研究所、日本音声学会などの国内学術機関・団体およびソウル大学、カリフォルニア大学、国際認知言語学会などの国際学術機関・団体とそれぞれ共催できたことは大きな収穫であった。図書を2冊刊行し、7冊の研究論文集の編集作業を行ったことに加え、これまでに刊行した研究論文集に国内外から好意的な第三者評価が得られたことも大きい。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

自己点検評価

計画を上回って実施した

(1) 共同利用・共同研究に関する計画

1. 言語地図
平成31年1～3月に構築した言語地図作成用のデータベースを利用し、名詞修飾表現の言語地図の試作版を構築し、β版を内部公開した〔名詞修飾班〕。
2. 文献目録
諸言語の移動動詞に関する文献目録（英文）の増補改訂を行い、ver. 3.2を令和1年10月31日に公開した〔意味構造班〕。また鹿児島県甑島方言の研究文献目録（和文）を作成し、令和2年1月に公開した〔音声研究班〕。
3. 音声研究班が平成28年度に公開した甑島アクセントデータベースは、方言アクセントの研究に使用さ

れており、年間 618 件のアクセスがあった。

(2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画

4. 神戸大学大学院人文学研究科との学術交流協定に基づき、Kobe-NINJAL-Oxford 言語学コロキウム「日本語研究の最前線」と Prosody and Grammar Festa 4 を共催した（詳細については「1. 研究に関する計画」(2)-1 参照）。
5. ソウル大学人文学部との共催で国際ワークショップ (JK 27 Satellite and the 1st NINJAL-SNU Joint Workshop) をソウル大学で開催した。またカリフォルニア大学 SPOT プロジェクトとの共催で、The 6th International Conference on Phonetics and Phonology (ICPP 2019) を開催した（詳細については「1. 研究に関する計画」(1)-1-③参照）。
6. 「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」プロジェクトと共催を予定していたシンポジウム「日本語文法研究のフロンティア—日本の言語・方言の対照研究を中心に—」（令和 2 年 2 月 29 日）は、2～3 月に予定していた他のイベント同様、コロナウイルスの問題により開催を断念した。
7. 音声研究班は国際シンポジウム ICPP 2019（令和 1 年 12 月 13-15 日）の立案に際し、テーマの設定および講演者の選定等についてアドバイザーボードの意見を求め、それを活用した。名詞修飾班では論文集の刊行についてアドバイザーボードの意見を求め、それを活用した。
8. 理化学研究所脳神経科学研究センターのプロジェクトと合同で国際シンポジウム Learning Sounds of Asian Languages を開催した（詳細については「1. 研究に関する計画」(1)-1-③参照）。

3. 教育に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
(1) 大学院等への教育協力に関する計画 該当する活動なし。	
(2) 人材育成に関する計画 <ol style="list-style-type: none">1. 若手研究者を育成するために、PD フェローを 2 人、非常勤研究員を 6 人雇用した。2. 大学院生 8 人、学振 PD4 人を共同研究員としてプロジェクトに参画させた。3. プロジェクトが企画したイベント（研究発表会、シンポジウム・ワークショップ他）において合計 169 人の大学院生（筆頭発表者）に発表の機会を提供した。4. 大学院生 3 人に対して調査旅費を、20 人に成果発表の旅費を支援した。5. 国語研オープンハウス（令和 1 年 7 月 20 日、国語研）において大学生・大学院生向けのポスター発表を 5 件行った。	

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

自己点検評価	計画どおりに実施した
(1) 産業界や地域社会との連携に関する計画 <ol style="list-style-type: none">1. 鹿児島県薩摩川内市と同市甕島の方言保存を主目的とした連携協定を締結した（令和 1 年 5 月 28 日）。この協定に基づき、甕島の全小学校（5 校）において小学生・教員・地元住民を対象として「甕島方言の大切さ」と題する講演を行った（令和 1 年 7 月 13 日、10 月 11-12 日）。参加者は計 298 人（小学生 156 人、教員・一般 142 人）であった。	

(2) 研究成果の社会への普及に関する計画

- 上記1の社会連携による講演および下記2の現役教師向けの講演とは別に、プロジェクト全体で一般社会人向け講演を3件行った（プロジェクトへの謝辞を記したもののみ）。
- 現役教師向け講演会等
上記の講演とは別に、現役教師の学び直しのための講演・講習をプロジェクト全体で27件行った（プロジェクトへの謝辞を記したもののみ）。所内メンバー（教員5名）の主な業績は次のとおりである。
 - 講演「教科横断的なことばの教育」（東京言語研究所主催第9回『教師のためのことばワークショップ』（令和1年8月17日）〔音声研究班〕。
 - アジア4ヶ国計5ヶ所で開催した日本語学講習会では受講者の中に日本語教師が多数含まれていた（詳細については「5. その他：グローバル化（2）-1-⑨」参照）〔名詞修飾班〕。

5. その他の目標を達成するための措置

(1) グローバル化に関する目標を達成するための措置

自己点検評価	計画を大きく上回って実施した
(1) 国際的協業に関する計画	
1. 海外の研究者5人（米国2名、イギリス・ブルガリア・台湾各1人）を外来研究員として受け入れた。	
(2) 国際的発信に関する計画	
2. 下記の8件の国際シンポジウム・ワークショップ・講演会（①～⑧）と計5件の海外日本語学講習会⑨を開催し（②⑦⑧⑨は海外で開催）、合計1177人の参加者を得た。 <ul style="list-style-type: none">①理化学研究所脳神経科学研究センターのプロジェクトと合同で言語獲得に関する国際シンポジウム Learning Sounds of Asian Languages を東京大学で開催した（詳細については「1. 研究に関する計画」(1)-1-③参照）。②ソウル大学人文学部との共催で国際ワークショップ(JK 27 Satellite and the 1st NINJAL-SNU Joint Workshop)をソウル大学で開催した（詳細については「1. 研究に関する計画」(1)-1-③参照）。③カリフォルニア大学との共催でICPP 2019 (6th International Conference on Phonetics and Phonology)を国文学研究資料館で開催した（詳細については「1. 研究に関する計画」(1)-1-③参照）。④日本音声学会と共催でPre-ICPP Workshop を国語研で開催した（詳細については「1. 研究に関する計画」(1)-1-③参照）。⑤国際認知言語学会他と共催でThe 15th International Cognitive Linguistics Conference を関西学院大学で開催した（詳細については「1. 研究に関する計画」(1)-1-③参照）。⑥ワークショップ Lectures on the Japanese language from cognitive/typological perspectives を関西学院大学で開催した（詳細については「1. 研究に関する計画」(1)-1-③参照）。⑦International Workshop on nominalization and noun modification をインドのDeccan College Post-Graduate and Research Institute で開催した（詳細については「1. 研究に関する計画」(1)-1-③参照）。⑧公開講演会 “What is nominalization? –Towards the theoretical foundations of nominalization” をインドのムンバイ大学で開催した（詳細については「1. 研究に関する計画」(1)-1-③参照）。⑨海外の日本語研究者（日本語教師・日本語学習者を含む）向けのNINJAL日本語学講習会を以下の4ヶ国、計5ヶ所で開催し、合計236名の参加者を得た〔名詞修飾班〕。<ul style="list-style-type: none">中国（北京師範大学）（令和1年11月2日、参加者32名）。	

- ・インド(Symbiosis Institute of Foreign & Indian Languages , Pune) (令和1年12月21-22日, 参加者81名) ;
- ・ミャンマーのヤンゴン (令和2年2月9日, 参加者69名), マンダレー (令和2年2月12日, 参加者40名)。
- ・カンボジア (令和2年2月29日, 参加者14名)。

3. 国際出版

3冊の英文研究論文集 (*Broader Perspectives on Motion Event Descriptions*, John Benjamins, *Motion Event Descriptions from a Cross-Linguistic Perspective* および *Prosody and Prosodic Interfaces* の編集を行った (詳しくは「1. 研究に関する計画」(1)-3参照)。また同じく所内メンバー (教員5名) が下記を含む5編の論文を海外のジャーナル・論文集に発表した。

- ・H. Kubozono, The phonological structure of Japanese mimetics and motherese. In Akita Kimi and Prashant Pardeshi (eds.) *Ideophones, Mimetics and Expressives*, 35-56. John Benjamins.
- ・H. Noda, El tema en las oraciones del español y el japonés. In Toshihiro Takagaki (ed.) *Exploraciones de la lingüística contrastiva español-japonés*, 131-150. Ediciones Universidad Autónoma de Madrid.
- ・Y. Kubota and R. Levine, Modal auxiliaries and negation: A type-logical account. *Proceedings of WoLLIC 2019*, 415-432. Springer.
- ・Y. Kubota, et al., Underspecification and interpretive parallelism in Dependent Type Semantics. *Proceedings of the IWCS 2019 Workshop on Computing Semantics with Types, Frames and Related Structures*, 1-9.

4. 国際発表

共同研究員を含めたプロジェクト全体で48件, 国際会議で成果発表を行った (プロジェクトへの謝辞を記したもののみ。所内メンバー (教員5名) の主な業績は次のとおりである。

- ・国際会議 19th International Congress of Phonetic Sciences (ICPhS 2019, オーストラリア・メルボルン) [音声研究班 (窪田)]。
- ・国際ワークショップ JK 27 Satellite and the 1st NINJAL-SNU Joint Workshop (ソウル大学) [音声研究班 (窪田)]。
- ・6th NINJAL ICPP (国文学研究資料館) [音声研究班 (窪田)]。
- ・上海外国語大学創立70周年記念「新しい時代における日本語学研究会フォーラム」[とりたて班 (野田)]。
- ・国際会議 The 15th International Cognitive Linguistics Conference (関西学院大学) [意味構造班 (松本)]。
- ・国際会議 13th Conference of the Association for Linguistic Typology (パヴィア大学) [意味構造班 (松本)]。
- ・国際ワークショップ NAMED 2019 (パリ高等師範学校) [意味構造班 (松本)]。
- ・2019 Joint Conference of Linguistic Societies in Korea (慶熙大学) [名詞修飾班 (窪田)]。
- ・Japanese and Korean Linguistics 2019 (西江大学) [名詞修飾班 (窪田)]。
 - ・WoLLIC 2019. (ユトレヒト大学) [名詞修飾班 (窪田)]。
- ・Workshop at the 13th International Conference on Computational Semantics (IWCS 2019) (Gothenburg 大学) [名詞修飾班 (窪田)]。

5. 文献目録 (英語) の公開

移動動詞に関する文献目録(英文)を増補改訂し公開した(「2. 共同利用・共同研究に関する計画(1)-2」参照)。

「計画を大きく上回って実施した」と自己評価した理由

計8件の国際シンポジウム・ワークショップと計5回の海外日本語学講習会は、いずれも計画を大きく上回るものであった。これらの企画の多くが国内外の研究機関・学会との共同事業であり、国際的な連携を深めることに成功した。また国際シンポジウム・ワークショップでの発表も計画を上回る成果であった。

6. その他

該当する活動なし。

令和元年度の評価

《評価結果》

計画を上回って実施している

今年度は、研究面およびグローバル化の内容において、自己評価にある通り、Sに相当する成果が挙げられている。特に、国際シンポジウムの開催は当初の計画を超えて行われており、高く評価される。研究論文集『日本語と世界の言語のとりたて表現』(野田尚史編, 計368頁。くろしお出版, 令和元年11月16日刊), 言語学概説書『よくわかる言語学』(窪菌晴夫編著, 計232頁, ミネルヴァ書房, 令和元年10月31日刊)などの著作なども刊行されている。

教育面, 社会貢献面については講習会, 講演会などが行われ, 計画通りの遂行, すなわちBの評価と見なすことができる。ただし, その内容は高く評価できるものである。

一部にイベント中止や出版刊行の遅れなどもあるようであるが, それぞれの事情は十分に理解できるものであり, もって計画通りの進行でないとすべきものではない。以上から, 全体として計画を上回った実施というAの評価が妥当だと思われる。

《各項目別》

1. 研究について

今回, 出版関係では, 研究論文集『日本語と世界の言語のとりたて表現』(野田尚史編, 計368頁。くろしお出版, 令和元年11月16日刊)および言語学概説書『よくわかる言語学』(窪菌晴夫編著, 計232頁, ミネルヴァ書房, 令和元年10月31日刊)の著作の刊行があった。このほか, Broader Perspectives on Motion Event Descriptions, John Benjamins, Motion Event Descriptions from a Cross-Linguistic Perspective および Prosody and Prosodic Interfaces の編集など, 英語での論文編集ということも評価される。「移動表現」に関する研究論文集刊行なども含め, それぞれの分野での研究発表が進められている。

研究発表関係では, 特に, 言語獲得に関する国際シンポジウム Learning Sounds of Asian Languages, ICPP 2019 (6th International Conference on Phonetics and Phonology) およびそのプレワークショップなど, 国際的な共催ワークショップが多数開催されている。これは当初計画の「複数件」ということを超えて実施されている。

名詞修飾に関する研究論集の刊行は現時点では出版社の都合などでまだ実現を見ていないようだが, すでに入稿等を済ませているとのことであり, もって低い評価とするには当たらないと判断し

た。データベース関係でも、名詞修飾表現の言語地図の試作版を構築し、β版を内部公開した由であり、着実に研究が進められていることがうかがえる。

以上から、S評価に近いA評価に相当すると言える。

2. 共同利用・共同研究について

神戸大学大学院人文学研究科との学術交流協定、ソウル大学、カリフォルニア大学と連携した国際シンポジウム・ワークショップ、など、国内外の学術交流がなされていることは注目され、当初計画を上回る成果と言える。

様々な学会やプロジェクトとの共催も盛んであり、共同利用機関として期待される役割が果たされていると思われる。

なお、移動動詞に関する文献目録（英文）の増補改訂、鹿児島県甕島方言の研究文献目録（和文）データベースの構築などデータベース関係の作業も進められている。

なお、シンポジウム「日本語文法研究のフロンティア—日本の言語・方言の対照研究を中心に—」（令和2年2月29日）など、2～3月に予定されていたイベントがコロナウイルスの問題により開催されていないが、これは社会状況のやむをえない事情であって、もって計画通りの遂行を果たしていないと判断するには当たらない。全体として計画通りの遂行（B評価）と判断される。

3. 教育について

若手育成としてPDフェローを2人雇用し、学振PD2人を外来研究員として受け入れ、それぞれ研究指導を行っている。またプロジェクト全体で6人の非常勤研究員を雇用し、対照言語学の事業を推進した、ということであり、研究者の育成に貢献している。

さらに大学院生8人、学振PD4人を共同研究員としてプロジェクトに参画させ、プロジェクト主催の発表会等で研究発表の機会を与えたほか、研究発表会や国内／国際シンポジウム・ワークショップ等において延べ169人の大学院生（筆頭発表者）に発表の機会を与え、大学院生20人に対して発表旅費を支援し、加えて計3名の大学院生に対して言語調査の旅費を援助したという。これらは計画通りと見なされる。以上から全体評価として、B評価ができる。

研究者をめざす大学院生は国内外を問わず、いろいろな大学院に所属している。その点で、関連する特定の大学との連携だけでなく、広く、インターネット環境などを利用したチュートリアルのようなみんなが参加できるような教育の重要性は高くなっている。そうした広い取り組みの充実も今後大きく期待されるであろう。

4. 社会との連携及び社会貢献について

甕島の全小学校（5校）においての小学生・教員・地元住民を対象とした「甕島方言の大切さ」と題する講演会など、方言講演会などの活動は極めて重要である。今回計画通りの遂行と考えてよい。また、こうした講演会活動も大切にしつつ、ほかにインターネットなどを通じた常統的な情報発信や、地域の行政と連携した取り組みなどもさらに期待されるであろう。

海外での日本語学講習会などの活動（下記5と関わる）も計画通りに多数遂行されており、日本語教育への貢献も見られる。また、「教科横断的なことばの教育」など、学校教育への貢献が見られることなど、その広がりにも注目したい。こういった状況はB評価と判断されるが、内実として、A評価に近いもののようにも思われる。

5. グローバル化について

国際シンポジウム Learning Sounds of Asian Languages (理化学研究所脳神経科学研究センタープロジェクトと共催), 6th International Conference on Phonetics and Phonology (ICPP 2019, カリフォルニア大学と共催), Pre-IPP Workshop (日本音声学会と共催), 15th International Cognitive Linguistics Conference (国際認知言語学会他と共催), ワークショップ Lectures on the Japanese language from cognitive/typological perspectives, ソウル大学との国際ワークショップ JK 27 Satellite and the 1st NINJAL-SNU Joint Workshop, インドでの International Workshop on nominalization and noun modification, ムンバイでの公開講演会 “What is nominalization? -Towards the theoretical foundations of nominalization”, というように, 国際シンポジウムやワークショップが計 8 回ある。様々な共催を通じて, 積極的に海外での発信をしている点は高く評価される。論文執筆についても, 5 編の論文を海外のジャーナル・論文集に発表しており, 高く評価される。

また, 上記「4 社会貢献」とも関わるが, 中国, インド, ミャンマー, カンボジアなどでの日本語講習会は, 計 5 回行われており, 海外での日本語教育の振興に関わる重要な貢献である。このほか, 海外での研究発表, 講演なども多数なされている。こうした成果は計画を大きく上回るものであり, S 評価に相当するものと評価される。

6. その他特記事項

特になし。

統語・意味解析コーパスの開発とそれに基づく言語研究 プロジェクトリーダー：プラシャント・パルデシ

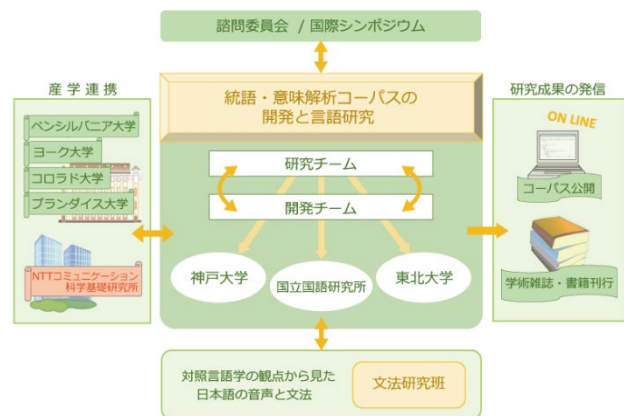
I. プロジェクトの概要

1. 目的及び特色

現在世界の主要言語について Penn Treebank 方式の統語解析情報付きコーパス（ツリーバンク）が作られ、言語学および言語処理の研究に目覚ましい成果を挙げている。しかし日本語については十分な規模の公開されたツリーバンクは存在しない。

本プロジェクトでは、上記のような日本語研究の遅れを挽回し、多様な日本語の機能語、句、節および複雑な構文を大量の言語データから検索・抽出して研究することを可能とする統語・意味解析情報付き日本語構造体コーパス NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ)・Keyaki Treebank/Kainoki Treebank/Kusunoki Treebank の構築に加えて、述語項構造解析のために必要となる意味役割情報を付与するコーパスの開発も試みる。さらに、このコーパスを利用して、日本語の研究を行い、その成果を国内外に向けて発信する。コーパスの共同利用の推進の一環として、最終年度までに5~6 万文規模のコーパスを完成させる予定であり、言語処理の技術を持たない人でも簡単に利用できるインターフェースとともに、国立国語研究所のホームページから一般公開する。また、日本語に堪能でない海外の研究者にも本コーパスを利用できるようにローマ字版も用意する。

上記の目的を達成するために、本プロジェクトでは、右図の示すように、日本国内外の研究者から構成される研究班に加えて国立国語研究所、東北大学、神戸大学にコーパス開発班を設け、それらの班が相互に連携しながら開発と研究を進める。また、日本語研究の国際化を目指して、世界のコーパス言語学研究の最前線で活躍している海外の研究者および日本国内の中堅研究者で Advisory Board を構成し、このメンバーのアドバイスを中心に諸企画の方針・方向を決定し、国際的研究ネットワークの構築を図る。また、国際シンポジウムなどを開催し、その成果を海外の定評のある出版社・研究雑誌を通じて発信する。



2. 年次計画（ロードマップ）

● 全体計画

- ・コーパス開発：6年間で5~6 万文規模の統語・意味解析コーパスを完成させ、一般公開する。
- ・日本語に堪能でない海外の研究者にも本コーパスを利用できるようにローマ字版も提供する。
- ・コーパス使用の利便性を図るために複数の検索ツール（インターフェース）を提供する。
- ・統語・意味解析コーパスに基づく研究を行い、研究成果を国内外に発信する。

● 年次計画

平成 28 年度：研究プロジェクトの始動（1 年目）

1. プロジェクト HP（日英版）を開設・公開し、随時更新する。
2. 若手研究者の育成の一環として PD フェローを雇用し、研究指導を行う。
3. 非常勤研究員を数名雇用し、アノテーション作業を行う。
4. 研究班と開発班の合同研究会を年数回、国内各地の大学で開催し、若手研究者にも積極的に参加してもらう。
5. 国内外の学会で研究発表を行う。
6. 国内外の主要研究者から成るアドバイザーボードを設置し、プロジェクトの運営や成果発信について随時アドバイスを求める。
7. インターネットを通じてアノテーション作業が円滑に行える環境を海外の研究者と連携しながら構築する。
8. 海外の大学と研究交流協定を結ぶ。
9. 日英版のユーザーフレンドリーなインターフェースを構築し、NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパスと合わせて公開する（1 万文）。
10. 2013 年 12 月に開催した NINJAL 国際シンポジウム MYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES の研究成果を取りまとめ、論文集を編集する。
11. 2016 年 12 月に開催した NINJAL 国際シンポジウム Mimetics in Japanese and other language of the world の研究成果を取りまとめ、論文集を編集する。

平成 29 年度：研究プロジェクトの推進（2 年目）

1. プロジェクト HP（日英版）を開設・公開し、随時更新する。
2. 若手研究者の育成の一環として PD フェローを雇用し、研究指導を行う。
3. 非常勤研究員を数名雇用し、アノテーション作業を行う。
4. 研究班と開発班の合同研究会を年数回国内各地の大学で開催し、若手研究者にも積極的に参加してもらう。
5. 国内外の学会で研究発表を行う。
6. 国際シンポジウム (Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing) を企画し、実施する。研究成果の編集を開始する。
7. NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパスに 1 万文を追加し、合計 2 万文のデータを公開する。
8. 2013 年 12 月に開催した NINJAL 国際シンポジウム MYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES の研究成果を取りまとめ、論文集を編集する。
9. 2016 年 12 月に開催した NINJAL 国際シンポジウム Mimetics in Japanese and other language of the world の研究成果を取りまとめ、論文集を編集する。

平成 30 年度：研究成果の中間とりまとめ（3 年目）

1. プロジェクト HP（日英版）を開設・公開し、随時更新する。
2. 若手研究者の育成の一環として PD フェローを雇用し、研究指導を行う。
3. 非常勤研究員を数名雇用し、アノテーション作業を行う。
4. 研究班と開発班の合同研究会を年数回国内各地の大学で開催し、若手研究者にも積極的に参加してもらう。
5. 国内外の学会で研究発表を行う。

6. NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパスに1万文を追加し、合計3万文のデータを公開する。
7. 大学院生向けの統語コーパス利用講習会(チュートリアル)を2回開催する(内一回はNINJALチュートリアル)。
8. アノテーションマニュアル試作版作成・ウェブ公開する。
9. インターフェースの開発・改良を続行する。
10. 国際シンポジウム(Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing)の研究成果をとりまとめ、プロジェクトの内部と外部の査読者によるレビューを経た後に、海外の定評のある研究雑誌LILT(LINGUISTIC ISSUES IN LANGUAGE TECHNOLOGY)に提出する。
11. 日本語の統語論の教育に特化した*Analyzing Japanese Syntax: A Generative Perspective*を執筆し、この教材の練習問題をNPCMJコーパスを利用して解くための仕組みを模索する。
12. 幼児の発話データへの統語意味解析情報付与のための研究(宮田Susanne教授との共同研究)を開始する。
13. 述語と機能語に対する詳細な形態論情報付与のための研究(宮田Susanne教授との共同研究)を開始する。
14. 日本語学習者のコミュニケーション(リソース開発班基本動詞ハンドブック作成グループ)、科研プロジェクト「統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究:複文を中心に」および科研プロジェクト「準均衡超大規模日本語コーパスと高速検索ツールの開発」と連携し、「文型バンク」の開発・公開を進める。
15. 2013年12月に開催したNINJAL国際シンポジウムMYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGESの研究成果を取りまとめ、論文集を編集する。
16. 2016年12月に開催したNINJAL国際シンポジウムMimetics in Japanese and other language of the worldの研究成果を取りまとめ、論文集を編集する。

令和元年度:研究プロジェクトの拡充(4年目)

1. プロジェクトHP(日英版)を開設・公開し、随時更新する。
2. 若手研究者の育成の一環としてPDフェローを雇用し、研究指導を行う。
3. 非常勤研究員を数名雇用し、アノテーション作業を行う。
4. 研究班と開発班の合同研究会を年数回国内各地の大学で開催し、若手研究者にも積極的に参加してもらう。
5. 国内外の学会で研究発表を行う。
6. NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパスに1万文を追加し、合計4万文のデータを公開する。
7. 大学院生向けの統語コーパス利用講習会(チュートリアル)を開催。
8. 日本語の統語論の教育に特化した*Analyzing Japanese Syntax: A Generative Perspective*を刊行し、併せて、この教材の練習問題をNPCMJコーパスを利用して解くための仕組みも公開する。
9. アノテーションマニュアルの改訂・ウェブ公開
10. 幼児の発話データへの統語意味解析情報付与のための研究(宮田Susanne教授との共同研究)を継続し、CHILDES(Child Language Data Exchange System)と連携してデータを公開する。
11. 述語と機能語に対する詳細な形態論情報付与のための研究(宮田Susanne教授との共同研究)を継続する。
12. インターフェースの開発・改良を続行する。

13. 岡山大学（竹内研究室）と連携し、述語構造シソーラス（Predicate-Argument Structure Thesaurus (PT)）で分析された意味役割とフレームの情報を統語・意味コーパス NPCMJ に加える。
14. 2013 年 12 月に開催した NINJAL 国際シンポジウム MYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES の研究成果の編集を完了・出版社（Oxford Univ. Press）に入稿する（刊行時期は出版社の都合によるもの）。
15. 2016 年 12 月に開催した NINJAL 国際シンポジウム Mimetics in Japanese and other language of the world の研究成果を出版社（John Benjamins）に入稿する。（刊行時期は出版社の都合によるもの）。
16. 2017 年 12 月に開催した NINJAL 国際シンポジウム Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing の研究成果をとりまとめ、プロジェクトの内部と外部の査読者によるレビューを完了し、海外の定評のある研究雑誌 LILT (*LINGUISTIC ISSUES IN LANGUAGE TECHNOLOGY*) に提出する。
17. 日本語学習者のコミュニケーション（リソース開発班基本動詞ハンドブック作成グループ）、科研プロジェクト「統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究：複文を中心に」および科研プロジェクト「準均衡超大規模日本語コーパスと高速検索ツールの開発」と連携し、「文型バンク」の開発・公開を進める。

令和 2 年度：研究成果のとりまとめ（5 年目）

1. プロジェクト HP（日英版）を開設・公開し、随時更新する。
2. 若手研究者の育成の一環として PD フェローを雇用し、研究指導を行う。
3. 非常勤研究員を数名雇用し、アノテーション作業を行う。
4. 研究班と開発班の合同研究会を年数回国内各地の大学で開催し、若手研究者にも積極的に参加してもらおう。
5. 国内外の学会で研究発表を行う。
6. NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパスに 1 万文を追加し、合計 5 万文のデータを公開する。
7. 大学院生向けの統語コーパス利用講習会（チュートリアル）を開催する。
8. アノテーションマニュアルの改訂・ウェブ公開
9. インターフェースの開発・改良を続行する。
10. 統語意味解析情報を付与した幼児の発話データの公開（宮田 Susanne 教授との共同研究）
11. 述語と機能語に対して詳細な形態論情報の付与されたデータを公開（宮田 Susanne 教授との共同研究）
12. 岡山大学（竹内研究室）と連携し、述語構造シソーラス（Predicate-Argument Structure Thesaurus (PT)）で分析された意味役割とフレームの情報を統語・意味コーパス NPCMJ に加える。
13. 日本語学習者のコミュニケーション（リソース開発班基本動詞ハンドブック作成グループ）、科研プロジェクト「統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究：複文を中心に」および科研プロジェクト「準均衡超大規模日本語コーパスと高速検索ツールの開発」と連携し、「文型バンク」の開発・公開を進める。

令和 3 年度：研究成果の公開（6 年目）

1. プロジェクト HP（日英版）を開設・公開し、随時更新する。
2. 若手研究者の育成の一環として PD フェローを雇用し、研究指導を行う。
3. 非常勤研究員を数名雇用し、アノテーション作業を行う。
4. 研究班と開発班の合同研究会を年数回国内各地の大学で開催し、若手研究者にも積極的に参加してもらおう。

5. 国内外の学会で研究発表を行う。
6. NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパスに1万文を追加し、合計6万文のデータを公開する。
7. 大学院生向けの統語コーパス利用講習会（チュートリアル）を開催する。
8. アノテーションマニュアルの改訂・ウェブ公開
9. 岡山大学（竹内研究室）と連携し、述語構造シソーラス (Predicate-Argument Structure Thesaurus (PT)) で分析された意味役割とフレームの情報を統語・意味コーパス NPCMJ に加える。
10. 統語意味解析情報を付与した幼児の発話データの公開（宮田 Susanne 教授との共同研究）
11. 日本語学習者のコミュニケーション（リソース開発班基本動詞ハンドブック作成グループ），科研プロジェクト「統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究：複文を中心に」および科研プロジェクト「準均衡超大規模日本語コーパスと高速検索ツールの開発」と連携し、「文型バンク」の開発・公開を進める。

【3年までの成果物】

- ・ NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパス（3万文）を初心者から上級者まで様々な利用が可能な各種検索インターフェースと共に公開。
- ・ NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパス（3万文）をユーザーフレンドリーなインターフェースと共に公開。

【5年までの成果物】

- ・ 海外の定評のある研究雑誌の特集号または論文集：「NINJAL 国際シンポジウム Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing の研究成果（論文集）の刊行 (LILT (LINGUISTIC ISSUES IN LANGUAGE TECHNOLOGY))」
- ・ NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパス（5万文）をユーザーフレンドリーなインターフェースと共に公開。
- ・ 日本語の統語論の教育に特化した入門書 *Analyzing Japanese Syntax: A Generative Perspective* の刊行
- ・ 日本語学習者のコミュニケーション（リソース開発班基本動詞ハンドブック作成グループ），科研プロジェクト「統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究：複文を中心に」および科研プロジェクト「準均衡超大規模日本語コーパスと高速検索ツールの開発」と連携し開発した「文型バンク」（ウェブ版）。
- ・ NINJAL 国際シンポジウム MYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES の研究成果（論文集）の刊行 (Oxford Univ. Press)
- ・ NINJAL 国際シンポジウム Mimetics in Japanese and other language of the world の研究成果（論文集）の刊行 (John Benjamins)

6年間のロードマップ

	28年度	29年度	30年度	元年度	2年度	3年度
データ	統語・意味解析コーパス(NPCMJ)を毎年1万文(計6万文)作成および一般公開					
シンポジウム等	国内外の学会で研究発表	国際シンポジウム開催, 国内外の学会で研究発表	国内外の学会で研究発表	国内外の学会で研究発表	国内外の学会で研究発表	国内外の学会で研究発表
	毎年2回公開研究発表会開催					
講習会等	毎年2回統語コーパス利用講習会					
刊行・出版			国際シンポジウムの成果を刊行, アノテーションマニユアル試作版作成	アノテーションマニユアルの改訂・ウェブ公開	啓蒙書・普及書を刊行, アノテーションマニユアルの改訂・ウェブ公開	アノテーションマニユアルの改訂・ウェブ公開

II. 令和元年度活動概要

令和元年度予算総額 28,000 千円

令和元年度 成果の概要

1. 研究に関する計画

統語・意味解析コーパスの開発と言語研究を推進するために、プロジェクト共同研究者47人（アドバイザーを含む、うちPDフェロー1名、大学院生5名）の組織でコーパス開発とコーパスに基づく言語研究を遂行した。公開研究発表会を計2回開催し、さらに学会におけるワークショップおよびシンポジウムをそれぞれ1回、企画・開催し、国内外で個別発表も行った。これらの企画において計20件の研究発表が行われ、6件の論文が刊行された。また、①NINJAL 国際シンポジウム Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing (2017年度) および②NINJAL 国際シンポジウム Mimetics in Japanese and other language of the world (2016年度) の研究成果が海外の著名な出版社から刊行された。

加えて、NINJAL 国際シンポジウムの MYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES (2013年度) の研究成果の編集作業が終了し、Oxford University Press によるレビューを経て刊行することが決定した（“Verb-Verb Complexes in Asian Languages”）。さらに、日本語統語論の教育に特化した *Analyzing Japanese Syntax: A Generative Perspective* の執筆（岸本著）が終了し、この教材の練習問題を、NPCMJ コーパスを利用して解くための仕組み（試作版）の開発が完了した。書籍の刊行に合わせて公開する予定である。

共同研究者の宮田 Susanne 教授の主導する CHILDES (Child Language Data Exchange System) と連携し、①日本語を第一言語として獲得する幼児の発話データへの統語意味解析情報付与のための研究、②CHILDES の仕組みを利用した NPCMJ に対する精密な形態論情報付与に関する研究を開始した。①の具体例として、大久保 (1967) のデータにアノテーションを付与し、CHILDES で NINJAL-Okubo データとして公開した。さらに、岡山大学竹内研究室と連携し、公開中の NPCMJ コーパスの一部のデータに意味役割とフレームの情報

を付加し、内部公開した。今後確認・修正などを経て一般公開する予定である。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

国内外の主要研究者から成るアドバイザーボードと相談しながらアノテーションの質的な拡充を行った。共同利用の推進のために、コーパスの構築の面において、NPCMJ コーパスに新たなデータ 1 万文を追加し、総データ量を 4 万文に増やし、公開した（2017 年の公開から 2020 年 3 月 25 日現在のアクセス統計：ユーザー数 11,940、ページビュー数 250,503 (Google Analytics 統計)）。また、コーパスの利用を推進するために NPCMJ コーパス利用講習会を国内の大学で 2 回開催した。これらの講習会に 51 名の参加者（うち大学院生を含む学生 17 名）があった。さらに、日本語学習者のコミュニケーション（リソース開発班基本動詞ハンドブック作成グループ）、科研プロジェクト「統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究：複文を中心に」および科研プロジェクト「準均衡超大規模日本語コーパスと高速検索ツールの開発」と連携し、「文型バンク」の開発・公開を進めた。初級の文型 200 件に意味解説を追加し、インターフェースとともに公開した。大久保（1967）のデータにアノテーションを付与し、CHILDES で NINJAL-Okubo データとして公開した。

3. 教育に関する計画

PD フェロワー 1 人、および大学院生 5 名を非常勤研究員として雇用し、アノテーション作業や共同研究における発表の機会を提供することによって若手研究者を育成した。また、研究所で雇用されている非常勤研究員の国内外での学会発表の経費を援助した。さらに、統語コーパス利用講習会を 2 回開催し、コーパス利用に関するノウハウを提供した。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

NPCMJ コーパスをオンラインで公開し、研究に目的を絞らない、幅広い層の人々からの利用促進に努めた。インターフェースの開発だけでなく、オンラインドキュメンテーション、ユーザーズマニュアルを充実させ、コーパスにより容易にアクセスができるようにした。

5. グローバル化に関する計画

国際シンポジウム 3 件 (Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing, MYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES, Mimetics in Japanese and other language of the world) の研究成果の編集作業を進め、3 件のうち 2 件が刊行され、残る 1 件も Oxford University Press から刊行することが決まった。国際会議において研究成果を 2 件発表した。また、日本語の統語論の教育に特化した Analyzing Japanese Syntax: A Generative Perspective の執筆を完了させ、出版社に入稿し、念校の確認まで作業を進めた（来年度刊行予定）。加えて、NPCMJ コーパスの漢字仮名交じりデータをローマ字化した形でも公開している。また、検索インターフェースを含めたウェブサイトはすべて日本語と英語の 2 言語で作成されている。

6. その他

該当する活動なし。

Ⅲ. 項目ごとの状況

1. 研究に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
<p>(1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画</p> <p>1. 統語・意味解析コーパスに1万文のデータを追加し、複数のインターフェースとともに公開した。コーパスの開発と言語研究を推進するために、研究発表会を2回開催し、さらに学会におけるワークショップおよびシンポジウムをそれぞれ1回、企画・開催した。</p> <p>● 研究発表会</p> <p>① 第1回研究発表会（2019年5月12日、弘前大学創立50周年記念会館（参加者数18人、うち大学院生を含む学生4人）。</p> <p>② 第2回研究発表会（2019年6月15日、お茶の水女子大学（参加者数19人、うち大学院生を含む学生6人）。</p> <p>● 学会におけるワークショップ、シンポジウム</p> <p>③ 言語科学会第21回国際年次大会(JSLS2019)ワークショップ（2019年7月7日）東北大学川内キャンパスを企画・実施（参加者数82人）（発表の詳細は資料1.4）</p> <p>④ 関西言語学会第44回大会シンポジウム「高度文法情報付きコーパスとその日本語研究への応用」（2019年7月14日）関西大学（参加者数58人）（発表の詳細は以下資料1.5）</p> <p>2. 検索インターフェースのマニュアル（ユーザーズガイド）の日本語版と英語版およびNPCMJアノテーションマニュアル（第1～13節；14節以降は準備中）をプロジェクトのホームページで公開した。</p> <p>3. NPCMJコーパスに基づく研究の成果として、国内外の学会、プロジェクトの公開研究会等で以下の成果を発表した。</p> <p>● 国際学会での成果発表：口頭発表及びポスター発表4件</p> <p>● 国内学会・プロジェクト公開研究会での成果発表：口頭発表16件</p> <p>● 論文刊行：6件（内3件は英語による国際発信）</p> <p>（資料1.7）</p> <p>4. H29年度に開催した国際シンポジウム Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing の研究成果をとりまとめ、プロジェクトの内部と外部の査読者によるレビューを経て、海外の定評のある研究雑誌 LILT に提出し。LINGUISTIC ISSUES IN LANGUAGE TECHNOLOGY VOL 18, ISSUE 0-5 (2019年8月)として刊行された (ISSN: 1945-3604, , Introduction+5 papers, total 161 pages) (資料1.8)。</p> <p>5. 2013年12月に開催したNINJAL国際シンポジウム MYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES (“Verb-Verb “Complexes in Asian Languages”)の研究成果の編集を終え、Oxford University Pressに提出した。外部評価の結果、出版が決定した。現在印刷中である。</p> <p>6. 2016年12月に開催したNINJAL国際シンポジウム Mimetics in Japanese and other language of the world の研究成果(論文集)が2019年6月にJohn Benjamins社から刊行された(資料1.9)。</p> <p>7. 日本語の統語論の教育に特化したKishimoto Hideki 著 Analyzing Japanese Syntax: A Generative Perspective をひつじ書房に入稿し、初稿や念校のチェックを終わらせた。現在印刷中である。また、この教材の練習問題をNPCMJコーパスで解くための仕組みをウェブ上で開発した。</p> <p>(2) 研究実施体制等に関する計画</p> <p>8. 統語・意味解析コーパスの開発と言語研究を推進するために、47名のプロジェクト共同研究員（うち</p>	

PD フェロー1名、大学院生5名)体制でコーパス開発と共同研究を推進した。

9. 昨年に続き、本年も宮田 Susanne 教授を通じて、CHILDES と連携を深め、NPCMJ コーパスデータの述語と機能語に対する詳細な形態論情報付与に精密な形態論情報付与に関する研究を続行し、試験的に一部のアノテーション付与作業も試みた。
10. 業務委託に基づき、東北大学と連携してアノテーションの研究・アノテーション作業およびデータのローマ字化作業を進めた。同じく、業務委託に基づき、神戸大学と連携して、インターフェースの改良に関する研究を行い、パターンブラウザに改良を加え、公開した。さらに、(1)7の Analyzing Japanese Syntax: A Generative Perspective の練習問題を作成し、当該練習問題を NPCMJ コーパスで解くための仕組みを開発した(書籍の出版と合わせて、公開する予定である)。また、岡山大学竹内研究室と連携して NPCMJ コーパスの一部のデータに意味役割とフレームの情報を付加し、内部公開した。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

自己点検評価

計画どおりに実施した

(1) 共同利用・共同研究に関する計画

1. NPCMJ コーパスに新たなデータ1万文を追加し、総データ量を4万文に増やした(データの追加は3月を予定している)(2017年の公開から2020年3月25日までのアクセス統計:ユーザー数11940, ページビュー数250,503(Google Analytics))。また、日本語の統語論の教育に特化した Analyzing Japanese Syntax: A Generative Perspective という教材の練習問題を NPCMJ コーパスで解くための仕組みを開発した。書籍の出版と合わせて、公開する予定である。
2. NPCMJ コーパス利用講習会を国内の大学で2回開催した。
統語・意味解析コーパス(NPCMJ)講習会, 2019年5月11日, 弘前大学(参加者数21人, うち大学院生を含む学生8人)
統語・意味解析コーパス(NPCMJ)講習会(NINJAL チュートリアル), 2020年2月1日, 品川インターシティ ホール&貸会議室(参加者数30人, うち大学院生を含む学生9人)
3. 大久保(1967)による国立国語研究所での研究成果にアノテーションを付与する作業を客員教授の宮田先生と連携して進め、「NINJAL-Okubo」データとして CHILDES (Child Language Data Exchange System) で公開した。(資料2. 1)
4. 日本語学習者のコミュニケーション(リソース開発班基本動詞ハンドブック作成グループ), 科研プロジェクト「統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究: 複文を中心に」および科研プロジェクト「準均衡超大規模日本語コーパスと高速検索ツールの開発」と連携し、「文型バンク」の拡充を進めた。初級の文型200件に意味解説を追加し、インターフェースとともに公開した。(資料2. 2)
5. 国内外の主要研究者から成るアドバイザリーボードと相談しながらアノテーションの質的な拡充を行った。詳細は以下の2を参照。
6. アドバイザリーボードと相談しながら、客員教授の宮田 Susanne 氏の主導する CHILDES (Child Language Data Exchange System) と連携し、日本語を第一言語として獲得する幼児の発話データへの統語意味解析情報付与のための研究を続行し、一部のデータにアノテーションを付与した。また、平行して、時間軸に沿って幼児の言語発達の過程を可視化できるインターフェースの開発を進めた。来年度は NPCMJ に格納し、公開する予定。
7. 研究に関する計画(2)3を参照。

(2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画

3. 教育に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
--------	------------

(1) 大学院等への教育協力に関する計画

(2) 人材育成に関する計画

1. PD フェロー一名、および非常勤研究員として大学院生を5名雇用し、アノテーション作業や共同研究を通じて若手研究者を育成した。
2. 大学院生5名を共同研究員としてプロジェクトに参画させ、公開研究会において、発表の機会を提供した。
3. 研究所で雇用されている非常勤研究員の国内外での学会発表の経費を援助した。
4. 統語・意味解析コーパスの開発とそれに基づく言語研究を推進するために、統語コーパス利用講習会を2回開催した。(詳細は「2. 共同利用・共同研究に関する計画」(1) 2の実施状況を参照)

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

自己点検評価	計画どおりに実施した
--------	------------

(1) 産業界や地域社会との連携に関する計画

(2) 研究成果の社会への普及に関する計画

1. NPCMJ コーパスをオンラインで公開し、研究に目的を絞らない、幅広い層の人々からの利用促進に努めた。インターフェースの開発だけでなく、オンラインドキュメンテーション、ユーザーズマニュアルを充実させ、コーパスにより容易にアクセスができるようにした(2017年の公開から2020年3月のアクセス統計:ユーザー数11940、ページビュー数250,503(Google Analytics 統計))。

5. グローバル化に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
--------	-------------

(1) 国際的協業に関する計画

1. スロベニア大学の研究者を1名外来研究者として受け入れた。
2. ロシア国立人文大学言語学部言語類型論学料(博士課程)の大学院生を特別共同利用研究員として受け入れ、研究指導を行った。

(2) 国際的発信に関する計画

3. 上記1. 研究に関する計画4, 5および7を参照。
4. NPCMJ コーパスの漢字仮名交じりデータをローマ字化した形でも公開している。また、検索インターフェースを含めたウェブサイトはすべて日本語と英語の2言語で作成されている。
5. 国際会議において口頭発表4件、論文3件、計7件の研究成果を発表した。

6. その他

該当する活動なし。

令和元年度の評価

《評価結果》

計画を上回って実施している

このプロジェクトの中心である、日本語の統語・意味コーパス(NPCMJ コーパス)の開発と拡充は、予定通り進展しており、令和元年度も1万文のアノテーション付きデータが追加された。統語情報だけでなく意味情報のタグも付されたコーパス・プロジェクトはユニークな試みであり、発足当初と比べるとインターフェースも充実してきている。研究成果の発表件数(国際学会での発表4件、国内学会での発表16件、論文刊行6編)は、ほぼ例年通りであるが、3冊の論文集(Linguistic Issues in Language Technology vol 18, Mimetics in Japanese and other language of the world, Mysteries of Verb-Verb Complexes in Asian Languages)および統語論教育のためのテキスト(Analyzing Japanese Syntax: A Generative Perspective)の刊行が計画よりも順調に進んでいるため、A評価とした。NPCMJ コーパスのシステムは機能が多岐にわたっているだけに、使いこなすための技術が必要な側面があり、練習問題つきの教科書は有用であろうと思われる。今後の発展に期待したい。

《評価項目》

1. 研究について

このプロジェクトの中心である、日本語の統語・意味コーパス(NPCMJ コーパス)の開発と拡充は、予定通り進展しており、令和元年度も1万文のアノテーション付きデータが追加され、さらに、CHILDES との連携も進められている。国際シンポジウムの成果をまとめた論文集3冊のうち2冊(Linguistic Issues in Language Technology vol 18, Mimetics in Japanese and other language of the world)はすでに刊行され、残り1冊(Mysteries of Verb-Verb Complexes in Asian Languages)も印刷中とのことで、計画を上回るペースで進行している。また、統語論教育のためのテキスト(Analyzing Japanese Syntax: A Generative Perspective)も念校を済ませ、出版が待たれる。その他、国際学会での発表4件、国内学会での発表16件、論文刊行6編と、研究成果の発表も順調であり、ワークショップ・チュートリアル・シンポジウム等も計画通り着実に開催されている。統語情報だけでなく意味情報のタグも付されたコーパス・プロジェクトは、ユニークな試みであり、今後も利用者が増えるように工夫を重ねていってほしい。

2. 共同利用・共同研究について

NPCMJ コーパスには、令和元年度も一万文のデータが追加され、コーパスの拡充が進んでいる。NPCMJ コーパス講習会/チュートリアルを国内で2回開催し50名程度の参加者があった。外部研究機関との連携としては、国際的に広く利用されている、言語発達のコーパスであるCHILDESと連携し、アノテーションの作業にも着手している。また、岡山大学の竹内研究室とも共同研究を進め、述語構造シソーラス(Predicate-Argument Structure Thesaurus (PT))で分析された意味役割とフレームの情報をNPCMJに加えた。また、国語研内の他グループと連携し、「文型バンク」の拡充も進め、初級の文型200件に意味解説を追加した。このように、共同利用・共同研究について概ね順調に進展していると判断できる。

3. 教育について

コーパス講習会やチュートリアルの開催については例年通りであるが、令和元年度の活動としては、日本語の統語論教育に特化したKishimoto Hideki 著 Analyzing Japanese Syntax: A Generative

Perspective の刊行が注目される。この教材の練習問題を NPCMJ コーパスで解くための仕組みもウェブ上で開発されており、今後の利用者の増加に期待したい。また、これまでと同様、PD フェローや非常勤研究員を雇用するとともに、大学院生を共同研究員としてプロジェクトに加えており、若手研究者の育成を図っている。

4. 社会との連携及び社会貢献について

NPCMJ コーパスは、その性質上、どうしてもアカデミックな目的のために利用されることが多いのではないかと考えられるが、今後は、いろいろな機会を利用して、利用者の範囲を広げていく工夫を重ねて行ってほしい。また、自己点検報告書には、ユーザー数やページビューの年次変化も記載されていると、わかりやすいと思う。

5. グローバル化について

外来研究者 1 名および特別共同利用研究員 1 名を受け入れている。国際的発信に関しては、国際シンポジウムの成果をまとめた書籍が 2 冊刊行され、1 冊が印刷中である。NPCMJ コーパスはローマ字でも使用でき、ウェブサイトも英語と日本語の 2 言語で作成されている。グローバル化については、問題ないと判断している。

6. その他特記事項

特になし。

日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成

プロジェクトリーダー：木部 暢子

I. プロジェクトの概要

1. 目的及び特色

本プロジェクトは、日本の消滅危機言語・方言の記録・分析・継承を目的として、各地の言語・方言の調査を実施し、言語資源の整備・分析を行うとともに、言語・方言の継承活動を支援して地域の活性化に貢献することを目的とする。

近年、世界的な規模でマイナー言語が消滅の危機に瀕している。2009年、ユネスコは世界の危機言語リストを発表したが、その中には日本で話されている8つの言語－アイヌ語、与那国語、八重山語、宮古語、沖縄語、国頭語、八丈語－が含まれている。しかし、消滅の危機に瀕しているのはそれだけではない。日本各地の伝統的な方言もまた、消滅の危機にさらされている。これらの言語・方言が消滅する前にその包括的な記録を作成し言語分析を行うこと、また、これらの言語・方言の継承活動を支援することは、言語学上の重要課題であるばかりでなく、日本社会においても重要な課題である。

以上のような状況を踏まえ、本プロジェクトでは、次のことを実施する。(1) 日本の危機言語・方言の語彙集、文法書、談話テキストの作成と言語分析、(2) 音声・映像資料（ドキュメンテーション付き）、「日本語諸方言コーパス」等の言語資源の整備、(3) 地域と連携した講演会・セミナーの開催、(4) 若手育成のためのフィールドワークの手引き書の作成。

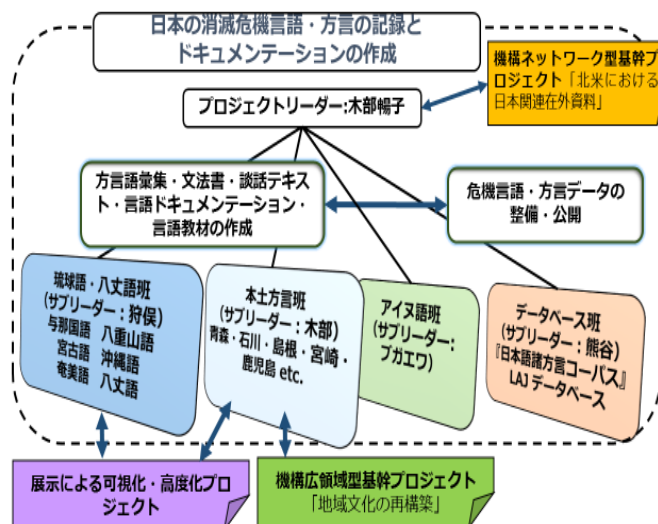
なお、実施にあたっては、機構の広領域型基幹プロジェクト「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」の「方言の記録と継承による地域文化の再構築」、ネットワーク型基幹プロジェクト「北米における日本関連在外資料調査研究・活用」、「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化」と連携する。

2. 年次計画（ロードマップ）

●全体計画・研究組織

本プロジェクトの実施にあたっては、図のような研究班を組織する。

- 琉球語・八丈語班、本土方言班は6年間で、琉球24地点、八丈語、本土16地点（東北地点、関東3地点、中部・関西3地点、中国・四国3地点、九州3地点）の語彙集・文法書・談話テキスト、言語ドキュメンテーション、言語教材を作成する。アイヌ語班はアイヌ語の口承文芸コーパスを作成する。
- データベース班は「日本の危機言語・方言の音声データベース」、「アイヌ語口承文芸コーパス」、「日本語諸方言コーパス」、「『日本語地図』データベース」の整備・公開を行う。
- 研究成果として、以下のものを目指す。書籍：ムートン社 *Handbook of Japanese Dialects* , *Handbook of the Ainu Language*, 危機言語・方言に関する英文論文集、『日本語の格』（仮題）、『談話のなかの方言』、『沖縄県久米島方言調査報告書』、『島根県隠岐の島方言調査報告書』、『石川県白峰方言調査報告書』、『愛



知県木曾川方言調査報告書』、『青森県むつ市方言調査報告書』、『青森県八戸市方言調査報告書』、『宮崎県椎葉村方言語彙集（仮題）』、
コーパス・データベース：『アイヌ語口承文芸コーパス』、『日本語諸方言コーパス』、『日本の危機言語・方言データベース』、『日本言語地図』データベース、
その他：フィールドワークの手引き書、各地の語彙集・文法書・談話テキスト・言語ドキュメンテーション、言語教材。

●年次計画

平成 28～29 年度（1～2 年目）

- ① 調査：琉球語、八丈語、本土方言の調査を行う。
- ② 研究会：「格と取り立て」、「指示詞・代名詞」に関する研究会、コーパスに関する合同シンポジウムを開催する。
- ③ 言語資源：「日本語諸方言コーパス」、「危機言語・方言音声データ」、「アイヌ語口承文芸データ」等を拡充・整備し、公開する。
- ④ 地域との連携：「危機的な状況にある言語・方言サミット」（年1回）、「方言セミナー」（年1回）を開催する。
- ⑤ 若手育成：大学院生、PD等を調査へ参加させる。フィールドワークの手引き書の準備を行う。
- ⑥ 成果：『日本語の格表現』（くろしお出版）、『かたりの中の方言』（勉誠出版）を出版する。『沖縄県久米島方言調査報告書』、『島根県隠岐の島方言調査報告書』、『石川県白峰方言調査報告書』を刊行する。ムートン社 *Handbook of Japanese Dialects*, *Handbook of the Ainu Language*（30年4月刊行予定）、『椎葉村方言語彙集』（31年出版予定）の出版準備を行う。

平成 30 年度（3 年目）

- ① 調査：琉球語、八丈語、本土方言の調査を行う。
- ② 研究会：国際シンポジウム “Approaches to Endangered Languages in Japan and Northeast Asia: Description, Documentation and Revitalization.” , 「動詞・形容詞」に関する研究発表会を開催する。
- ③ 言語資源：『日本語諸方言コーパス』モニター版を公開する。また、「危機言語・方言」音声データ、『アイヌ語口承文芸コーパス』、『日本言語地図』データベース」のデータ補充、及び首都圏大学生調査の結果分布地図、属性別集計表の作成。
- ④ 地域との連携：「方言セミナー」、（1回）を開催する。
- ⑤ 若手育成：大学院生、PD等を調査へ参加させる。『フィールドワークの手引き書』の作成を進める。
- ⑥ 成果：『白峰方言調査報告書』、『隠岐の島方言調査報告書』を刊行する。ムートン社 *Handbook of Japanese Dialects*, *Handbook of the Ainu Language* の出版準備を行う。各地点の語彙集・文法書・談話テキスト・言語ドキュメンテーション・フィールドワークのテキストの刊行準備を進める。

令和元～2 年度（4～5 年目）

- ① 調査：琉球語、八丈語、本土方言、アイヌ語の調査を行う。
- ② 研究会：「方言語彙集」、「文法記述」に関する研究会、コーパス合同シンポジウムを開催する。
- ③ 言語資源：『日本語諸方言コーパス』のデータを拡充整備する。「危機言語・方言」データ、『アイヌ語口承文芸コーパス』、『日本言語地図』データベース」等のデータを拡充・公開する。
- ④ 地域との連携：「方言セミナー」、「危機的な状況にある言語・方言サミット」を開催する。
- ⑤ 若手育成：大学院生、PD等の調査への参加。
- ⑥ 成果：『椎葉村方言語彙集（仮題）』、『むつ市方言調査報告書』、『日本語の格表現』（くろしお出版）、『か

たりの中の方言』(勉誠出版)を出版する。各地点の語彙集・文法書・談話テキストをウェブで公開する。

⑦ 展示による言語研究の可視化・高度化を実施する。

令和3年度(6年目)

① 調査：次期準備調査を実施する。

② 研究会：研究成果報告会を開催する。

③ 言語資源：『日本語諸方言コーパス』(90時間)を一般公開する。「危機言語・方言音声データ」,「アイヌ語口承文芸コーパス」,「『日本言語地図』データベース」等のデータを拡充・公開する。

④ 地域との連携：「方言セミナー」を開催する。

⑤ 若手育成：大学院生, PD等の調査への参加。

⑥ 成果：ムートン社 *Handbook of Japanese Dialects*, *Handbook of the Ainu Language*, 『フィールドワークの手引き(仮題)』を出版する。各地点の語彙集・文法書・談話テキストをウェブで公開する。

⑦ 展示による言語研究の可視化・高度化を実施する。

6年間のロードマップ

	H28年度	H29年度	H30年度	R元年度	R2年度	R3年度
調査	琉球語, 八丈語, アイヌ語, 本土方言調査					
データ	『諸方言コーパス』データ整備		モニタ版公開	データ整備		本公開
	方言コーパスを使った方言研究					
	危機言語・方言音声データ・アイヌ語口承文芸コーパス等整備・公開					
シンポジウム等	毎年, 研究発表会, 危機言語・方言サミット, コーパス合同シンポジウム, 方言セミナー開催					
			国際シンポジウム開催	ハワイ大合同シンポジウム	ハワイ大合同シンポジウム	ハワイ大合同シンポジウム
刊行・出版	『久米島方言調査報告書』 『島根県隠岐の島方言調査報告書』, 『白峰方言調査報告書』等刊行		『椎葉村方言語彙集(仮題)』, 『愛知県木曾川方言調査報告書』等刊行		『むつ市方言調査報告書』, 『日本語の格表現』, 『椎葉村方言語彙集(仮題)』, 『かたりの中の方言』, 『フィールドワークの手引き(仮題)』, <i>Handbook of Japanese Dialects</i> , <i>Handbook of the Ainu Language</i> ,	

II. 令和元年度活動概要

令和元年度予算総額 33,895千円

令和元年度 成果の概要

1. 研究に関する計画

【フィールドワーク】日本の危機言語・方言の記録・保存のために, 全国40地点において語彙集・文法書・談話テキスト, 言語教材の作成のための調査を行なった。2019年度のテーマは「格・情報構造」である。また, 広領域連携型「地域社会」と連携して, 青森県八戸市方言を集中的に調査する合同調査, および宮崎県椎葉村方言の方言語彙集のための調査を実施した。【研究発表会等】プロジェクト研究発表会「格・情報構造(琉球諸語)」, 日本語文法学会パネルセッション「日琉諸方言の格と情報構造」, 「手話言語と音声言語に関する民博フェスタ2019」(民博と共催)を開催した。【研究成果】共同研究員の研究も含めて,

図書・報告書6件、ブックチャプター9件、論文23本、コーパス・データベース等4件、学術発表・学術講演71件、一般向けの講演・セミナー等22件、講習・チュートリアル等13件、執筆記事11件、取材記事28件の研究成果を公開した。【教材・教育プログラム】東京外大AA研LingDy3と共同で『フィールドワーク事前研修報告書』を刊行した。また、機構の広領域連携型プロジェクト「地域社会」及び鹿児島大学と共同で、連携授業の報告書『地域文化の可能性』を刊行した。【受賞】客員准教授の下地理則（九州大学准教授）が南琉球伊良部方言の研究により第47回金田一京助博士記念賞、および第16回日本学術振興会賞を受賞した。また、プロジェクトのメンバーが2019年度日本語学会春季大会発表賞、日本語学会第157回大会発表賞、日本音声学会学術研究奨励賞を受賞した。【社会的意義】プロジェクトの調査や活動が東北や奄美・沖縄の新聞・テレビで紹介され、地元で注目された。また、ウェブ配信の講談社現代ビジネスの「大阪弁は危機言語」という意外な現実」が2,400人以上人にシェアされ、方言の危機を社会的現象として考えるきっかけとなった。【大学との組織的な連携】東外大AA研LingDy3との連携協定に基づき、クロスアポイントメントにより特任助教を雇用し、フィールドワーク事前研修、『フィールドワーク事前研修報告書』の作成、昨年度に開催した危機言語の国際ポスターセッションの発表を元にした英語論文集の作成、国連の定めた国際先住民言語年2019の企画・運営、展示等を共同で実施した。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

【データベース等の構築】昨年度公開した『日本語諸方言コーパス (COJADS)』モニター版のデータを拡充するとともに、COJADSのホームページを開設し、データのダウンロード等の機能を整備した。COJADSは公開後1年で登録ユーザー数が3,000人以上となるなど、研究及び一般社会で広く活用されている。その他、「危機言語DB」の基礎語彙、『アイヌ語口承文芸コーパス』『日本語地図データベース』のデータを拡充し、公開した。また、地域の方言資料の公開を支援する事業として、『鳩間島方言辞典』『多良間島方言辞典』を編集し、刊行した。【コーパスを使った研究】COJADSモニター版を活用して、13件の発表を行なった（うち4件が国際学会）。また、ブックチャプター2本を作成した。【コーパス講習会・講演会】COJADSモニター版の利用促進のため、利用講習会及び研究発表会「方言コーパスを活用した方言研究の開拓」を開催した。また、コーパス合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション」を「通時コーパス」「日常会話コーパス」「学習者コーパス」と合同で開催した。

3. 教育に関する計画

【発表の機会の提供支援】プロジェクトの研究会に若手研究者の発表を積極的に組み入れ、若手研究者に発表の機会を提供した。【フィールドワーク指導】青森県八戸市方言調査に参加する大学院生を全国に公募し、応募者8人に対して事前研修、フィールドワーク指導、報告書作成指導を行なった。【調査旅費・学会発表旅費支援】若手研究者に対して方言の語彙集・文法書・談話テキスト、言語教材の作成のための調査旅費を援助した。また、JSAA2019（モナッシュ大学、オーストラリア）、NINJAL-UHM Linguistics Workshop（ハワイ大学）、IYIL2019（アメリカ、フランス）、LPSS 2019（Academia Sinica、台湾）等の国際学会での発表の旅費を支援した。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

【地域社会との連携】宮崎県椎葉村との連携事業「椎葉村方言調査と『椎葉村方言語彙集』の作成」が最終年度を迎え、これまでの調査データをまとめて、『椎葉村方言語彙集』の原稿を完成させた（出版は来年度の予定）。また、沖永良部島和泊町、知名町との連携協定に基づき、小学生・中学生向けの方言の研修会、方言辞書作成のための講座、子どもたちに方言を継承する活動「わどうまいしまむにプロジェクト」

の発表会を開催した。【社会人の学び直し】沖永良部島和泊町・知名町で役場職員を対象とする研修会を実施し、方言の保存と復興に関する指導を行なった。【一般向け講義・講演会等】「危機的な状況にある言語・方言サミット（奄美大島）」を文化庁、鹿児島県、奄美市等と共催で開催し、プロジェクトメンバー4人が報告を行なった。また、沖縄県石垣白保等で一般向け、及び子ども向けの方言の講演を行なった。【展示】人間文化研究機構「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業」と共同で、八丈島のことばと文化を紹介する動画作品3本を作成したほか、モバイル型展示ユニットを使ったことばの展示4件（東外大AA研、与論町生涯学習フェア・文化祭等）、東外大AA研での展示に合わせた講演会1件を開催した。また、人間文化研究機構「北米における日本関連在外資料調査研究・活用」と共同で、「ハワイ：日系移民150周年と憧れの島のなりたち」（歴博と共同開催）、沖縄県北中城村、沖縄県立図書館、沖縄県公文書館と連携して、戦後の沖縄復興に奔走した比嘉太郎に関する展示を開催した。

5. グローバル化に関する計画

【協定に基づく研究】ハワイ大学マノア校との連携協定に基づき、NINJAL-UHM Linguistics Workshopをハワイ大学マノア校で開催し、統語と意味のインターフェース、言語獲得、コーパス言語学の観点から基調講演、口頭発表、ポスター発表、セミナーワークショップを行なった。【国際学会・国際会議での発表】プロジェクト全体として27件の国際学会・国際会議での講演、発表等を行なった。主なものに、21st Biennial Conference of Japanese Studies Association of Australia 2019（モナッシュ大学、オーストラリア）での講演・発表、国連の国際先住民言語年2019のPerspectives Conference（パデュー大学、アメリカ）におけるパネルセッション Endangered Languages in Japanの企画・実施（東外大AA研LingDy3と共催）、同じく、国際先住民言語年2019のInternational Conference Language Technologies for All（ユネスコ本部、フランス）におけるポスター発表、The 3rd International Symposium on Linguistic Patterns in Spontaneous Speech（Academia Sinica、台湾）におけるポスター発表等がある。【国際出版】ムートン社*Handbook of Japanese Dialects*, *Handbook of the Ainu Language*の編集を行なった（出版は2021年度の予定）。昨年開催した危機言語の国際シンポジウムにおけるポスター発表を元にした英語論文集を東外大AA研Lingdy3と共同で編集し、東京外大のホームページで公開した。【データ公開】『喜界島方言調査報告書』『宮古島方言調査報告書』を英訳し、「危機言語DB」のウェブサイトで公開した。また、危機言語・方言のデータを音声記号、日本語、英語で公開した。

6. その他

該当する活動なし。

Ⅲ. 項目ごとの状況

1. 研究に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
<p>(1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画</p> <p>(1) フィールドワーク</p> <p>1. 共同研究員が40地点において、日本の危機言語・方言の語彙集、文法書、談話テキスト、方言教材の作成と言語分析のための調査を実施した。今年度の調査テーマ「格・情報構造」である。</p> <p>2. 青森県八戸市で1地点の方言を集中的に記録する合同調査を行なった（機構の広領域連携型プロジェクト「地域社会」と共同実施）（2019.8.26-29、参加者19人（内大学院生3人、公募の学生8人、外国か</p>	

らの参加1人))。6人の話者の協力により、基礎語彙600単語と例文、文法項目(格、情報構造、疑問詞、文タイプ、テンス・アスペクト、ヴォイス、形容表現、名詞述語)を調査した。調査の様子は、地元紙に掲載された。調査報告書は2020年度に刊行の予定である。

(2) 研究発表会・講演会

3. 第1回プロジェクト研究発表会「格・情報構造(琉球諸語)」を開催した(2019.6.16, 国語研, 参加者数49人(内学生数9人), 発表件数6件)。第2回の研究発表会「格・情報構造(本土諸方言)」(2020.3.8)は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止とした。
4. そのほか、日本語文法学会で「格・情報構造」に関するパネルセッション「日琉諸方言の格と情報構造(格表現と情報構造との関係に関する類型論的研究)」を開催した(2019.12.8, 学習院大学)。
5. 危機言語としての手話言語の研究として、民博と共同で「手話言語と音声言語に関する民博フェスタ2019/SSLL2019」(2019.12.7, 国立民族学博物館第4セミナー室)を開催した。また、認知言語学的な手話研究の第一人者、シャーマン・ウィルコックス教授を招いて講演会「手話の談話における指示と空間使用」を開催した(2019.8.3, 国語研, 参加者数55人)。

(3) 研究成果の公表

6. 『日本語の格表現』(くろしお出版)を2020年3月に刊行する予定で校正段階まで進めたが、新型コロナウイルスの影響で刊行は2020年度にずれ込むこととなった。『かたりの中の方言』(勉誠出版)も2020年度の刊行となった。
7. 椎葉村との連携協定による『椎葉村方言語彙集』の作成事業が最終年度を迎え、『椎葉村方言語彙集』の原稿を完成させた。(詳細については4(1)「社会との連携」参照)
8. 前年度に実施した青森県むつ市方言調査の報告書『青森県むつ市方言調査報告書』(国立国語研究所, 65頁)を刊行した。
9. 共同研究員の研究も含めて、図書・報告書6件, ブックチャプター9件, 論文23本, コーパス・データベース等4件, 学術発表・学術講演71件, 一般向けの講演・セミナー等22件, 講習・チュートリアル等13件, 執筆記事11件, 取材記事28件の研究成果を公開した。(プロジェクトの企画によるもの, プロジェクトに対する謝辞を含むもののみ)。

(4) 教材及び教育プログラムの開発

10. 東京外大AA研LingDy3と共同で、2016-2019年度のフィールドワーク事前研修の講義内容をまとめた『フィールドワーク事前研修報告書』を作成した。
11. 昨年実施した鹿児島大学大学院との連携授業の報告書『地域文化の可能性』を、機構広領域連携型プロジェクト「地域社会」と共同で刊行した。2020年度に出版社からの出版を計画している。

(1) 受賞

12. 下地理則客員准教授(九州大学准教授)が『南琉球宮古語伊良部島方言』により第47回金田一京助博士記念賞を、「伊良部島方言の記述文法、特にアクセントと統語現象の言語類型論的研究」により第16回(令和元年度)日本学術振興会賞を受賞した。
13. その他、特任助教が日本言語学会第157回大会発表賞を、非常勤研究員が2019年度日本語学会春季大会発表賞を、共同研究員・准教授が日本音声学会学術研究奨励賞を受賞した。

(2) 新聞、テレビでの報道

14. 青森県八戸市方言調査(デーリー東北新聞, 東奥日報), 沖永良部方言の継承活動(南海日日新聞), 竹富島の方言講座(八重山日報), 与論町生涯学習フェア・文化祭(南海日日新聞), 与那国や沖永良部の絵本の作成(朝日英字新聞)など28件の新聞記事や放送番組が報道された。
15. 特に、沖縄のことばの継承活動を紹介する特集番組「くとうばどう たから 消滅危機言語を守る人」

を琉球朝日放送が制作し、2019年12月26日に放映された。

16. ウェブ配信の講談社現代ビジネスに執筆した「大阪弁は危機言語」という意外な現実」が2,400人以上にシェアされ（2020.3.31時点）、社会的に大きな反響を生んだ。

(2) 研究実施体制等に関する計画

(1) 大学との組織的な連携

17. プロジェクトを推進するために、国内外の研究者74人（内大学院生4人、日本学術振興会特別研究員5人、国外機関所属者4人）をプロジェクト共同研究員として組織した。
18. 東京外大AA研LingDy3との連携協定に基づき、クロスアポイントメントにより特任助教1人を雇用し、八戸市方言調査、フィールドワーク事前研修、『フィールドワーク事前研修報告書』の作成、昨年度に開催した危機言語の国際ポスターセッションの発表を元にした英語論文集の作成、IYIL2019（5「グローバル化」参照）におけるセッションの企画・実施、AA研における展示等を実施した。

(2) 共同研究を通じた大学支援

19. 上記(4)11連携授業の報告書『地域文化の可能性』の刊行を通じて、鹿児島大学大の教育を支援した。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

自己点検評価

計画どおりに実施した

(1) 共同利用・共同研究に関する計画

(1) データベース等の構築・公開

1. 「危機言語DB」に島根県松江市の基礎語彙データ、与論島のことばと文化を紹介する動画4本を追加、『アイヌ語口承文芸コーパス』にアイヌ語千歳方言のデータ7話を追加、『日本語地図データベース』（LAJの原データの電子化）に25項目のデータを追加し、データベースを充実させた。
2. 『日本語諸方言コーパス(COJADS)』モニター版（中納言検索）に11時間分のデータを追加公開した。また、COJADSのホームページを制作し、ウェブサイトからデータ・ダウンロードができるようにし、コーパスの利用環境を整えた。
3. 地元の人が作成した方言辞典の公開を支援する事業として、『鳩間島方言辞典』（1841頁）、『多良間島方言辞典』（555頁）を編集し、刊行した。2020年度にオンライン公開の予定である。

(2) データベース等に関する講習会・講演会

4. COJADSモニター版の利用促進のため、利用講習会及び研究発表会「方言コーパスを活用した方言研究の開拓」を開催した（科研費基盤(A)と共催、2019.9.6、参加者数28人、内学生数2人）。

(3) データベース等を使った研究成果

5. COJADSモニター版を使って、日本方言研究会（口頭発表）、日本語学会春季大会（ブース発表）等、13件の発表を行なった（うち4件が国際学会）。また、COJADSモニター版を使って2本のブックチャプターを執筆した。
6. COJADSモニター版は、諸方言の自然談話データを横断的に検索することができる日本で初めての大規模方言コーパスである。公開後1年で登録ユーザー数が3,000人以上となるなど、方言研究及び一般社会で活用されている。

(2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画

(1) 共同利用・共同研究を推進するための大学との組織的な連携

7. 連携協定に基づき、琉球大学に「沖縄における消滅危機言語・方言の調査・保存に関する研究」を事業

委託し、沖縄県伊江島等の言語を記録した。

(2) プロジェクト合同の研究集会

8. コーパス合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション」を「通時コーパス」「日常会話コーパス」「学習者コーパス」, 科研費基盤(A), 科研費基盤(B)等と共同で開催した(2019.9.5, 発表件数4件, 参加者数64人, 内学生数9人)。

9. 合同シンポジウム「日本語文法研究のフロンティアー日本の言語・方言の対照研究を中心にー」を「対照言語」文法研究班「とりたて表現」と共同で2020年2月29日に開催する予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止した。

(3) 共同利用・共同研究の評価等

10. 客員教授/共同研究員の岩崎勝一教授(UCLA)にプロジェクトの今後の国際的な展開についてアドバイスを受け、国際会議の発表等に反映させた。

3. 教育に関する計画

自己点検評価

計画どおりに実施した

(1) 大学院等への教育協力に関する計画

(2) 人材育成に関する計画

(1) プロジェクト非常勤研究員の雇用

1. 若手研究者を育成するために、特任助教5名を雇用(うち1名は東外大AA研とのクロスアポイントメントによる雇用, 1名は人間文化研究機構総合人間文化研究推進センターの雇用, 1名は総合情報発信センターの雇用), PDフェローを1名, 非常勤研究員を9名雇用し, 危機言語・方言の調査研究, COJADSの構築, 言語の展示等を通してキャリア支援を行なった。

(2) 大学院生, 学振PD等のプロジェクトへの参加

2. 大学院生4人, 日本学術振興会特別研究員5人を共同研究員としてプロジェクトに参画させ, 方言調査や研究会での発表の場を提供した。

3. 若手研究者の国際学会等での発表に対して旅費支援を行なった。主な支援内容は以下のとおりである(国際学会については, 5(1)「グローバル化」を参照)。▽JSAA(モナッシュ大学, オーストラリア)4人。▽NINJAL-UHM Linguistics Workshop(ハワイ大学, アメリカ)3人。▽IYIL2019(パデュー大学・アメリカ)3人。▽IYIL2019(ユネスコ本部・フランス)3人, ▽LPSS 2019(Academia Sinica, 台湾)3人。

(3) 若手研究者への研究費の支援

4. 40地点調査の語彙集・文法書・談話テキスト, 言語教材の作成のための調査の旅費を援助した。(1(1)「研究水準及び研究の成果」参照)

(4) チュートリアル

5. 青森県八戸市方言調査(1(1)(1)「フィールドワーク」参照)に参加する大学院生を全国公募し, 応募者8人に対して事前研修, フィールドワーク, 報告書作成を通して若手研究者を指導した。

6. 第33回NINJALチュートリアル(台湾東呉大学, 2019.11.9, 参加人数41人)において, 「日本の言語の多様性」の講義を行なった。2020年3月に東北大外で実施する予定だった第35回NINJALチュートリアルは, 新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止とした。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

自己点検評価	計画を上回って実施した
<p>(1) 産業界や地域社会との連携に関する計画</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 2014年度から実施している宮崎県椎葉村との連携事業「椎葉村方言調査と『椎葉村方言語彙集』の作成（5カ年計画）」が今年度、最終年度を迎え、これまでの調査データをまとめて、12集落の方言よりなる『椎葉村方言語彙集』を完成させた。出版は当初の予定どおり来年度に行う予定である。 2. 鹿児島県沖永良部島和泊町、知名町との連携協定に基づき、和泊町で親子向け・小学生・中学生向け研修会を各1回、知名町で「しまむに教室」（方言辞書を作成するための講座）を5月-11月に毎月2回開催し、方言の保存と復興に関する指導を行なった。また、沖永良部島の方言を子どもたちに継承する活動「わどうまいしまむにプロジェクト（和泊 島ことばプロジェクト）」の発表会を開催した（2020.2.16, 国語研）。これらの活動は、地方誌で報道され、地元で注目された。 <p>(2) 研究成果の社会への普及に関する計画</p> <p>(1) 一般向け講義・講演会・フォーラム</p> <ol style="list-style-type: none"> 3. 「危機的な状況にある言語・方言サミット（奄美大島）」を文化庁等と共同で開催し、プロジェクトから4人が報告を行なった（2020.2.22-23, AiAi ひろば, 奄美文化センター, 主催・共催 文化庁, 鹿児島県, 奄美市, 国立国語研究所等, 参加人数 570人）。 4. 竹富小中 PTA 文化部主催「ことばと絵のワークショップ 夏のてーどうんむに教室」（2019.8.16）にプロジェクトのメンバーが講師として参加し、方言に関する講義を行なった。 5. 2020年2月12-17日にゆらていく祭りの一部として、沖縄県石垣白保の公民館講座で一般向け、及び中学生向けに方言に関する講演を行なった。 6. 「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業」（人間文化研究機構）と共同で、昨年度作成した与論のことばと文化に関する動画作品4本を「危機言語DB」のページで公開した。また、今年度新たに八丈島の方言動画作品3本を作成、モバイル型展示ユニットの展示を4回開催、展示に関する講演会を1回開催した。 7. 「北米における日本関連在外資料調査研究・活用」（人間文化研究機構）と共同で、「ハワイ：日系移民150周年と憧れの島のなりたち」（歴博と共同開催）、沖縄県北中城村、沖縄県立図書館、沖縄県公文書館と連携して、戦後の沖縄復興に奔走した比嘉太郎に関する展示を開催した。 <p>(2) インターネット等を通じた研究成果の社会への発信</p> <ol style="list-style-type: none"> 8. COJADS モニター版を拡張・公開するとともに、その活用を促進した。（2（1）共同利用・共同研究を参照） 9. 「危機言語DB」, 『アイヌ語口承文芸コーパス』, 『日本言語地図データベース』等のデータを拡充し、ホームページで公開した。（2（1）共同利用・共同研究を参照） 10. 絵本をとおした言語復興活動として、与那国、竹富、沖永良部の方言の絵本を出版した。この取組は多くの新聞で紹介された。 <p>(3) 社会人を対象とするスキルアップの計画等</p> <ol style="list-style-type: none"> 11. 鹿児島県沖永良部島和泊町で役場職員研修会を3回、知名町で1回開催し、方言の保存と復興に関する指導を行なった。 12. その他、上記の「言語・方言サミット」や講演、展示をとおして、文化団体、一般市民に危機言語・方言の記録・保存・復興の啓蒙活動を行なった。 	

5. グローバル化に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
<p>(1) 国際的協業に関する計画</p> <p>(1) 海外の研究者の受入</p> <p>1. 海外の研究者4人が共同研究員としてプロジェクトに参加し、その内1人が8月の八戸方言調査に参加した。</p> <p>(2) 海外の大学との連携</p> <p>2. ハワイ大学マノア校との連携協定に基づき、<u>NINJAL-UHM Linguistics Workshop</u> (2019.10.12-13, ハワイ大学) を企画・開催した。13の大学・研究機関から54人(内大学院生22人, 国外機関所属39人)が参加し、統語と意味のインターフェース, 言語獲得, コーパス言語学の観点から, 基調講演3件, 口頭発表9件, ポスター発表16件, 及びセミナーワークショップを行なった。国語研からは, 言語変異研究領域と理論・対照研究領域の教員3人と共同研究員等12人が参加した。</p> <p>(2) 国際的発信に関する計画</p> <p>(1) 英語による研究成果の発信</p> <p>3. 昨年度に開催した危機言語に関する国際シンポジウムを元にした英語論文集を Mouton 社から刊行する準備を進めた。また, ポスターセッションの発表を元にした英語論文集 <u>Proceedings of International Symposium Approaches to Endangered Languages in Japan and Northeast Asia -Poster Session-</u> を東外大 AA 研 Lingdy3 と共同で作成し, 東外大のホームページで公開した。</p> <p>4. ムートン社 <u>Handbook of Japanese Dialects, Handbook of the Ainu Language</u> の編集作業を進めた(出版は2021年度の予定)。</p> <p>5. プロジェクト全体として27件の国際学会, 国際会議での講演, 発表を行なった。主な発表に以下のものがある。</p> <ul style="list-style-type: none">○ <u>JSAA2019</u> (モナッシュ大学, オーストラリア, 2019.7.1-4) Keynotes Talk 1件及, 研究発表5件。○ 国連の定める <u>国際先住民言語年 (IYIL2019)</u> の <u>Perspectives Conference</u> におけるパネルセッション <u>Endangered Languages in Japan</u> の企画・運営 (パデュー大学, アメリカ, 2019.10.31-11.2, 東外大 AA 研 LingDy3 と共同)。プロジェクトメンバー5人と与論・沖永良部の4人が発表。○ 同じく, IYIL2019 の <u>International Conference Language Technologies for All (LT4A11)</u> (自動翻訳や音声認識などことばのテクノロジーをすべての言語に) (ユネスコ本部, パリ, 2019.12.4-6) におけるポスター発表1件。○ <u>LPSS 2019</u> (Academia Sinica, 台湾, 2019.11.21) 口頭発表1件, ポスター発表1件。 <p>6. 『喜界島方言調査報告書』『宮古島方言調査報告書』を英訳し, 「危機言語 DB」のウェブページで公開した。また, 危機言語・方言のデータを音声記号, 日本語, 英語で公開した。</p>	

6. その他

該当する活動なし。

令和元年度の評価

《評価結果》

計画を上回って実施している

本プロジェクトは、5つの評価項目「研究」「共同利用・共同研究」「教育」「社会との連携及び社会貢献」「グローバル化」のすべてにおいて実施計画を上回る成果を挙げているため、「A 評価」が妥当だと考えられる。感染症拡大を予防するため公開講座などの一部見送りはあったが止むを得ないことであり、今期の成果全体への影響は最小限に止まっているといえる。また、ウェブページ充実への努力がみられた。国際的発信と地域社会への発信の両面を視野に入れつつ、学術研究の高い質を保ちながら、利活用への工夫を模索した構築がなされている。移動が制限される今日の状況に鑑み、これからもウェブページの一層の工夫が望まれる。他方、欠かすことのできない実地調査や、現実の場を共有するプレゼンテーションもまた活発に行われてきた。種々のバランスのとれた本プロジェクトの活動および成果を高く評価したい。

《評価項目》

1. 研究について

研究水準と成果及び研究実施体制の充実について、実施計画を上回る十二分な成果を挙げている。フィールドワークは全国 40 地点で実施され、内 1 地点の集中調査も滞りなく実施されたことは計画通りである。研究発表及び研究成果の公開は計画通り実施され、「格・情報構造」に関する公開研究発表会、手話言語を危機言語のひとつに位置づけた調査研究の公開があった。『椎葉村方言語彙集』の完成、『青森県むつ市方言調査報告書』の刊行をみた。なお、講演会等一部とりやめは、感染症拡大防止のために必要な措置であった。研究の量的側面を測る指標として共同研究員の研究を含めて図書・報告書 6 件、論文 23 本、コーパス・データベース 4 件、学術発表・学術講演 71 件、その他 83 件が挙げられ、また、質的側面を測る指標として客員准教授の金田一京助博士記念賞、日本学術振興会賞の受賞、特任助教、非常勤研究員の各日本語学会発表賞受章、共同研究員・准教授の日本音声学会学術研究奨励賞受賞が報告されたことをみても、質量ともに充実した成果が知られる。

2. 共同利用・共同研究について

共同利用・共同研究の質的量的側面及び実施体制の充実について、実施計画を上回る十二分な成果を挙げている。危機言語 DB、アイヌ語口承文芸コーパス、日本言語地図データベース、日本語諸方言コーパスは、着実にデータの拡充が行われた。計画された『鳩間島方言辞典』（1841 頁）に加えて『多良間島方言辞典』（555 頁）の編集刊行をみたことは当初の計画を上回る成果である。諸方言自然談話を蓄積した大規模方言コーパス COJADS モニター版を用いた研究発表とワークショップは順調に実施され、COJADS 公開後 1 年で登録ユーザー数が 3000 人以上となったことは特筆される成果である。コーパスを公開するばかりではなく、それを用いて、国際学会を含め積極的に研究発表を推進したことは研究の質と量の観点から高く評価される。大学との組織的連携については、琉球大学との安定的な共同研究が今期も継続された。また、UCLA 教授からのアドバイスを受け国際会議の発表等に反映させたことは、プロジェクトの機能的広がり強化のために望ましいことであった。

3. 教育について

大学院等への教育協力に関する計画、人材育成に関する目標を達成するための措置は、実施計画を上回る十二分な成果を挙げている。人材育成に関しては、若手研究者育成のためのプロジェクト

非常勤研究員の雇用によるキャリア支援が十分に行われた。また、大学院生 4 名、日本学術振興会特別研究員 5 名をプロジェクトに参加させ、方言調査や研究会での発表の場を提供した。特に国際学会等での発表に対しての旅費支援は、若手研究者の視野を広げ危機言語に関する国際的研究連携を促す観点から評価される。若手研究者に対する調査旅費の支援も滞りなく実施された。大学院生を全国公募し、応募者 8 名に対して事前研修、フィールドワーク、事後指導を通して若手研究者を育成する試みは、本年度も計画通り実施された。方言調査能力の育成機会が人文系の高等教育で失われつつある現状に鑑み、大学院等への教育協力を側面から支える活動としても評価できる。また、チュートリアルを台湾東呉大學で行い 41 名の参加を見たことも、視野の広い若手育成実施成果のひとつである。

4. 社会との連携及び社会貢献について

自治体との連携及び研究成果の社会への普及は、いずれも実施計画を上回る十二分な成果を挙げている。自治体との連携は、宮崎県椎葉村との協定に基づく『椎葉村方言語彙集』の完成、鹿児島県沖永良部島和泊町、知名町との連携協定に基づく親子向け・小中学生向け研究会の開催、方言辞書作成講座「しまむに教室」の開催、方言継承活動「わどうまいしまむに（和泊島ことば）プロジェクト」の開催があった。研究成果の社会への普及は、①一般向け講義・講演会・フォーラム、②モバイル型展示ユニットを活用した展示・講演会、③インターネットを利用したコーパスの発信に分類されるが、いずれも充実した実施回数と成果を挙げている。プロジェクトが作成した動画作品、展示ユニット、絵本、コーパスなどの多様な媒体を用いた発信が工夫された。危機言語の継承には使用者の意識醸成が鍵となるが、役場職員研修会、文化団体、一般市民に向けた方言の記録・保存・復興の啓蒙活動につなげた努力は高く評価できる。また、機構との共同研究「ハワイ：日系移民 150 周年と憧れの島のなりたち」が沖縄県立図書館、同公文書館との連携で展示された。海を越えた日本語にも注目した点で、学術的社会的意義が認められる。

5. グローバル化について

研究体制における国際的協業、研究過程及び研究成果の国際的発信について、いずれも実施計画を上回る十二分な成果を挙げている。海外研究者のプロジェクト受入が 4 名あった。ハワイ大学マノア校との連携協定に基づきプロジェクトが企画開催した同大学でのワークショップには、国内外 13 の大学・研究機関が参加し、成果の国際的発信とともに研究交流がなされた。そのほか、国際会議での口頭発表はプロジェクト全体として 27 件あり、JSAA2019 於オーストラリア・モナシュ大学、IYIL（国際先住民言語年）2019 Perspectives Conference 於アメリカ合衆国・パデュー大学、IYIL2019 LT4A11 於フランス・ユネスコ本部、LPSS2019 於台湾・Academia Sinica など、世界各地で実施された。英語文献の公刊については、Mouton 社から刊行予定の英語論文集 2 冊の刊行準備が行われた。東外大 AA 研 Lingdy3 と共同で作成した英語論文集は、東外大のウェブページで公開された。国語研危機言語のウェブページで、『喜界島方言調査報告書』（304 頁）、『宮古島方言調査報告書』（338 頁）の全文英訳が掲載されたことは高く評価される。

6. その他特記事項

ウェブページ改善の努力は、特筆される。音声記号を用いた危機言語の記録・保存・公開、継承支援のための利活用のしやすさ、日本語と英語を用いた発信など、時には矛盾する多様な目的に応じる工夫がみられた。

通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開

プロジェクトリーダー：小木曾 智信

I. プロジェクトの概要

1. 目的及び特色

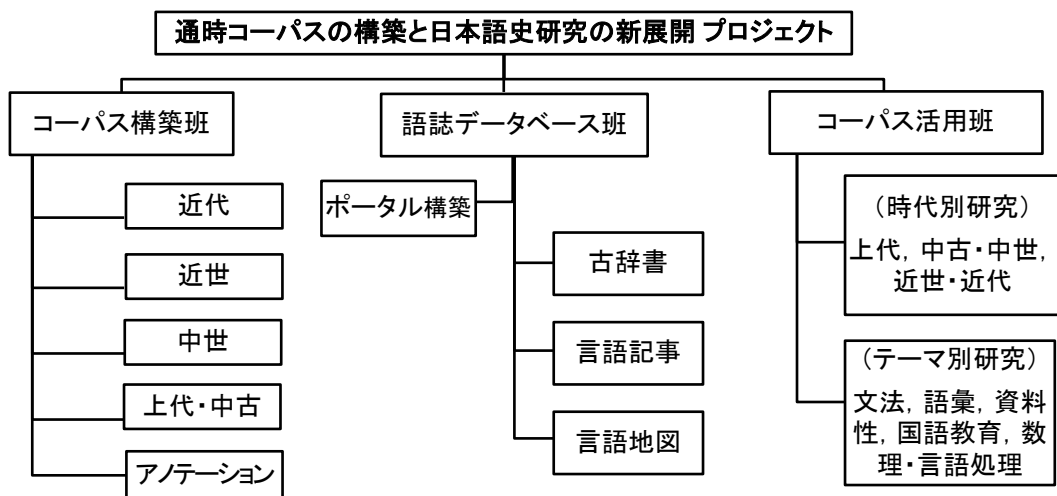
本プロジェクトは、上代（奈良時代）から近代までの日本語資料をコーパス化し、日本語の歴史研究が可能な通時コーパスと語誌のデータベースを構築する。そして、このコーパス・データベースを活用することで新たな観点から日本語史研究を展開する。従来の日本語史研究は、専門知識を必要とするさまざまな文献を取り扱う必要から、研究が特定の資料や形式に偏ったものになりがちであった。通時コーパスを構築し活用することによって個別の資料だけでなく日本語史全体をマクロな視点から見た研究を展開することを可能にする。さらにコーパス言語学で培われてきた新しい研究手法を導入し、従来行えなかった視点からの研究を展開する。

既に国語研究所では『日本語歴史コーパス』の構築に着手しているが、本プロジェクトではこのコーパスを通時コーパスとして利用可能にするために大幅に拡張する。第2期中期計画で構築済みの「平安時代編」（平安仮名文学作品）、「室町時代編」（狂言）等に加え、上代の万葉集・宣命、中古以降の和歌集、中世のキリシタン資料・軍記物・抄物、近世の洒落本・人情本、近代の雑誌・教科書・小説等をサブコーパスとして追加する。このほかにも、日本語史研究に資する資料を選定してコーパスに追加し、上代から近代までの日本語を一本に繋ぐ通時コーパスとして完成させる。また、コーパスと関連付けた語誌データベースを構築し、語誌情報のポータルページを公開し、研究者のみならず日本語の歴史に興味を持つ人々に役立つ情報を提供する。コーパスを活用する研究班には、上代、中古・中世、近世・近代の各時代別の研究グループの他、文法・語彙、資料性・アノテーションの検討の研究グループを設け、コーパス構築に携わるメンバーも全員が参加して研究活動を展開する。

なお、プロジェクトの実施にあたっては、オックスフォード大学東洋学部日本語研究センター、および人間文化研究機構の広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による総合書物学の構築」の中の「表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」（代表者・高田智和）と連携して行う。また、実践女子大学との提携に基づきデジタル化された所蔵資料の活用を図る。

2. 年次計画（ロードマップ）

●全体計画・研究組織



「コーパス構築班」は6年間で奈良時代から明治・大正時代までをカバーする通時コーパスを構築する。上代・中古，中世，近世，近代の時代ごとにグループを置き，プロジェクト非常勤研究員を配置してコーパス開発にあたる。「語誌データベース班」は，コーパスと連携した語誌データベースを開発するために古辞書，言語記事，言語地図のグループを置き，各々専任教員が中心となってデータベースを開発する。またポータル構築のグループを置き，コーパスと語誌データベースの情報を統合した語誌情報ポータルサイトの設計・構築にあたる。「コーパス活用班」は，時代別に上代，中古・中世，近世・近代の研究グループを置き，コーパス構築班と連携しつつ各時代の日本語の研究にあたる。また分野別に，文法，語彙，数理・言語処理の研究グループを置き各分野の研究にあたるほか，資料性，アノテーションのグループを置き，それぞれコーパスに追加する資料，アノテーションに関する研究を行う。このほか，人間文化研究機構の広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による総合書物学の構築」の中の「表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」の研究組織と連携して表記の研究を行う。コーパス活用班にはコーパス構築班のメンバー，PD・大学院生を含む若手研究者を参加させる。

●年次計画

※各年，研究発表会（シンポジウムを含む）・講習会を1回以上開催する。サブコーパスの名称は仮称。

平成28年度（1年目）

- ・「鎌倉時代編Ⅱ日記・紀行」，「明治・大正編Ⅰ雑誌」（太陽・女性雑誌非コアデータ）を公開。
- ・日本語学会でワークショップを開催。

平成29年度（2年目）

- ・「奈良時代編Ⅰ万葉集」，「室町時代編Ⅱキリシタン資料」，「江戸時代編Ⅰ洒落本」を公開。
- ・書き言葉コーパス入門書を出版。

平成30年度（3年目）

- ・「江戸時代編Ⅱ人情本」，「明治・大正編Ⅱ教科書」を公開。
- ・古辞書データベースの試作版を公開。

●3年目までの成果物

コーパス構築班は『日本語歴史コーパス』を拡張し下記のサブコーパスを公開する。

「鎌倉時代編Ⅱ日記・紀行」「室町時代編Ⅱキリシタン資料」「奈良時代編Ⅰ万葉集」「明治・大正編Ⅰ雑誌」「明治・大正編Ⅱ教科書」「江戸時代編Ⅰ洒落本」「江戸時代編Ⅱ人情本」「和歌集編（八代集）」「明治・大正編Ⅲ明治初期口語資料」

語誌データベース班は，語誌データベースの一部として古辞書データベースの試行版を公開する。コーパス活用班は，ワークショップ・公開研究会を2回以上，国際シンポジウムを1回開催し，書籍1冊を刊行する。また，プロジェクト全体として一般向けのNINJALフォーラムを1回開催する。

令和元年度（4年目）

- ・「奈良時代編Ⅱ宣命」，「江戸時代編Ⅲ近松浄瑠璃」を公開。

令和2年度（5年目）

- ・「明治・大正編Ⅳ近代小説」を公開。
- ・語誌情報ポータルサイトの公開。
- ・研究論文集の出版。

●5年目までの成果物

コーパス構築班は，奈良時代から明治・大正時代までの通時的な研究ができるコーパスとして『日本語歴史コーパス』を拡張し公開する。語誌データベース班は，各種語誌データベースを構築し，語誌情報の

ポータルサイトを公開する。コーパス活用班は、国際シンポジウムを1回開催し、研究論文集を1冊以上出版する。

令和3年度（6年目）

- ・「鎌倉時代編Ⅲ軍記」を公開。
- ・『日本語歴史コーパス』（奈良時代～明治・大正時代）の（一次）整備完了。
- ・「語誌情報ポータルサイト」の完成。

II. 令和元年度活動概要

令和元年度予算総額 28,500千円

令和元年度 成果の概要

1. 研究に関する計画

- ・通時コーパス活用班のグループ研究発表会を5回企画し3回実施（2回は新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止）、『日本語歴史コーパス』の講習会（チュートリアル）を3回開催した。
- ・プロジェクト全体での研究発表会として「通時コーパス」シンポジウム2020（3月13日）を企画したが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止となった。
- ・研究成果を、書籍1件、論文・ブックチャプター等29件、発表・講演42件、コーパス・データベース等7件として公開した（プロジェクトに対する謝辞を含むもののみ）。
- ・『日本語歴史コーパス』「和歌集編（八代集）」の長単位と掛詞データを整備し、掛詞検索に対応した検索アプリケーション「中納言」を通して12月に公開した。また、新規に「江戸時代編Ⅲ近松浄瑠璃」「奈良時代編Ⅱ宣命」を3月に公開した。
- ・言語地図画像データベースに「森重幸 分布図からみた徳島県の方言 アクセント」等9件を追加・公開した。
- ・語誌情報ポータル（語誌データベース）の新バージョンを構築し、3月に公開した。
- ・日本語学会2019年度春季大会でワークショップ『日本語歴史コーパス』の今とこれからを開催した（5月19日）。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

- ・検索アプリケーション「中納言」をアップデートし、多重形態論情報（掛詞）検索に対応した。
- ・『日本語歴史コーパス』「和歌集編（八代集）」の長単位と掛詞データを整備し12月に公開した。
- ・新規に『日本語歴史コーパス』「江戸時代編Ⅲ近松浄瑠璃」「奈良時代編Ⅱ宣命」を3月に公開した。
- ・『日本語歴史コーパス』これまでの登録ユーザー数は約13,600人、2019年度の検索件数は約31万件となった。また、2019年度中に『日本語歴史コーパス』を利用して発表された研究論文と全国学会の発表件数は、72本となった。
- ・日本語の語彙研究の基礎資料として広く利用されてきた『語彙研究文献語別目録』（佐藤喜代治編『講座日本語の語彙別巻』（明治書院、1983年）に収録）を電子化した全文データをオープンデータとして公開した。
- ・「語誌情報ポータルサイト」（旧称：語誌データベース）のアップデートを行った。

3. 教育に関する計画

- ・コーパス講習会を3回（4月九州大・9月京都大・1月名古屋大）開催した。

- ・「日本語歴史コーパス活用ワークショップ」を8月20, 21日に開催し、大学院生を招待して高度な通時コーパスの活用（SQL, R）の講習会を行った。
- ・中学校・高等学校の国語科教員及び教職課程の学生院生向けに『日本語歴史コーパス』活用の講習会（国語教育活用ワークショップ）を企画したが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止となった。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

- ・前年度に引き続き、ジャパンナレッジ（ネットアドバンス社）との共同により『日本語歴史コーパス』からジャパンナレッジ新編日本古典文学全集・JK Books「太陽」へのリンクを行った。
- ・三省堂古語辞典の編纂に、コーパス活用の面で協力し、通時コーパスを活用した記事を執筆した。

5. グローバル化に関する計画

- ・オックスフォード大学東洋学部日本語研究センターと共同で ONCOJ のアップデートを行ない、日英語の解説ページを整備して公開した。
- ・上海外国語大学において11月7日にNINJAL セミナー「日本語研究の基盤としての言語資源」を開催した。

6. その他

該当する活動なし。

III. 項目ごとの状況

1. 研究に関する計画

自己点検評価	計画どおり実施した
--------	-----------

(1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画

1. プロジェクト研究成果を、書籍1件、論文・ブックチャプター等29件、発表・講演42件、コーパス・データベース等7件として公開した。（原則としてプロジェクトに対する謝辞を含むものに限った）
2. 古辞書データベース・言語地図データベース・言語記事データベースの整備を行ない、これらのデータベースとコーパスの統計情報を一括して検索することのできる「語誌情報ポータル」（旧称：語誌DB）をアップデート・公開した。
日本語の語彙研究の基礎資料として広く利用されてきた『語彙研究文献語別目録』（佐藤喜代治編『講座日本語の語彙別巻』（明治書院、1983年）に収録）全文データを電子化しオープンデータとして公開した。
3. 通時コーパス活用班のグループ研究発表会を5回企画、3回開催した。（6月29日、9月9日、12月22日に開催。3月2日、3月14日は新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止）
4. 日本語学会2019年度春季大会でワークショップ『日本語歴史コーパス』の今とこれからを開催した（5月19日）。
また、プロジェクト独自の試みとして『日本語歴史コーパス』活用ワークショップ2019を開催した（8月20日、21日）。
5. プロジェクト主催で公開講演会「言語史の計量的研究」を開催した（6月22日）。
6. プロジェクト全体の研究発表会として3月13日に「通時コーパス」シンポジウム2020を企画したが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止。 ※持橋プロジェクトとの共催

(2) 研究実施体制等に関する計画

- 『日本語歴史コーパス』を活用した研究を実施するために、国内外の研究者 80 人をプロジェクト共同研究者として組織して研究活動を行った（国内 76 人，海外 4 人）。
- 『日本語歴史コーパス』の構築を実施するためプロジェクト非常勤研究員 4 名を雇用し，プロジェクト PD フェロー1 名とあわせ，合計 5 名でコーパス構築を行った。
- 人間文化研究機構の広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による総合書物学の構築」の中の「表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」の研究組織と連携して研究を実施した。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

自己点検評価

計画を上回って実施した

(1) 共同利用・共同研究に関する計画

- 『日本語歴史コーパス』「江戸時代編Ⅲ近松浄瑠璃」を整備し，3月31日に公開した。
- 『日本語歴史コーパス』「奈良時代編Ⅱ宣命」を整備し，3月31日に公開した。
- 『日本語歴史コーパス』「和歌集編」（八代集）の長単位・掛詞を整備し，12月27日に公開した。
 - 検索アプリケーション「中納言」を ver. 2.5.0 にアップデートし，多重形態論情報（掛詞）検索に対応した。
 - 2019 年度中に，『日本語歴史コーパス』を利用して発表された研究論文・全国学会の発表件数は，72 本となった。
- 「語誌情報ポータル」（旧称：語誌 DB）をアップデートし公開した。〔重出〕
- 『日本語歴史コーパス』「鎌倉時代編Ⅲ軍記」，「明治・大正編Ⅳ近代小説」，「明治・大正編Ⅴ新聞」を整備し，令和 2 年度以降に公開するための準備を行った。
- 日本語学会 2019 年度春季大会で開催したワークショップ（5月19日）においてアンケートを行い，今後通時コーパスに取り入れる資料について学界の意見を求めプロジェクトの計画に反映させた。
- 『日本語歴史コーパス』利用の講習会（チュートリアル）を 3 回（4月18日九州大・9月30日京都大・2月5日名古屋大）開催した。
- 通時コーパス活用班のグループ研究発表会を 5 回企画，3 回開催した。（6月29日，9月9日，12月22日に開催。3月2日，3月14日は新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止）〔重出〕

(2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画

- 「オックスフォード NINJAL 上代日本語コーパス」のアップデートを共同で行うなど，英国オックスフォード大学との連携協定のもとで共同研究を推進した。
- コーパス関係の所内プロジェクトや科研費プロジェクトと合同で合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション—くだけた表現—」を開催した（9月5日）。
- プロジェクト評価結果を踏まえ，「語誌データベース」の名称見直しを行ない当初計画案にあった「語誌情報ポータル」とした。また，評価委員の意見を踏まえ日本語学会ワークショップでのアンケートを行って通時コーパスに関する学界の意見を収集した。
- 新領域創出型プロジェクト「現代語の意味の変化に対する計量的・統計力学的アプローチ」との共催で「通時コーパス」シンポジウム 2020 を企画した（新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止）。〔重出〕

3. 教育に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
<p>(1) 大学院等への教育協力に関する計画</p> <p>1. イタリア・パヴィア大学より、ファン・シャンシャン氏を特別共同利用研究員として受け入れた。</p> <p>(2) 人材育成に関する計画</p> <p>2. PD フェローを1名、非常勤研究員を3名雇用し、コーパス構築を進めるとともに、コーパスを活用した研究方法の指導を行った。</p> <p>3. 大学院生5名を共同研究員としてプロジェクトに参画させた。</p> <p>4. コーパス活用班研究会、『日本語歴史コーパス』活用ワークショップ2019』等において、大学院生に発表等の機会を提供し旅費、英文校正等の補助を行った（「通時コーパス」シンポジウムは新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止）。</p> <p>5. 若手研究者に対して学会発表（国際学会 DigitalHumanities2019 ユトレヒト出張）等の経費の援助を行った。</p> <p>6. 『日本語歴史コーパス』利用の講習会（チュートリアル）を3回（4月18日九州大・9月30日京都大・21月5日名古屋大）開催した。〔重出〕</p> <p>また、「日本語歴史コーパス活用ワークショップ」を8月20, 21日に開催し、大学院生を招待して高度な通時コーパスの活用（SQL, R）の講習会を行った。</p>	

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

自己点検評価	計画を上回って実施した
<p>(1) 産業界や地域社会との連携に関する計画</p> <p>1. (株)小学館・(株)ネットアドバンスと連携して公開した『日本語歴史コーパス』とジャパンナレッジ「新編日本古典文学全集」本文へのリンクを追加し、『日本国語大辞典』とのリンクについての打合わせを行った。</p> <p>2. 情報システム研究機構・人文学オープンデータ共同利用センター（CODH）との共同で、八木書店・日本近代文学館と覚書にもとづき、近代文献のOCRに関する研究を行った。</p> <p>3. 三省堂古語辞典の編纂に、コーパス活用の面で協力し、通時コーパスを活用した記事を執筆した。</p> <p>(2) 研究成果の社会への普及に関する計画</p> <p>4. 『日本語歴史コーパス』を拡充し、コーパス検索アプリケーション「中納言」を通してインターネット上で無償にて公開した。これまでの登録ユーザー数は約13,600人、2019年度の検索件数は約31万件となった。</p> <p>5. 歴史的資料を対象とした形態素解析のための辞書整備を行い、インターネット上で無償にて公開した。また、この辞書を用いて形態素解析を行うWeb上のツール「Web茶まめ」のアップデートを行った。</p> <p>6. 中学校・高等学校の国語科教員及び教職課程の学生院生向けに『日本語歴史コーパス』活用の講習会（国語教育活用ワークショップ）を企画したが、（3月2日・群馬大学）新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止。</p> <p>また、領域指定型プロジェクト「古文教育に資する、コーパスを用いた教材の開発と学習指導法の研究」との共同で中学高校等の古文の授業での利用を想定したコーパス簡易検索アプリケース「ことねり」を開発し、公開した。</p>	

5. グローバル化に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
(1) 国際的協業に関する計画 1. オックスフォード大学と共同で「オックスフォード・NINJAL 上代語コーパス」(ONCOJ) のアップデートを行なって1月に公開し、日英語の解説ウェブページを整備して3月に公開した。 2. 上海外国語大学において11月7日にNINJALセミナー「日本語研究の基盤としての言語資源」を開催した。 3. 海外の研究者4人を共同研究員に加え、『日本語歴史コーパス』活用に関する共同研究を行った。	
(2) 国際的発信に関する計画 4. 国際学会において『日本語歴史コーパス』に関する発表を行った。 5. 『日本語歴史コーパス』の新規公開データについて、英文 Web ページを作成し情報を発信した。	

6. その他

該当する活動なし。

令和元年度の評価

《評価結果》

計画を上回って実施している

各項目の評価は、すべてB(計画どおりに実施している)以上で、A項目が複数に亘ることから、総合的には、A(計画を上回って実施している)と評価したい。

特に、「研究」ならびに、その発信である「共同利用・共同研究」「社会との連携及び社会貢献」の側面における計画の実施状況を高く評価したい。「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」のためには、『日本語歴史コーパス』の拡充と、その外部発信が必要不可欠であるが、その両方ともに着々と進展が伺えるものとなっている。また、同コーパスを活用した、三省堂古語辞典編纂への協力、中学高校の古文授業への対応を視野に入れた簡易検索ツール「ことねり」の開発等、単なる学術研究の殻に閉じこもることのない、広い視野を有しているところも併せ評価したい。

また、「教育」「グローバル化」の面においても、盛んな人的交流と情報発信が看取できる点も、評価されるべきである。

《評価項目》

1. 研究について

(1) 研究水準及び研究の成果等に関しては5項目、(2) 研究実施体制等に関しては3項目の研究計画を立て、数値目標を伴っていたものは、ほぼそれを超えたかたちで達成されている。プロジェクト研究成果発信は、書籍1件、論文・ブックチャプター等29件、発表・講演42件、コーパス・データベース等7件と申し分ないものであり、また、今回特筆すべきものとして、

「語誌情報ポータル」をアップデート・公開したことが挙げられる。このことにより、古辞書・言語地図・言語記事が、『日本語歴史コーパス』とも関連付けられて統合され、語別に前述の情報を一覧できるようになったことは刮目すべきであり、今後の各語ごとのデータ拡充が期待される。また、研究発表会、ワークショップ、シンポジウムの開催計画も計画通り、着実に履行されている。

また、『日本語歴史コーパス』を活用した研究実施のための研究組織態勢，ならびに、『日本語歴史コーパス』そのものの構築のためのプロジェクト非常勤研究員の雇用，および，人間文化研究機構プロジェクトとの連携も計画通りに進められた。

2. 共同利用・共同研究について

(1) 共同利用・共同研究に関しては8項目，(2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関しては3項目の計画を立て，ほぼ計画通りに履行されている。本プロジェクトにおいては、『日本語歴史コーパス』が共同利用されるために，計画通り公開されることは最重要なことであり，その公開が順調になされていることは，高く評価されるべきである。また，それと連動する「語誌情報ポータル」がアップデート公開されたことも，共同利用の側面から注目すべきことであった。従来，古辞書・言語地図・言語記事の三者からなる「語誌DB」だけでは，「語誌」と言うにはもの足りないものがあったが、『日本語歴史コーパス』と連動することによって，名称としても問題のないものとなった。

また，共同利用されるためには，講習会，ワークショップ，研究発表会等において，ユーザー側からの使い勝手の情報収集を行なうことも有用なことと考えられるが，そのことも踏み行なわれている。さらに，共同利用の実施体制の整備・推進，研究計画の改善も誠実に行なわれている。

それから，どこに書くべきか迷うが，自己評価が1「研究について」がBで，2「共同利用・共同研究について」がAとなっているが，印象としては，逆のようにも思える。(このあたり，担当者からの答弁がいただければと思います)

さらに，ここに書くべきか迷うことではあるが，1「研究について」では，(1)と(2)の計画がそれぞれ独立したナンバリングになっているのに，2「共同利用・共同研究について」では，(1)と(2)の計画が連番で結ばれている(さらに，3「教育に関する計画」では，1のタイプに戻り，5「グローバル化」になってまた連番)のは，なにか意図があると見るべきなのだろうか(分担して書類作成した?)。

さらに，これは，むしろ，もとの自己点検様式書の問題なのかもしれないが，「共同利用」と「成果公開」は別の概念のようにも思われる。「共同利用」の成果とは，どれくらい使われたかということが問題になる(エビデンスが難しい? アクセス件数?)のではないかとも思う。あわせて，備忘のためにも，ここに付記した。

3. 教育について

(1) 大学院等への教育協力に関しては1項目，(2) 人材育成に関しては5項目の計画を立て，それぞれの項目について，ほぼ計画通りの達成となっている。海外の研究者からも『日本語歴史コーパス』が活用されること，国内で、『日本語歴史コーパス』を活用できる若手研究者が育つことは，極めて重要な課題と思われるので，それが計画通り行なわれていることは評価できる。また，「大学院生4名以上を共同研究員としてプロジェクトに参画させる。」(2)2.)を毎年行なって，コンスタントに『日本語歴史コーパス』を研究に活用できる人材を育成しようとして，単年度で現に達成していることも評価できる。さらに，国際学会で発表する若手研究者への経費援助も，上述の，海外の研究者からの『日本語歴史コーパス』活用のデモンストレーションとしても意義深いと考えられる。

4. 社会との連携及び社会貢献について

(1) 産業界や地域社会との連携に関しては2項目，(2) 研究成果の社会への普及に関しては3項目の計画を立て，一部，計画になかった実施項目も達成している。たとえば，(株)小学館・(株)

ネットアドバンスと連携して公開した『日本語歴史コーパス』とジャパンナレッジ「新編日本古典文学全集」本文へのリンクを追加したことに加え、計画にはなかった『日本国語大辞典』とのリンクについての打合わせを行ったこと、三省堂古語辞典の編纂に、コーパス活用の面で協力し、通時コーパスを活用した記事を執筆したこと、中学高校等の古文の授業での利用を想定したコーパス簡易検索アプリケーション「ことねり」を開発し公開したことなどが挙げられる。なかでも、「ことねり」は、冒頭一字と品詞情報から、資料別用例にアクセスでき、中学高校等の古文授業で、活用されることが大いに期待できる（中納言のアカウントがないと使えないのは、若干ハードルか）。昨今の、高校教育で古典は必要か否かの議論にも寄与するかもしれない。古文の用例が、これほど簡便に検索できるのであれば、古文の本文に接するための、いわゆる「垣根」は低くなるからである。

5. グローバル化について

(1) 国際的協業に関しては3項目、(2) 国際的発信に関しては2項目の計画を立て、各項目について、ほぼ計画通りに実施されている（自己評価としてはAのようだが、どの点が、計画以上なのか、伝わってこないように思う）。なお、分りづらかったのは、(1)2. 「海外において書き言葉コーパス利用の講習会(セミナー)を行う。」という計画で、通時コーパスのためのプロジェクトでなぜ、BCCWJが立ち交っているのか、また、それを実施した「上海外国語大学において11月7日にNINJALセミナー「日本語研究の基盤としての言語資源」を開催」では、『日本歴史コーパス』に関しても発題されているのに、そこへの言及もない（いわゆる、ねじれている）ことである。

6. その他特記事項

特になし。

大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究

プロジェクトリーダー：小磯 花絵

I. プロジェクトの概要

1. 目的及び特色

本プロジェクトの目的は、均衡性を考慮した大規模な日本語日常会話コーパスを構築し、それに基づく分析を通して、日常会話を含む話し言葉の特性を、レジスター・相互行為・経年変化の観点から多角的に解明することである。そのために、(1) 多様な日常場面の会話 200 時間を収めた大規模コーパスの構築を目指す会話コーパス構築班、及び、構築したコーパスを用いて、(2) 語彙・文法・音声などに着目してレジスターの多様性を研究するレジスター班、(3) 会話相互行為の中で文法が果たす役割や構造を研究する相互行為班、(4) 語彙・文法・音声などに着目して話し言葉の経年変化を研究する経年変化班の四つの班を組織して研究を進める。

会話コーパス構築班では、日常の会話行動に関する調査にもとづき、自宅・職場・店舗・屋外での家族・友人・同僚・店員との会話など、多様な日常場面での会話を網羅するようコーパスを設計するものであり、世界的に見ても新しい試みである。また、従来の多くの会話コーパスのように収録のために人を集めて会話してもらうのではなく、生活の中で生じる会話を会話者自身に収録してもらうことにより、日常の会話を自然な形で記録する点にも特色がある。会話の音声・映像を収録し、文字化した上で、形態論情報や統語情報、談話情報などのアノテーションを施し、一般に公開する。これにより、話し言葉に関する高度なコーパスベースの研究基盤の確立を目指す。こうしたコーパスは、話し言葉や会話行動に関する基礎研究だけでなく、日本語教育や辞書編纂、音声情報処理、ロボット工学などの応用研究にも資するものである。また、後世の人々が 21 世紀初頭の日本人の生活や文化を知るための貴重な記録となる。

コーパスに基づく話し言葉研究では、現代の日常会話に加え、講演などの独話、発話を前提に書き言葉で記されたシナリオ、発話を前提としない小説などの会話文、1950 年代以降の話し言葉など、多様なデータを対象に、高度な統計的分析や緻密な微視的分析を通して、話し言葉の語彙・文法・音声・相互行為上の特性や仕組み、その経年変化の実態を、実証的に解明する。こうした研究を支えるものとして、昔の話し言葉データや BCCWJ の小説などの会話文、国会会議録などを対象にデータを整備し一般に公開する。

このように本プロジェクトでは、日常会話を含む様々なコーパスやデータベースを整備・構築し一般に公開することによって、話し言葉コーパスの共同利用・共同研究の基盤強化をはかる。

2. 年次計画 (ロードマップ)

●全体計画・研究組織

本プロジェクトの実施にあたって図に示す 4 つの班を組織して研究を推進する。

【コーパス構築班】

多様な場面の日常会話を収めた『日本語日常会話コーパス』を構築し、次の通り公開する。

平成 30 年度：50 時間の会話の映像・音声・転記・短単位データをモニター公開 (31, 32 年度も継続して公開)

令和 3 年度：200 時間分の会話の映像・音声・転記・短単位データに加え、コアデータ 20 時間には人手で各種アノテーション (長単位・文節・発話単位・係り受け・対話行為など) を付与して本公開

【3つの研究班】

各班の研究に必要となるコーパス・データベース・アノテーションを随時整備し、各班のテーマの研究を推進する。

構築したコーパス・データベースについては以下の通り公開する。

平成 28 年度：『名大会話コーパス』中納言版・ひまわり版を一般公開（レジスター班）

平成 29 年度：『国会会議録』ひまわり版を一般公開（経年変化班）

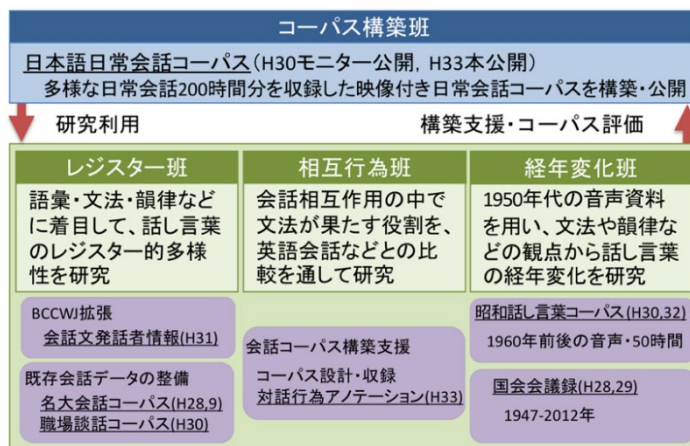
平成 30 年度：『現日研・職場談話コーパス』中納言版を一般公開

平成 30 年度：『昭和話し言葉コーパス』独話をモニター公開（経年変化班）

令和元年度：BCCWJ 中納言版 会話文発話者情報の拡張（レジスター班）

令和 2 年度：『昭和話し言葉コーパス』を本公開（経年変化班）

各班の研究成果をとりまとめて論文集を編纂し、令和 3 年度末までに 1 冊以上刊行する。



● 年次計画

H28 年度	会話コーパス整備 その他のデータ整備 研究 成果発表 若手育成 成果物公開	会話収録・データ整備の開始 アノテーション仕様策定・自動付与システム整備 [昭和話し言葉コーパス] 転記テキスト作成開始 [国会会議録検索システム] 構築・公開 [BCCWJ 発話者情報] アノテーション仕様策定・付与開始 [名大会話コーパス] 形態論情報付与 班ごとに研究会合を持ち研究を始動 シンポジウム 1 回, 班合同研究発表会 1 回開催 コーパス利用講習会 2 回開催 『名大会話コーパス』一般公開 (形態論情報付きテキスト検索版)
H29 年度	会話コーパス整備 その他のデータ整備 研究 成果発表 若手育成	会話収録・データ整備の継続 コアデータ・アノテーション人手修正開始 プロジェクト内部のデータ公開 [昭和話し言葉コーパス] 転記テキスト作成継続 [BCCWJ 発話者情報] アノテーション継続 既存データを中心とする予備研究を推進 シンポジウム 1 回, 班合同公開研究発表会 1 回開催 コーパス講習会 2 回開催
H30 年度	会話コーパス整備 その他のデータ整備 研究 成果発表 若手育成	会話収録・データ整備の継続 コアデータ・アノテーション人手修正継続 [昭和話し言葉コーパス] アノテーション開始, モニター公開準備 [BCCWJ 発話者情報] 検索システム整備開始 既存データにプロジェクト整備データを加えて研究を展開 シンポジウム・ワークショップ 3 回開催 フォーラム (日本語の変化を探る) 1 回開催 コーパス講習会 2 回開催

	成果物公開	『日本語日常会話コーパス』50時間モニター公開 『昭和話し言葉コーパス』25時間モニター公開（うち許諾が取れたもの） 『現日研・職場談話コーパス』一般公開
R元年度	会話コーパス整備 その他のデータ整備 研究 成果発表 若手育成 成果物公開	会話収録・データ整備の継続 コアデータ・アノテーション人手修正継続 [昭和話し言葉コーパス] アノテーション継続 既存データにモニター公開データを加えて研究を開始・コーパス評価 シンポジウム3回開催 コーパス講習会2回開催 『BCCWJ 発話者情報』一般公開（中納言版） 『日本語日常会話コーパス』50時間モニター公開（継続） 『昭和話し言葉コーパス』モニター公開（継続）
R2年度	会話コーパス整備 研究 成果発表 若手育成 成果物公開	会話収録・データ整備の継続 コアデータ・アノテーション人手修正継続 既存データにモニター公開データを加えて研究を推進・コーパス評価 シンポジウム2回開催 コーパス講習会2回開催 『昭和話し言葉コーパス』本公開 『日本語日常会話コーパス』50時間モニター公開（継続）
R3年度	会話コーパス整備 研究 成果発表 成果物公開	公開準備（データ統合・検証、個人情報処理など） 研究成果のとりまとめ シンポジウム1回開催 コーパス講習会1回開催 『日本語日常会話コーパス』本公開 論文集の刊行1冊以上

II. 令和元年度活動概要

令和元年度予算総額 30,530千円

令和元年度 成果の概要

1. 研究に関する計画

- ・レジスター班の研究成果を発信するため、シンポジウム「話し言葉の多様性」を令和1年8月30日に国語研で開催した。
- ・プロジェクト全体の研究成果を発信するため、シンポジウム「日常会話コーパスV」を令和2年3月9日に一橋大で開催する計画だったが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止した。
- ・会話コミュニケーションについての議論を深めるため、関連する科研費プロジェクトと合同でシンポジウム「ことば・認知インタラクション8」を令和2年3月10日に国立情報学研究所で開催する計画だったが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止した。
- ・『日常会話コーパス』モニター公開版を対象に語彙表などの基本的統計情報を報告書としてとりまとめ、プロジェクトのサイトで公開した。
- ・以上の研究成果は、プロジェクト共同研究員の研究成果も含めて、報告書1冊、論文・ブックチャプター

11 件, 辞典編纂 1 件, 発表・講演 41 件, データベース等 4 件 (うち 1 件はプロジェクト内限定) として公開した。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

- ・昨年度, 音声・文字化資料をオフラインで公開した『昭和話し言葉コーパス』モニター版について, 形態論情報を新たに付与し, オンライン検索システム「中納言」にて音声配信機能を付けて公開した。
- ・『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の図書館サブコーパスの文学・物語に含まれる会話文に対し, 話者情報 (話者名・性別・年代) を付与し, オンライン検索システム「中納言」で公開した。
- ・昨年公開した『日本語日常会話コーパス』モニター版に加え, 追加 50 時間 (計 100 時間) をプロジェクト共同研究員およびその指導学生に限定公開し, 研究・教育に活用した。
- ・コーパス構築・コーパス研究の可能性を広げるため, コーパス構築に関わる複数のプロジェクトと合同で, 合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション—くだけた表現」を国語研で開催した。

3. 教育に関する計画

- ・コーパス言語学分野の人材を育成するために, 若手研究者や大学院生を主対象とする講習会を 3 回 (計 4 コース) 開催した。また講習会で用いた資料をプロジェクトのサイトで公開した。
- ・若手研究者を育成するため, 非常勤研究員 5 名を雇用した。R を用いた統計勉強会を開催するなどし, コーパス言語学の若手研究者の育成につとめた。結果, 非常勤研究員 1 名が令和 1 年 9 月に博士号 (京都大学) を取得した。
- ・共同研究員が指導する大学生・大学院生に『日常会話コーパス』を優先的に提供してコーパス活用の研究支援を実施することで, 修士論文 2 本, 卒業論文 4 本の成果に結びついた。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

- ・プロジェクトで構築した『日本語日常会話コーパス』モニター版, 『昭和話しことばコーパス』モニター版, 『名大会話コーパス』, 『現日研究・職場談話コーパス』, 『国会会議録』を, インターネットを通して一般に公開し, 今年度合計で 1 万件を超える新規利用申請があった。
- ・『岩波国語辞典 第八版』(岩波書店) の改訂に際し, 語釈の記述や見出し語の選定に『日本語日常会話コーパス』が用いられるなど, 産業界で活用された。

5. グローバル化に関する計画

- ・国語研と Academia Sinica が共催で開催した国際会議 Linguistic Patterns in Spontaneous Speech 2019 (Academica Sinica, 11 月 21-22 日) にて『日常会話コーパス』のデモンストレーションを行い, 研究成果を国際的に発信した。
- ・海外在住の研究者 1 名をプロジェクト共同研究員として加え, 『日本語日常会話コーパス』を用いたデータセッションを通して, コーパスについて評価してもらった。

6. その他

該当する活動なし。

Ⅲ. 項目ごとの状況

1. 研究に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
<p>(1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画</p> <p>[公開研究発表会・講演会, 国際シンポジウム]</p> <ol style="list-style-type: none">プロジェクト全体の研究成果を発信するために, 各班合同のシンポジウム「<u>日常会話コーパス V</u>」を令和2年3月9日に一橋大学で開催する予定だったが, 新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止した。レジスター班の研究成果を発信するために, <u>シンポジウム「話し言葉の多様性」</u>を令和1年8月30日に国語研で開催した。口頭発表4件, パネル「生の話し言葉から見えてくるもの」1件(話題提供5件), 参加者は119名(うち学生15名)であった<u>コーパス合同シンポジウム</u>を令和1年9月5日に開催した(詳細は「2. 共同利用・共同研究に関する計画」を参照)。会話コミュニケーションについての議論を深めるため, 関連する科研費プロジェクトと合同で<u>シンポジウム「ことば・認知インタラクション 8」</u>を令和2年3月10日に国立情報学研究所で開催する予定だったが, 新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止した。『日本語日常会話コーパス』および『昭和話し言葉コーパス』の研究成果を発信するため, 令和1年9月21日に計量国語学会第63回大会においてデモンストレーションを行った。 <p>[フィールド調査]</p> <ol style="list-style-type: none">昨年度までに収集を終えた会話の場面や話者のバランスを検証した上で, 不足する種別・属性の会話・話者(会議会合および中高生)を増補すべく, 職場や学校を中心に収録調査を新たに実施し, 目標の10時間分の会話を収録した。 <p>[研究成果の公表]</p> <ol style="list-style-type: none">『日本語日常会話コーパス』モニター公開版を対象に語彙表などの基本的統計情報を報告書としてとりまとめ, プロジェクトのサイトで公開した。以上の研究成果を, 報告書1冊, 論文・ブックチャプター11件, 辞典編纂1件, 発表・講演41件として公開した。 <p>(2) 研究実施体制等に関する計画</p> <ol style="list-style-type: none">コーパスに基づく話し言葉研究を推進するために, 国内外の研究者55名をプロジェクト共同研究員として組織した。今年度は, 日本語史や音声工学(音源分離処理・音声認識)など, これまで不足していた分野の共同研究員を増補した。	

2. 共同利用・共同研究に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
<p>(1) 共同利用・共同研究に関する計画</p> <p>[データベース等の構築・公開]</p> <ol style="list-style-type: none">『日本語日常会話コーパス』については, 本公開の準備のために, 文字化や各種アノテーションを行った。アノテーションは, これまで進めてきた短単位・長単位・談話行為(ISO24617-2 日本語拡張版)に加え, 韻律情報(X-JToBI 簡易版準拠)や係り受けについても実施した。述語項構造についてはコーパス開発センターと共同で方針を検討した。『日本語日常会話コーパス』50時間分のモニター公開を引き続き行い, 語彙表・語数表を作成して公開	

した。また追加 50 時間のデータ（計 100 時間）をプロジェクト内の共同研究員およびその指導学生に公開し、研究・教育に活用した。

3. 1950 年代から 1970 年代にかけて国立国語研究所で録音された音声資料『昭和話し言葉コーパス』のうち、昨年度、音声・文字化資料をオフラインで公開した 17 時間の独話について、形態論情報を新たに付与した上で、令和 2 年 1 月 23 日にオンライン検索システム「中納言」（音声配信機能付き）にて公開した。また会話 25 時間の整備を継続し、来年度に予定している本公開の準備を進めた。
4. 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の図書館サブコーパスの文学・物語（NDC:913～993 の 2707 サンプル）に含まれる会話文に対し、話者情報（話者名・性別・年代）を付与し、令和 2 年 3 月 16 日に、オンライン検索システム「中納言」で情報を公開した。これにより、実際に話された会話と小説等で書かれた会話の異同を、コーパスを用いて研究できる環境が整った。

[データベース等に関する講習会]

5. プロジェクトで構築・公開したコーパスを対象とする講習会を 3 回（計 4 コース）開催し、計 54 名が参加した。また講習会で用いた資料をプロジェクトのサイトで公開した。
 - *第 7 回コーパス利用講習会（7 月 27 日）
 - ・検索システム「ひまわり」コース
 - *第 8 回コーパス利用講習会（8 月 30 日）
 - ・オンライン検索システム「中納言」コース
 - *第 9 回コーパス利用講習会（8 月 31 日）
 - ・音声映像システム「Praat」・「ELAN」コース
 - ・検索システム「ひまわり」コース

[データベース等を使った研究成果]

6. プロジェクトで整備した上記コーパスを用いた研究発表を、シンポジウム「話し言葉の多様性」や言語資源活用ワークショップ、言語学会、語用論学会、音響学会、言語処理学会、国際会議 ICPhS や SPSS などで発表した。
7. 『日本語日常会話コーパス』モニター公開を引き続き行い、今年度は中納言版（完全無償）については 3946 件の新規利用申請が、HDD 版（実費負担）については 52 件の新規契約申請（うち 8 件は海外の大学、6 件は企業）があった。

(2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画

[プロジェクト合同の研究集会]

8. プロジェクト間の連携を深め、コーパス構築・コーパス研究の可能性を広げるために、「方言コーパス」、「通時コーパス」、「学習者コーパス」、「コーパスアノテーション」など、コーパス構築に関わる複数のプロジェクトと合同でシンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション—くだけた表現」を令和 1 年 9 月 5 日に国語研で開催した（参加者は 64 名）。

3. 教育に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
(1) 大学院等への教育協力に関する計画 特になし	

(2) 人材育成に関する計画

[プロジェクト非常勤研究員の雇用]

1. 若手研究者を育成するため、非常勤研究員を5名雇用した。

[大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加等・発表機会の提供・研究費の支援]

2. 大学院生や非常勤研究員に、会話データを優先的に研究利用できる環境を整え、またRを用いた統計勉強会を開催するなどして、コーパス言語学の若手研究者の育成につとめた。結果、非常勤研究員5名のうち1名が令和1年9月に博士号(京都大学)を取得した。
3. プロジェクトが主催するシンポジウムにおいて、大学院生を含む若手研究者6名に発表の機会を提供する予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止した。
4. 若手の非常勤研究者1名に対し、国際会議での成果発表のための経費を援助した。

[講習会]

5. プロジェクトが主催した講習会のうち、第7回コーパス利用講習会と第8回コーパス利用講習会については、若手育成を目標に若手研究者を主対象として実施した。(詳細は「2. 共同利用・共同研究に関する計画」を参照)

[その他]

6. 2018年12月に公開した『日本語日常会話コーパス』モニター版が、明海大学大学院応用言語学研究科の日本語学特論・日本語教育学特論や専修大学、お茶の水女子大学ゼミナールなどの授業で活用された。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

自己点検評価

計画どおりに実施した

(1) 産業界や地域社会との連携に関する計画

1. 『岩波国語辞典 第八版』(岩波書店)の改訂に際し、語釈の記述や見出し語の選定に『日本語日常会話コーパス』が用いられるなど、産業界で活用された。

(2) 研究成果の社会への普及に関する計画

[インターネット等を通じた研究成果の社会への発信]

2. プロジェクトで整備・公開した『日本語日常会話コーパス』モニター版、『昭和話し言葉コーパス』モニター版、『名大会話コーパス』、『現日研・職場談話コーパス』、『国会会議録』を、インターネットを通して一般に発信した。今年度は合計で1万件を超える新規利用申請があり、研究広く活用された。
3. コーパス利用講習会の資料をプロジェクトのサイトを通じて一般に発信した(詳細は「2. 共同利用・共同研究に関する計画」を参照)。

5. グローバル化に関する計画

自己点検評価

計画どおりに実施した

(1) 国際的協業に関する計画

1. 海外在住の研究者1名をプロジェクト共同研究員として加え、日常会話コーパスを用いたデータセッションを通して、コーパスについて評価してもらった。

(2) 国際的発信に関する計画

国語研と Academia Sinica が共催で開催した国際会議 Linguistic Patterns in Spontaneous Speech 2019 (Academia Sinica, 2019年11月21-22日)にて『日本語日常会話コーパス』のデモンストレーションを行

い、研究成果を国際的に発信した。

6. その他

該当する活動なし。

令和元年度の評価

《評価結果》

計画どおり実施している

研究については、前年度までに収集したデータのバランスを検証した上で、新たな収録調査によってデータを増補して目標の10時間分の会話を収録し、『日常会話コーパス』モニター公開版の基本的統計情報を報告書としてとりまとめて公開するなど、計画通り進捗している。予定していたシンポジウムを新型コロナウイルス感染拡大防止のために中止したが、その前にシンポジウム「話し言葉の多様性」を開催してレジスター班の研究成果を発信した。

共同利用・共同研究についても、予定通りコーパスの作成・拡張・公開が進んでいる。特に『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の拡張版によって、実際の会話と小説等の中の会話を実データで比較する研究を可能にした。『日本語日常会話コーパス』に関して国内外の大学や企業から利用申請があったことから、本プロジェクトは学術にも産業にも有用と考えられる。

教育については、雇用や研究環境整備や勉強会により若手研究者の育成を図り、学思の取得等に結び付いている。また、前年度に公開した『日本語日常会話コーパス』モニター版が、大学・大学院の授業等で活用されている。

社会との連携及び社会貢献については、プロジェクトで整備・公開したコーパスについて今年度の合計で1万件を超える新規利用申請があり、学術研究に広く活用されていることがわかる。また、『岩波国語辞典 第八版』（岩波書店）の改訂に『日本語日常会話コーパス』が用いられるなど、本プロジェクトの成果は実務でも活用されている。

グローバル化については、Academia Sinica と共催した国際会議で『日常会話コーパス』のデモンストレーションを行うとともに、海外の研究者をプロジェクト共同研究員に加えてコーパスを評価してもらうなど、国際的な研究成果の発信と研究協力を図っている。

以上のように全項目にわたってプロジェクトが計画通り進捗していると考えられる。今後のコーパスの開発・改良のため、コーパスの利用状況等を調査して利用者のニーズを明らかにすることが望ましいと思う。

《評価項目》

1. 研究について

前年度までに収集した会話の場面や話者のバランスを検証した上で、不足する種別・属性の会話・話者（会議会合および中高生）を増補すべく、職場や学校を中心に収録調査を新たに実施し、目標の10時間分の会話を収録した。また、『日常会話コーパス』モニター公開版を対象に語彙表などの基本的統計情報を報告書としてとりまとめ、プロジェクトのサイトで公開した。研究は計画通り進捗していると考えられる。

計量国語学会第63回大会においてデモンストレーションを行い、『日本語日常会話コーパス』と『昭和話し言葉コーパス』の研究成果を発信した。また、コーパス合同シンポジウム「話し言葉の

多様性」を開催してレジスター班の研究成果を発信した。これらとプロジェクト共同研究員の研究成果も含めて、報告書1冊、論文・ブックチャプター11件、辞典編纂1件、発表・講演41件、データベース等4件により研究成果を公開した。プロジェクト全体の研究成果を発信するシンポジウム「日常会話コーパス V」と会話コミュニケーションについての議論を深めるため関連する科研費プロジェクトと合同で開催するはずだったシンポジウム「ことば・認知インタラクション 8」は新型コロナウイルス感染拡大防止のため予定通り開催できなかった(後者は2020年6月27日にオンラインで開催されている)が、これはやむを得ないだろう。

2. 共同利用・共同研究について

前年度に音声・文字化資料をオフラインで公開した『昭和話し言葉コーパス』モニター版に対して形態論情報を付与し、オンライン検索システム「中納言」にて音声配信機能付きで公開した。『日常会話コーパス』および『日本語日常会話コーパス』についても予定通り作業が進み、データの活用も始まっている。また、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の図書館サブコーパスの文学・物語に含まれる会話文に対し、話者情報(話者名・性別・年代)を付与して「中納言」で公開した。これは、実際の会話と小説等の中の会話の異同についてコーパスで研究することを可能にしたという点で重要な貢献である。

プロジェクトで構築・公開したコーパスに関する講習会を3回開催し、その資料をプロジェクトのサイトで公開した。また、これらのコーパスを用いた研究の成果を学術集会等で発表した。『日本語日常会話コーパス』を引き続きモニター公開し、国内外の大学や企業から利用申請があった。このことから、本プロジェクトの成果は学術にも産業にも有用と考えられる。

3. 教育について

非常勤研究員5名の雇用、若手研究者が『日常会話コーパス』のデータを優先的に利用できる環境の整備、Rを用いた統計勉強会などにより、コーパス言語学の若手研究者の育成を図り、共同研究員が指導する学生の修士論文2本・卒業論文4本、非常勤研究員1名の博士号(京都大学)取得等に結び付いている。また、若手の非常勤研究者1名に対し、国際会議での成果発表のための経費を援助した。

さらに、前年度に公開した『日本語日常会話コーパス』モニター版が、明海大学大学院応用言語学研究科の日本語学特論・日本語教育学特論や専修大学、お茶の水女子大学ゼミナールなどの授業で活用された。

4. 社会との連携及び社会貢献について

プロジェクトで整備・公開した『日本語日常会話コーパス』モニター版、『昭和話し言葉コーパス』モニター版、『名大会話コーパス』、『現日研・職場談話コーパス』、『国会会議録』を、インターネットを通して一般に発信した。今年度は合計で1万件を超える新規利用申請があり、学術研究に広く活用されていることがわかる。

また、『岩波国語辞典 第八版』(岩波書店)の改訂に際し、語釈の記述や見出し語の選定に『日本語日常会話コーパス』が用いられるなど、本プロジェクトの成果は実務でも活用されている。

5. グローバル化について

国語研とAcademia Sinicaが共催した国際会議 Linguistic Patterns in Spontaneous Speech 2019にて『日常会話コーパス』のデモンストレーションを行うとともに、海外在住の研究者1名をプロ

ジェクト共同研究員に加えて『日本語日常会話コーパス』を用いたデータセッションを通してコーパスを評価してもらうなど、国際的な研究成果の発信と研究協力を図っている。

6. その他特記事項

特になし。

日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明

プロジェクトリーダー：石黒 圭

I. プロジェクトの概要

1. 目的及び特色

本プロジェクトの目的は、日本語学習者のコミュニケーションを多角的に解明するとともに、その成果を日本語教育に応用する方法を明らかにすることである。具体的には、日本語教育やその関連領域の研究者や教育者、そして日本語学習者に有益なコーパスを構築すること、論文集や教師指導書を刊行すること、シンポジウムや研修会を開催することである。

本プロジェクトでは日本語学習者のコミュニケーションを多角的に解明するために、3つのサブプロジェクトを設ける。「日本語学習者の日本語使用の解明」、「日本語学習者の日本語理解の解明」、「日本語学習のためのリソース開発」である。

サブプロジェクト「日本語学習者の日本語使用の解明」では、「学習者の会話能力の解明」と「学習者の日本語習得過程の解明」を行う。「学習者の会話能力の解明」としては、母語話者と学習者の自然会話コーパスを構築し、それをもとにして学習者の会話能力を解明する。この研究は、条件統制された「自発的な自然会話」をデータとした研究であることに特色がある。「学習者の日本語習得過程の解明」としては、さまざまな言語を母語とする学習者の対話や作文のコーパスを構築し、それをもとにして異なる言語を母語とする日本語学習者の日本語の習得過程を解明する。この研究は、日本を含む世界のさまざまな地域において統制された条件で収集したデータを用いることにより、母語による違いを重視することに特色がある。

サブプロジェクト「日本語学習者の日本語理解の解明」では、「学習者の読解過程の解明」と「学習者の聴解過程の解明」を行う。これまでの研究は学習者の言語産出活動である発話や作文に焦点を当てたものが中心であったが、この研究は学習者の言語理解活動である読解や聴解に焦点を当てたものである。学習者に理解した内容を母語で語ってもらったデータや教室での学習者の談話を通して、外からは見えない読解や聴解の過程を可視化する研究である点に特色がある。

サブプロジェクト「日本語学習のためのリソース開発」では、「オンライン日本語基本動詞辞典の作成」と「読解教材・聴解教材の開発」を行う。「オンライン日本語基本動詞辞典の作成」としては、日本語の基本動詞が持つさまざまな意味を図解なども用いてわかりやすく解説する音声付オンライン辞典を作成し、日本語教師や学習者に提供する。これは、大規模コーパスを活用して作成した辞典である点に特色がある。「読解教材・聴解教材の開発」では、日本語学習者用の読解教材・聴解教材を作成するための共同研究を行った上で、ウェブ版教材サンプルを作成し、日本語教師や学習者に提供する。これは、サブプロジェクト「日本語学習者の日本語理解の解明」で得られた調査結果に基づいて教材を作成する点に特色がある。

2. 年次計画（ロードマップ）

● 全体計画・研究組織						
学習者のコミュニケーション	H28年度	H29年度	H30年度	R元年度	R2年度	R3年度
日本語使用班						
自然会話コーパス (BTSJ)	先行公開 294会話 (588名分)	39会話追加 計333会話 (666名分)	改訂公開 計333会話 (666名分)	35会話追加 計368会話 (736名分)	22会話追加 計390会話 (780名分)	本格公開 10会話追加 全400会話 (800名分)
シンポジウム	1回	1回	1回	1回	1回	1回
講習会	1回	1回	1回	1回	1回	1回
多言語母語の日本語学習者横断コーパス (I-JAS)	先行公開 225名分	225名分追加 計450名分	210名分追加 計660名分	215名分追加 計875名分	本格公開 175名分追加 計1050名分	既存データの 確認・修正 コーパスの 維持・運用
北京日本語学習者縦断コーパス (B-JAS)	データ収集	データ収集	データ収集	データ収集	データ 公開準備	データ 公開準備
ワークショップ	1回	1回	1回	1回	1回	
日本語理解班						
日本語非母語話者の読解コーパス		先行公開 45件	40件追加 計85件	20件追加 計105件	10件追加 計115件	本格公開 全115件
日本語非母語話者の聴解コーパス				先行公開 20件	30件追加 計50件	本格公開 全50件
日本語学習者の文章理解過程データベース		先行公開 3名分	57名分追加 計60名分	60名分追加 計120名分	60名分追加 計180名分	本格公開 全180名分
シンポジウム等		1回	1回	1回	1回	1回
リソース開発班						
基本動詞辞典	先行公開 15見出し	15見出し追加 計30見出し	15見出し追加 計45見出し	15見出し追加 計60見出し	15見出し追加 計75見出し	本格公開 15見出し追加 計90見出し
研究発表会	1回	1回	1回	1回	1回	1回
ウェブ版教材の開発		先行公開 28件	5件追加 計33件	5件追加 計38件	5件追加 計43件	本格公開 全43件
国際シンポジウム等		NINJAL国際 シンポジウム (ICPLJ)開催			国際シンポ ジウム開催	
プロジェクト全体						
NINJAL日本語教師セミナー（国内）	1回	1回	1回	1回	1回	1回
NINJAL日本語教師セミナー（海外）	1回	1回	1回	1回	1回	1回
NINJALチュートリアル	1回		1回			
刊行・出版		学習者の作文 能力に関する 論文集刊行	学習者の会話 能力に関する 論文集刊行 読解活動に関 する教師指導 書刊行	学習者の読解 過程に関する 論文集刊行 基本動詞辞典 に関する論文 集刊行	学習者の読解 過程に関する 論文集刊行 読解教材開発 に関する研究 書刊行	学習者の習得 過程に関する 論文集刊行 学習者の聴解 過程に関する 論文集刊行

●年次計画

【平成 28 (2016) 年度】

- ・母語話者と学習者の自然会話コーパスの構築に着手する。
- ・多言語を母語とする日本語学習者コーパスの構築に着手する。
- ・日本語学習者の読解コーパスの構築に着手する。
- ・オンライン日本語基本動詞辞典の作成に着手する。
- ・ウェブ版読解教材の開発に着手する。

【平成 29 (2017) 年度】

- ・母語話者と学習者の自然会話コーパスの構築を継続し、その一部を試験公開する。
- ・多言語を母語とする日本語学習者コーパスの構築を継続し、その一部を試験公開する。
- ・日本語学習者の読解コーパスの構築を継続し、その一部を試験公開する。
- ・オンライン日本語基本動詞辞典の作成を継続し、その一部を試験公開する。
- ・ウェブ版読解教材の開発を継続する。ウェブ版聴解教材の開発に着手する。
- ・NINJAL 国際シンポジウム (ICPLJ) を開催する。

【平成 30 (2018) 年度】

- ・母語話者と学習者の自然会話コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・多言語を母語とする日本語学習者コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・日本語学習者の読解コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・オンライン日本語基本動詞辞典の作成を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・ウェブ版読解教材の開発を継続し、サンプルを試験公開する。ウェブ版聴解教材の開発を継続する。
- ・学習者の会話能力に関する論文集を刊行する。
- ・学習者の読解活動に関する教師指導書を刊行する。

【令和元 (2019) 年度】

- ・母語話者と学習者の自然会話コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・多言語を母語とする日本語学習者コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・日本語学習者の読解コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・オンライン日本語基本動詞辞典の作成を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・ウェブ版読解教材の開発を継続し、試験公開の範囲を拡大する。ウェブ版聴解教材のサンプルを試験公開する。
- ・学習者の読解過程に関する論文集を刊行する。

【令和 2 (2020) 年度】

- ・母語話者と学習者の自然会話コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・多言語を母語とする日本語学習者コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・日本語学習者の読解コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・オンライン日本語基本動詞辞典の作成を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・ウェブ版読解教材とウェブ版聴解教材の開発を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・学習者の読解過程に関する論文集を刊行する。
- ・読解教材開発に関する研究書を刊行する。
- ・日本語学習者のコミュニケーションに関する国際シンポジウムを開催する。

【令和 3 (2021) 年度】

- ・母語話者と学習者の自然会話コーパスを本格公開する。

- ・多言語を母語とする日本語学習者コーパスを本格公開する。
- ・日本語学習者の読解コーパスを本格公開する。
- ・オンライン日本語基本動詞辞典を本格公開する。
- ・ウェブ版読解教材とウェブ版聴解教材を本格公開する。
- ・学習者の日本語習得過程に関する論文集を刊行する。
- ・学習者の聴解過程に関する論文集を刊行する。

II. 令和元年度活動概要

令和元年度予算総額 29,400 千円

令和元年度 成果の概要

1. 研究に関する計画

本プロジェクトでは、研究に関する計画として研究論文集を計 8 点刊行した。

日本語使用班で、学習者コーパスに関する以下の研究論文集 3 点を刊行した。

- ①宇佐美まゆみ編『自然会話分析への語用論的アプローチ—BTSJ コーパスを利用して—』（ひつじ書房）
- ②迫田久美子・石川慎一郎・李在鎬編『日本語学習者コーパス I-JAS 入門—研究・教育にどう使うか—』（くろしお出版）
- ③石黒圭・鳥日哲編『どうすれば論文・レポートが書けるようになるか学習者から学ぶピア・レスポンス授業の科学—』（ココ出版）
日本語理解班で、日本語学習者の読解過程に関する以下の研究論文集 4 点を刊行した。そのうち、④は学会誌の書評で高い評価を受けた。
- ④野田尚史・迫田久美子編『学習者コーパスと日本語教育研究』（くろしお出版）
- ⑤石黒圭編『日本語教師のための実践・読解指導』（くろしお出版）
- ⑥石黒圭編『文脈情報を用いた文章理解過程の実証的研究—学習者の母語から捉えた日本語理解の姿—』（ひつじ書房）
- ⑦野田尚史編『日本語学習者の読解過程』（ココ出版）
リソース開発班で、オンライン日本語基本動詞ハンドブックの成果を取りまとめた下記の研究論文集を刊行した。
- ⑧プラシャント・パルデシ，靱山洋介，砂川有里子，今井新悟，今村泰也編『多義動詞分析の新展開と日本語教育への応用』（開拓社）

2. 共同利用・共同研究に関する計画

本プロジェクトでは、共同利用・共同研究に関する計画として次の八つを推進した。

- ①母語話者と学習者の自然会話コーパスの構築を継続し、44 会話のコーパスデータを追加し、計 377 会話（754 名分）を公開した。また、その活用のために講習会・講演会を 6 回開催した。
- ②多言語母語の日本語学習者横断コーパスの構築を継続し、日本語学習者 215 名分の第四次データ公開に加え、175 名分の第五次データ公開を前倒しで行い、これにより、全データ 1050 名分の公開を終え、完成した。また、その活用のために講習会・講演会を 3 回開催した。
- ③日本語非母語話者の読解コーパス、日本語非母語話者の聴解コーパスはそれぞれに 20 件を新たに公開した。
- ④日本語学習者の文章理解過程データベースは 180 名分のコーパスデータを新たに公開したことで、全デー

タ 240 名分の公開を前倒しで終え、完成した。

- ⑤ウェブ版読解・聴解教材は合計 7 レッスンを新たに公開した。
- ⑥オンライン日本語基本動詞ハンドブックの 15 見出しを新たに公開した。
- ⑦北京日本学研究中心と共同で行っている日本語学習者の日本語習得過程に関するデータ収集を終え、大学入学から卒業までの 4 年間のデータ収集を完了した。
- ⑧「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」プロジェクト等との連携のもと、日本文型バンクの開発・補充、公開を継続し、それに関連する特別講演を 2 回行った。

3. 教育に関する計画

本プロジェクトでは、教育に関する計画として、次の四つを行った。

- ①プロジェクト PD フェローを 2 名雇用し、日本語教育分野の人材を育成した。
- ②博士課程に在籍する大学院生 14 名を共同研究員としてプロジェクトに参画させ、研究の指導を行った。
- ③研究会を 2 回開催し、母語話者と学習者の自然会話コーパスに関して大学院生や若手研究者に発表の機会を提供した。
- ④NINJAL チュートリアルを海外（台湾の東呉大学）で開催した。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

本プロジェクトでは、社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置として、次の三つを遂行した。

- ①ビジネス日本語のプロジェクトを、(株)富士通研究所、(株)クラウドワークス等と協力して遂行し、次の論文集を刊行するとともに、公開シンポジウムを 1 件開催した。
 - ・石黒圭編『クラウドソーシングを用いたビジネス文書の言語学的研究—インターネット上の求人サイトから臨むビジネス日本語研究の新たな地平—』（ひつじ書房）
- ②国立国語研究所日本語セミナー（海外）を、ウズベキスタン 2 都市で「世界諸言語からみた日本語」というタイトルで開催した。また、国内の国立国語研究所日本語教師セミナーを、国文学研究資料館で「顕在化する多言語社会日本と日本語教育」というタイトルで開催した。
- ③日本語教師を対象とした講座を、国際基督教大学グローバル言語教育研究センターとの共催で開催した。また、日本語ボランティアのための講座・研修会を、福岡県国際交流センターおよび仙台観光国際協会との共催で開催した。

5. グローバル化に関する計画

本プロジェクトでは、グローバル化に関する計画として次の四つを推進した。

- ①連携協定を結んでいる北京日本学研究中心と共同で、日本語学習者の日本語習得過程に関する大学卒業までの縦断データ収集を完了し、それに関連する二つのシンポジウムを北京日本学研究中心と北京師範大学で開催した。また、日本語教育の辞書に関するシンポジウムを北京日本学研究中心と共同で開催した。
- ②日本語教育学関連の著名な研究者に参加を依頼し、アドバイザーボードの運用を開始した。

6. その他

該当する活動なし。

Ⅲ. 項目ごとの状況

1. 研究に関する計画

自己点検評価	計画を大幅に上回って実施した
<p>(1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画</p> <p>1. 日本語使用班で、学習者コーパスに関する以下の研究論文集 3 点を刊行した。</p> <p>①宇佐美まゆみ編『自然会話分析への語用論的アプローチ—BTSJ コーパスを利用して—』(ひつじ書房) を、2020 年 3 月に刊行した。</p> <p>②迫田久美子・石川慎一郎・李在鎬編『日本語学習者コーパス I-JAS 入門—研究・教育にどう使うか—』(くろしお出版) を、2020 年 3 月に刊行した。</p> <p>③石黒圭・鳥日哲編『どうすれば論文・レポートが書けるようになるか学習者から学ぶピア・レスポンス授業の科学—』(ココ出版) を 2020 年 2 月に刊行した。</p> <p>2. 日本語理解班で、日本語学習者の読解過程に関する以下の研究論文集 4 点を刊行した。</p> <p>①野田尚史・迫田久美子編『学習者コーパスと日本語教育研究』(くろしお出版) を 2019 年 5 月に刊行し、書評で高い評価を受けた(下記 4. 参照)。</p> <p>②石黒圭編『日本語教師のための実践・読解指導』(くろしお出版) を 2019 年 11 月に刊行した。</p> <p>③石黒圭編『文脈情報を用いた文章理解過程の実証的研究—学習者の母語から捉えた日本語理解の姿—』(ひつじ書房) を 2020 年 1 月に刊行した。</p> <p>④野田尚史編『日本語学習者の読解過程』(ココ出版) を 2020 年 3 月に刊行した。</p> <p>3. リソース開発班で、オンライン日本語基本動詞ハンドブックの成果を取りまとめた下記の研究論文集を刊行した。また、論文集を先行して刊行することに集中し、講演・研修会は行わなかった。</p> <p>①プラシャント・パルデシ、靱山洋介、砂川有里子、今井新悟、今村泰也編『多義動詞分析の新展開と日本語教育への応用』(開拓社) を 2019 年 11 月に刊行した。</p> <p>4. 野田尚史・迫田久美子編『学習者コーパスと日本語教育研究』(くろしお出版) が、<i>Journal of Japanese Linguistics</i> Volume 35 Issue 1 に掲載された書評において、C. K. Thomson 氏から“This monograph is to be commended for its contribution to Japanese language education curriculums and for that it demonstrated the potential of the corpora studies which can make further contributions to betterment of Japanese language education”と評された</p> <p>(2) 研究実施体制等に関する計画</p> <p>5. プロジェクトを推進するために、3つのサブプロジェクトによる共同研究体制を組織し、国内外の日本語教育研究者 179 名で共同研究を推進している。</p> <p>6. 本プロジェクトの研究遂行のために、PD フェローを 2 名、プロジェクト非常勤研究員を 13 名、技術補佐員を 7 名雇用した。</p>	

「計画を大きく上回って実施した」と自己評価した理由

予定していた 3 冊に対し、8 冊の研究論文集論文集を 2019 年度に刊行できたため。とくに、野田尚史・迫田久美子編『学習者コーパスと日本語教育研究』(くろしお出版) が、*Journal of Japanese Linguistics* 誌において学術的に高い評価を得たため。エビデンスデータは上記の本文の説明を参照。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

自己点検評価	計画を大幅に上回って実施した
<p>(1) 共同利用・共同研究に関する計画</p> <p>1. コーパスデータの追加，活用のための講習会は次の通りである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・母語話者と学習者の自然会話コーパスの構築を継続し，予定を上回る 44 会話のコーパスデータを追加し，計 377 会話（754 名分）を公開した（2020 年 3 月）。 ・活用のために開催された講習会・講演会は次の 3 件（5 回）である。 <p>①「第 11 回，第 12 回 BTSJ 活用方法講習会」を国語研にて 2019 年 5 月 18 日に開催（参加者数：17 名，8 名）。</p> <p>②「第 13 回，第 14 回 BTSJ 活用方法講習会」を名古屋大学東山キャンパスにて 2019 年 6 月 2 日に開催（参加者数：25 名，16 名）。</p> <p>③「第 1 回語用論コーパス成果発表会」を国語研にて 2019 年 6 月 29 日に開催（参加者数：52 名）。</p> <p>④シンポジウム「日本語教育は，自然会話コーパスで変わる」を東京外国語大学にて 2020 年 3 月 14 日に開催予定であったが，新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止となった。</p> <p>2. コーパスデータの公開，活用のための講習会は次の通りである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コーパスデータの公開は，令和元年度計画していた第四次公開に加え，計画していなかった第五次公開も行い，I-JAS の全データの公開を終えた。 <p>①I-JAS の第四次公開は，2019 年 5 月に，日本語学習者 215 名分のデータを公開した。</p> <p>② I-JAS の第五次公開は，2020 年 3 月 175 名分のデータの提供を行った。これにより，I-JAS の全データ 1050 名分の公開を終え，完成した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・活用のために開催された講習会・講演会は次の 1 件である。 <p>①コーパス合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション—くだけた表現—」を国語研にて 2019 年 9 月 5 日に共同発表（参加者数：64 名）。</p> <p>②「日本語学習者コーパス「I-JAS」完成記念シンポジウム」を国文研にて 2020 年 3 月 21 日に開催予定であったが，新型コロナウイルス感染拡大防止のため延期となった。</p> <p>③「第 5 回学習者コーパスワークショップ」を国文研にて 2020 年 3 月 21 日に開催に開催予定であったが，新型コロナウイルス感染拡大防止のため延期となった。</p> <p>3. 日本語学習者の読解・聴解コーパスの構築・公開状況は次の通りである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「日本語非母語話者の読解コーパス」は 20 件を新たに公開した。 ・「日本語学習者の文章理解過程データベース」は 180 名分のコーパスデータを新たに公開したことで，全データの公開は終わり，完成した。 ・「日本語非母語話者の聴解コーパス」はウェブサイトを構築し，20 件のコーパスデータを公開した。 <p>4. ウェブ版読解・聴解教材の開発は合計 7 レッスンで，具体的な内容は次の通りである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ウェブ版読解教材は，「人的資源関連の論文」シリーズ 2 レッソンの教材を公開した。 ・ウェブ版聴解教材は，「クリーニングの受付」シリーズ 4 レッスン，「雑談」シリーズ 2 レッスン，「著作権の講義」シリーズ 1 レッスンを公開した。 <p>5. オンライン日本語基本動詞ハンドブックの作成継続の状況は次の通りである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2020 年 3 月末までに 15 見出しを追加した。また，2020 年 3 月末までに音声・ミニアニメの追加・差し替え（55 見出し），コアイメージ・活用表の差し替え（41 見出し）を行った。 <p>(2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画</p>	

6. 北京日本学研究中心と共同で行っている日本語学習者の日本語習得過程に関するデータ収集を継続し、4年次のデータを収集した。2019年度で対象学習者の大学入学次から4年次までのデータ収集を終え、データ収集は完了した。
7. 日本語学習者の読解において、国際交流基金日本語国際センターと共同研究を推進し、その成果を、石黒圭編『日本語教師のための実践・読解指導』（くろしお出版）に収録した。
8. 2018年度に引き続き、「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」プロジェクトおよび科研課題番号18H03575（準均衡超大規模日本語コーパスと高速検索ツールの開発）と連携し、日本語文型バンクの開発・補充、公開を続行し、初・中級の文型の意味解説の執筆、レベル分けの作業を行った。また、中・上級の文型（約300件）について見出し執筆作業を続行し、内部公開を行った。さらに、関連する特別講演を2019年10月31日に中国人民大学で、2019年11月1日に連携先の北京外国語大学北京日本学研究中心でそれぞれ開催した。（参加者数：12名，22名）

「計画を大きく上回って実施した」と自己評価した理由

全体として予定よりも多くのデータをアップロードすることができ、とくに、多言語を母語とする日本語学習者コーパス（I-JAS）と日本語学習者の文章理解過程データベースは、予定よりも早く、2019年度末までにすべてのデータの公開を完了したため。

3. 教育に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
(1) 大学院等への教育協力に関する計画	
1. 英国から特別共同利用研究員1名を受け入れた。	
(2) 人材育成に関する計画	
2. プロジェクトPDフェローを2名雇用し、日本語教育に関する研究指導を行うことにより、日本語教育分野の人材を育成した。	
3. 博士課程に在籍する大学院生14名を共同研究員としてプロジェクトに参画させ、コーパスの構築・分析作業を通して研究の指導を行った。	
4. 言語社会心理学研究会（SPLaD）第5回・第6回定例研究会（プロジェクトと共催）を2019.4.20と2019.6.15に開催し、母語話者と学習者の自然会話コーパスに関する情報提供を行うとともに、大学を超えて、大学院生や若手研究者に発表の機会を提供した。（参加者数5名，4名）	
5. NINJALチュートリアルを次の通り担当した。	
<ul style="list-style-type: none"> ・台湾の東呉大学で2日間にわたり開催されたNINJALチュートリアル（海外）において、2日目の2019年11月10日「日本語の自然会話とディスコース・ポライトネス理論」というタイトルで講義を担当した。（参加者数：50名） ・NINJALチュートリアル（国内）を、2020年3月17日に久留米大学福岡サテライトにおいて「日本語の自然会話とポライトネス理論」というタイトルで講義を担当予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止となった。 	

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

自己点検評価	計画を上回って実施した
(1) 産業界や地域社会との連携に関する計画	

1. ビジネス日本語のプロジェクトを、日本テレワーク学会 Job Casting 部会、(株)富士通研究所、(株)クラウドワークスとの協力で遂行し、次の成果を上げた。
 - ・石黒圭編『クラウドソーシングを用いたビジネス文書の言語学的研究—インターネット上の求人サイトから臨むビジネス日本語研究の新たな地平—』（ひつじ書房）を2020年1月に刊行した
 - ・公開シンポジウム「ビジネスと日本語の接点」を2020年3月20日に会場を変更してWeb開催した。（参加者数：82名）
2. NTT(2名)、NTTドコモ(1名)の研究者3名とともに、2019年度日本語教育学会秋季大会にて、「対話システム構築と談話研究・日本語教育の接点」と題したパネルセッションを行った。

(2) 研究成果の社会への普及に関する計画

3. 日本語教師等を対象とする「国立国語研究所日本語教師セミナー」を国内で1回、海外で2回開催した。その他、日本語教師を対象とした講演会を行った。
 - ・海外の「国立国語研究所日本語教師セミナー」は、ウズベキスタンのサマルカンドにあるサマルカンド国立外国語大学で2019年9月17・18日に、また、ウズベキスタンのタシュケントにあるウズベキスタン・日本センターで2019年9月21・22日に、それぞれ「世界諸言語からみた日本語」というタイトルで行った。（参加者数：サマルカンド57名、タシュケント33名）
 - ・国内の「国立国語研究所日本語教師セミナー」は、「顕在化する多言語社会日本と日本語教育」というタイトルで2020年2月15日に国文学研究資料館で行った。（参加者数：64名）
 - ・国際基督教大学グローバル言語教育研究センターとの共催で2019年7月6日に国際基督教大学で講演会・ワークショップ「日本語非母語話者の読解コーパスからわかること」を行い、講演会に74名、ワークショップに43名）が参加した。
4. 地域のボランティア対象の講座で、次のような研修を行った。
 - ・福岡県国際交流センターとの共催で2019年10月19日～21日に北九州市・福岡市・久留米市で福岡県地域日本語教室ボランティアスキルアップ講座を行い、105名が参加した。
 - ・仙台観光国際協会との共催で2019年11月30日に仙台市で日本語ボランティア研修会を行い、61名が参加した。
5. 一般の方に日本語教育や日本語学習者のことを広く知ってもらうことを目的とした講演会として、第14回NINJALフォーラム「私の日本語の学び方」を2019年11月30日に一橋大学一橋講堂で開催した（参加者数：274名）。

5. グローバル化に関する計画

自己点検評価

計画を上回って実施した

(1) 国際的協業に関する計画

1. 海外在住の研究者30名を共同研究者として加え、日本語学習者のコミュニケーションに関する研究を実施した。
2. 連携協定を結んでいる北京日本学研究中心と共同で、日本語学習者の日本語習得過程に関する大学卒業までの縦断データ収集を完了した。（「2. 共同利用・共同研究に関する計画」の「(2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画」の1.を参照）
3. 「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」プロジェクトの報告書に日本語学講習会として記載済みのため、こちらでは記載を割愛した。
4. 日本語教育学関連の著名な研究者6名（国内3名、中国、インド、ヨーロッパ各1名）からなるアドバ

イザリーボードのメンバーを確定してメーリングリストを作成し、運用を開始した。

(2) 国際的発信に関する計画

5. シンガポール日本語教師の会との共催で2019年12月2日にシンガポール国立大学で公開セミナー「コミュニケーションのための日本語教育に必要な文法を見直す」を行い、49名が参加した。
6. 連携協定を結んでいる北京日本学研究中心と共催でシンポジウムを3件開催した。
 - ①国際シンポジウム「日本語学習者向けコーパスの構築と応用研究」を、2019年10月19日に連携先の北京外国語大学北京日本学研究中心で同センターと共催した。(参加者数：151名)
 - ②国際シンポジウム「北京日本語学習者縦断コーパス(B-JAS)の構築と応用研究」を、2019年10月20日に調査協力協定を結んでいる北京師範大学外国語文学学院で同学院と共催した。(参加者数：99名)
 - ③2020年1月18日に公開シンポジウム「コミュニケーションのための日本語学習辞書を求めて—中国人学習者のための新しい辞書の構想と開発—」を開催した。(参加者数：55名)

6. その他

該当する活動なし。

令和元年度の評価

《評価結果》

計画を上回って実施している

本プロジェクトの目的は、日本語学習者のコミュニケーションを多角的に解明するとともに、その成果を日本語教育に応用する方法を明らかにすることであり、3つのサブプロジェクトすなわち、①「日本語学習者の日本語使用の解明」、②「日本語学習者の日本語理解の解明」、③「日本語学習のためのリソース開発」で構成されている。2019年度は上記プロジェクトの4年目に当たる。

自己評価については、「研究」および「共同利用・共同研究」は「S」、その他については「A」と評価されており、以下に見るようにいずれの項目においても相応の成果をあげており、総合的に見て「A評価」が妥当であると考えられる。新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて中止や延期になったシンポジウムなどが若干数あるが、「研究」および「共同利用・共同研究」については質的にも量的にも十二分な成果がみられ、また、「教育」「社会連携・社会貢献」「グローバル化」についても十分な成果をあげたと考えられる。

《評価項目》

1. 研究について

(1) 研究水準及び研究の成果に関しては3冊の論集の刊行が計画されていたが、日本語使用班で3冊、日本語理解班で4冊、リソース開発班で1冊、計8冊の論集を刊行し、計画を大きく上回る十二分な成果をあげており、うち日本語理解班の1冊については、*Journal of Japanese Linguistics* に掲載された書評において高い評価を得ていることも特筆できる。リソース開発班で計画されていた講演・研修会が、論文集を先行して刊行することに集中したため開催されなかったことは十分理解できるが、今後は講演・研修会などを通じた発信にも期待したい。(2) 研究実施体制等に関しては、研究体制の組織化及び大学等との連携について2項目が計画されていたが、いずれにおいても計画を上回る規模の人員を組織化しており十分な成果をあげている。以上、研究については、総じて計画を大きく上回る十二分な成果を挙げている。

2. 共同利用・共同研究について

(1) 共同利用・共同研究に関しては、各種コーパスの構築を継続し、コーパスデータの追加・公開、またコーパス活用のための講習会の開催など、また、ウェブ版教材の開発・公開、オンラインハンドブックの拡充・公開も計画されていた。コーパスデータの追加件数は計画を大きく上回り、I-JAS、読解コーパスは全データの公開を終えて完成しており、オンライン日本語基本動詞ハンドブックの作成継続の過程でコンテンツの追加・差し替えなど、コンテンツ内容の更新・拡充を行っている。新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて、関連するシンポジウムやワークショップが一部中止されたが、総じて十二分な成果をあげている。(2) 実施体制等に関しては、北京日本学研究中心および国際交流基金日本語国際センター、また「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」プロジェクトなどとの連携協力のもとでのデータ収集を完了させ、また共同研究成果を出版し、日本語文型バンクの拡充を図りその成果を連携機関等で公開しており、連携強化に充分充実した成果をあげている。以上、共同利用・共同研究については、総じて計画を大きく上回る十二分な成果を挙げている。

3. 教育について

(1) 大学院等への教育協力に関しては、研究所としての評価方法の変更に伴って特に計画はなかったが、プロジェクトとして1件の特別共同利用研究員の受け入れを行っている。(2) 人材育成に関しては4件の計画があった。新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて国内で計画されていたNINJAL チュートリアルが中止となったが、PD フェローの雇用については計画通り、大学院生については計画の3.5倍の人員の指導を行い、海外でのNINJAL チュートリアルは参加者50名を得て実施するなど、計画を上回る人員の指導・育成を行っている。教育については、総じて計画を上回る十分な成果を挙げている。

4. 社会との連携及び社会貢献について

(1) 産業界・地域社会との連携に関しては、ビジネス日本語に関する研究を、計画されていた日本テレワーク学会 Job Casting 部会に加えて(株)富士通研究所および(株)クラウドワークスとも連携して進め、成果を論集として刊行し、82名の参加者を得て公開シンポジウムを開催している。また、NTT およびNTT ドコモの研究者3名と共に日本語教育学会秋季大会でパネル発表を行い、産業界・地域社会との連携の成果を公表している。(2) 研究成果の社会への普及に関しては、日本語教師を対象としたセミナーを海外で2回、国内で1回開催し、加えて国内でワークショップ・講演会を開催している。また、地域日本語教室のボランティアを対象としたスキルアップ講座や研修会を開催するとともに、日本語教育や日本語学習者についての社会的理解を深めることを目的としたNINJAL フォーラムを開催し274名の参加者を得ている。以上、産業界・地域社会との連携については、総じて計画を上回る十分な成果を挙げている。付言すれば、地域日本語教育に関しては、文化庁国語課が展開している地域日本語教育の普及事業やコンテンツ開発事業についても目配りが欲しい。

5. グローバル化について

(1) 国際的協業に関しては3項目、(2) 国際的発信に関しては2項目が計画されていたが、計画以上の事業を実施しており、十分な成果をあげている。国際的協業については、海外在住の研究者30名を共同研究員として加え、また日本語教育関連の研究者6名(国内3名、中国、インド、ヨーロッパ各1名)によるアドバイザーグループを確定し運用を開始している。また、連携協定締結

先との協力で継続してきたデータ収集を完成させている。国際的発信については、シンガポール日本語教師会との共催で、また北京日本学研究中心との共催で3件のシンポジウムを開催し、十分な発信の成果を挙げている。以上、グローバル化については、総じて計画を上回る十分な成果を挙げている。付言すれば、海外の日本語教育・日本語教師研修・日本語教育研究などについては、国際交流基金が豊富な知見・情報を有しているため、今後の連携のあり方について工夫が欲しい。

6. その他特記事項

特になし。

コーパス開発センター
センター長：前川 喜久雄

I. 令和元年度活動概要

令和元年度予算総額 55,532 千円

令和元年度 成果の概要

1. 研究に関する計画

コーパス開発センター専任職員・研究員で、ジャーナル論文 10 本（解説論文 1 本，紀要論文 2 本含む），国際会議発表 16 件（うち 9 件が査読付き論文あり）。「言語資源活用ワークショップ」を 9 月に開催。Academia Sinica とともに国際会議 LPSS 2019 を 11 月に共催。

形態素解析用辞書 UniDic，係り受けツリーバンク Universal Dependencies，シソーラス分類語彙表を中心にした共同研究を展開。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

「少納言」「中納言」「梵天」および包括的検索系「KOTONOHA」の開発維持管理を実施。

「中納言」に新たに『昭和話し言葉コーパス』を搭載。

「中納言」上の『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に話者情報を新たに追加。

3. 教育に関する計画

検索系の講習会を 3 回実施。教員免許状更新講習に協力。情報処理学会セミナーに登壇。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』と『日本語話し言葉コーパス』の頒布を進める。

2019 年 10 月に形態素解析用辞書 UniDic-3.0 を公開。日本語語彙の分散表現データを配布。

5. グローバル化に関する計画

台湾 Academia Sinica と国際的協業を推進。

国際的な係り受けツリーバンク構築プロジェクト Universal Dependencies に参画。

6. その他

高エネ研機構間連携プロジェクトに参画。

II. 項目ごとの状況

1. 研究に関する計画

自己点検評価

計画を上回って実施した

(1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画

コーパス開発センター専任職員・研究員で、ジャーナル論文 10 本（解説論文 1 本，紀要論文 2 本含む），国際会議発表 16 件（うち 9 件が査読付き論文あり）。

NLP2020 言語資源賞を受賞（言語処理学会・言語資源協会）

「言語資源活用ワークショップ 2019」を 9/2-9/4 に開催（参加者数 異なり 165 人（内 国外機関所属者 4

人/学生 45 人), 3 日間 延べ 315 人)。発表件数 50 件 (内 招待講演 6 件, 国外機関所属者 2 件, 学生発表 13 件, ポスター発表 33 件)。同ワークショップ内で Universal Dependencies のテーマセッションを設定。

台湾中央研究院語言学研究所と「The 3rd International Symposium on Linguistic Patterns in Spontaneous Speech (LPSS 2019)」を台北にて共催 (参加者数 異なり 109 人 (内 国外機関所属者 92 人/学生・ポストク 25 人))。発表件数 26 件。

言語処理学会第 26 回年次大会 (2020 年 3 月 新型コロナウイルス感染拡大防止のためオンライン開催) に, ゴールドスポンサーとして支援。

(2) 研究実施体制等に関する計画

東京大学・京都大学・九州大学・奈良先端科学技術大学院大学・日本 IBM・NTT CS 研・Megagon Lab (2019 年度より参画) と Universal Dependencies に関する研究を進めた。

茨城大学・常葉大学とともに分類語彙表関連の研究を進めた。

京都大学とともに音声アラインメントに関する研究を進めた。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
--------	-------------

(1) 共同利用・共同研究に関する計画

1. 「少納言」「中納言」「梵天」に格納されている『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)を用いた研究業績累計 1181 件 (内 2019 年以降成果物 209 件), 「中納言」に格納されている『日本語話し言葉コーパス』(CSJ)を用いた研究業績累計 1,237 件 (内 2019 年以降成果物 106 件)。
包括的検索系の累計利用セッション 14,357 件 (2020/03/31 現在)。

2. 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)累計有償契約数 443 件 (内 2019 年度契約 35 件), 『日本語話し言葉コーパス』(CSJ)累計有償契約 947 件 (内 2019 年度契約 42 件) (2020/03/31 現在)。
包括的検索系に『日本語話し言葉コーパス』(CSJ), 『日本語日常会話コーパス』(CEJC), 『日本語諸方言コーパス』(COJADS)の音声配信機能を設定済み。
「中納言」に新たに『昭和話し言葉コーパス』を搭載。
「中納言」上の『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に話者情報を追加。

(2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画

3. 「梵天」の講習会を 10/18 に東京女子大で実施(41 人参加)。
2020 年 1-3 月に包括的検索系講習会を 2 回予定。新型コロナウイルス対応の影響で中止。
代わりに授業用アカウント説明会を 3/27, 3/31 にオンラインで実施(13 人, 17 人参加)。
授業用アカウントを累計 64 授業 (2019 年度 48 授業) に発行

3. 教育に関する計画

自己点検評価	計画をどおり実施した
--------	------------

(1) 大学院等への教育協力に関する計画

(2) 人材育成に関する計画

1. 2020 年 1-3 月に包括的検索系講習会を 2 回予定。

2. 「梵天」の講習会を 10/18 に東京女子大で実施(41 人参加)。
3. 講義用アカウントを累計 64 授業 (2019 年度 48 授業) に発行
4. 【項番 2. (2) 再掲】。
5. プロジェクト予算でプロジェクト非常勤研究員を 5 名雇用 (内, 大学院在学中 1 名)。2020 年度より 1 名常勤職に採用が決まる。
6. 言語資源活用ワークショップ 2019 において優秀発表賞を 1 名に授与。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

自己点検評価	計画どおり実施した
<p>(1) 産業界や地域社会との連携に関する計画</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 東京大学・京都大学・九州大学・奈良先端科学技術大学院大学・日本 IBM・NTT CS 研・Megagon Lab (2019 年度より参画) と Universal Dependencies に関する研究を進めた【項番 1. (2) 再掲】。 2. 株式会社ワークスアプリケーションズと Sudachi 分散表現ベクトルのコンパクト化に関する研究を進めた。 <p>(2) 研究成果の社会への普及に関する計画</p> <ol style="list-style-type: none"> 3. UniDic-3.0 を 2019 年 10 月に公開。 4. 2019 年度の UniDic の総ダウンロード数 2854 件 (内, 現代語 UniDic 2229 件) 5. 分類語彙表に対して単語親密度情報(WLSP-familiarity) ・反対語情報(WLSP-antonym) を追加した。また『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に対する分類語彙表番号アノテーション(BCCWJ-WLSP) を付与。 6. UniDic や分類語彙表を閲覧するシステム Cradle を開発・公開 7. コーパス頒布のための契約書発行システムの整備を進める。2020 年度より包括契約(利用者数制限なし, 成果物数制限なし) の枠組を契約書発行システム上に設定。 8. 日本語語彙の分散表現データ NWJC2vec を累計 147 の企業・大学研究室・個人に配布(2020/03/31 現在)。 9. Megagon Lab. より共同研究の成果物として, 日本語の自然言語処理ライブラリ「GiNZA」を公開。 10. 6/26 に情報処理学会 連続セミナー 2019 「AI と歩む未来(1): 自然言語処理の最新動向」に浅原が講師として登壇【項番 3. (2) 再掲】 筑波大学の国語科教員免状更新講習選択講習 C「コーパスで見る日本語の姿」(7/6 実施) に協力。【項番 3. (2) 再掲】 	

5. その他の目標を達成するための措置

自己点検評価	計画どおりに実施した
<p>(1) 国際的協業に関する計画</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Academia Sinica と共同研究を進めた: 2. 2019 年 4 月 19 日に, 中央研究院語言学研究所で開催される Second ILAS Annual Linguistics Forum にて基調講演をおこなった。 3. 台湾の中央研究院語言学研究所と共催で 2019 年 11 月 21-22 日に台北で自発音声に関する国際ワークショップ LPSS2019 を企画運営した【項番 1. (1) 再掲】。 4. 台湾国立交通大学での招待講演 2019 年 11 月 25 日 	

5. “Reconstruction of Articulatory Phonetics by Means of the
6. Real-time MRI Data”, 2019年11月26日 “Development of Spoken Language Resources in NINJAL”
7. 国際的な係り受けツリーバンク構築プロジェクト Universal Dependencies に参画した。

(2) 国際的発信に関する計画

8. コーパス開発センター専任職員・研究員で2件の国際会議発表を行った【項番1.(1)再掲】。
9. 第11回国際計量言語学会 IQLA (2020年開催 於国語研)受け入れの準備を行った。

6. その他

所内のコーパス開発プロジェクト支援のために、研究図書室と共同で所内全体で利用可能な「小学館ジャパンナレッジlib」を10ライセンス購入した。

所内のコーパス開発プロジェクト支援のために、形態論情報データベースの保守管理を行った。今年度はハードウェアの更新を実施。

令和元年度の評価

《評価結果》

計画を上回って実施している

(総括)

研究面ではジャーナル論文発表、国際会議発表を多数行い、学会優秀論文賞受賞など高い研究成果をあげている。また、形態素、係り受け、意味、音声アラインメントの各分野において、大学、公的研究機関、企業との連携体制の下で言語資源の整備を着実に進めている。機械学習を利用した自然言語処理のための基礎的データの作成と配布は優れた取り組みである。また、コーパス普及を目的とした検索ツールの公開・維持管理、教材作成、講習会実施を積極的に進めている。国外の研究機関との共催による国際研究集会の企画運営など国際会議への関与も積極的であり、国語研のプレゼンス向上に貢献している。コーパス開発研究センターの活動は計画を上回って実施していると判断される。

《各項目別》

1. 研究について

言語処理・音声処理・言語資源構築技術に関する研究成果について、自然言語処理、認知科学をはじめとする学術雑誌に学術論文10件、InterSpeech、ICPhSをはじめとする国際会議発表16件を行なっている。また、言語資源活用ワークショップ2019を国語研で主催、The 3rd International Symposium on Linguistic Patterns in Spontaneous Speech (LPSS 2019)を台湾中央研究院語言学研究所と共催で台北で開催など、国際的な研究集会を企画・開催して研究成果の発表と行うとともに、関連研究者の研究交流の場を提供している。これらのことから研究に関しては計画を上回る成果を上げており、学術的意義が高いと判断される。

また、東京大学・京都大学をはじめとする複数の大学、さらには日本IBM・NTT CS研などの民間企業研究所との共同研究も進行しており、他大学と組織的に連携し、大学の機能強化に貢献していると判断される。今後はそれらの共同研究が一掃の研究成果を生み出すことを期待する。

2. 共同利用・共同研究について

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ), 『日本語話し言葉コーパス』(CSJ)はいずれも現代日本語の標準的な言語コーパスとして定着しており, コーパス言語学の発展に大きく寄与している。両コーパスとも有償契約数が順調に増加しており, コーパスの利用拡大が認められる。また「少納言」「中納言」「梵天」などの検索系の利用も累計 14,000 件以上にのぼり, それを通じた研究業績も数多く出ている。コーパスデータの構築・公開を通じた共同利用・共同研究について計画を上回る成果を上げていると判断される。

3. 教育について

プロジェクト非常勤研究員として大学院生を含む 5 名を雇用して研究活動に参加させて, 研究者としての育成を図っている。また国立国語研究所で開発された検索システム「中納言」「梵天」を大学講義で利用するためのアカウント配布, および利用講習会の開催, 若手向け優秀賞の設定などの活用を通じて, コーパス言語学研究者の育成・奨励を図っているなど, 人材育成に関して計画通り成果をあげている。

4. 社会との連携及び社会貢献について

東京大学・京都大学をはじめとする複数の大学, さらには日本 IBM・NTT CS 研などの民間企業研究所との共同で着実に継続して自然言語処理研究を進めている。また日本語語彙の分散表現 NWJC2vec の開発および企業・大学研究室・個人への配布は, 近年重要度の増している機械学習自然言語処理分野での基本データ貢献として高く評価される。今後もさらに一掃の貢献を期待する。形態素解析用辞書 UniDic, 分類語彙表関連データおよび閲覧システムの整備と配布は着実に推進されている。社会連携・社会貢献に関しては計画を上まわって進行していると判断される。

5. グローバル化について

Academia Sinica と共同研究, 台湾中央研究院語言学研究所との共催による国際ワークショップ LPSS2019 の企画開催, 国際的係り受けツリーバンク構築プロジェクト Universal Dependencies への参画など国際連携は着実に進められている。

6. その他特記事項

特になし。

研究情報発信センター
センター長：石黒 圭

I. 令和元年度活動概要

令和元年度予算総額 37,200 千円

令和元年度 成果の概要

1. 研究に関する計画

本センターは、大学共同利用機関として共同利用に供するため、各種研究情報、研究資料及び研究成果の収集・整理・管理・維持を行い、広く社会に発信することで、研究の向上に寄与することを目的とするため、主に所蔵資料とそのデータベース構築・公開に関して、学会で研究発表を行うことに努めた。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

「国立国語研究所学術情報リポジトリ」「日本語研究・日本語教育文献データベース」「研究資料室収蔵資料データベース」など、所管するデータベース類の開発・公開を推進した。収蔵資料の共同利用体制を整備し、2019年度共同利用型研究（公募型）の採択課題（全12件中10件が研究資料室収蔵資料の活用研究）に対して提供した。日本語学会機関誌『日本語の研究』展望論文執筆者に対して、文献DBデータの先行公開を実施した。また、京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究センター主催「東洋学へのコンピュータ利用第31回研究セミナー」に共催し、共同利用・共同研究拠点との連携活動を行った。『人間文化研究機構の情報関連事業第三期後半における基本方針』に基づく高度連携システムのデータ構築計画の募集」に、代表機関：国文研、連携機関：国語研で応募して採択された。

3. 教育に関する計画

研究発信業務強化のため、プロジェクト非常勤研究員2名を雇用し、その育成に努めた。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

『国立国語研究所論集』を2回、オンラインと冊子体の両形態で発行するとともに、円滑な発行を維持できるよう、2018年度に引き続き編集体制の見直しを行った。

5. グローバル化に関する計画

日本語学的・言語学的にパイオニア的価値を持ち、その評価がほぼ確立した日本語論文を英訳し、オープンアクセスで公開した（Pioneering Linguistic Works in Japan）。

6. その他

該当する活動なし。

II. 項目ごとの状況

1. 研究に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
(1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画	
1. 所蔵資料とそのデータベース構築・公開について、学会で研究発表を9件、論文公表を1件行った。	

(2) 研究実施体制等に関する計画

2. 共同利用・共同研究に関する計画

自己点検評価 | 計画を上回って実施した

(1) 共同利用・共同研究に関する計画

1. 「国立国語研究所学術情報リポジトリ」について、PDF・メタデータの作成整備、登録、DOI付与を継続実施した（追加 582 件）。総件数は 2,103 件に達し、遡及分については、著作権および個人情報保護に関して対応が必要なものを除き、ほぼ全てを登録した。新規分および既 Web 公開の PDF については、リポジトリでの公開を呼びかけ DOI 登録によりアクセシビリティを高めた。また、本年度のオープンアクセス方針施行に伴い、案内・登録申請を呼びかけ、個人著作物の登録を推進した。
2. 「日本語研究・日本語教育文献データベース」(Web) に新規データを 3,432 件追加した。大学学術機関リポジトリ及び学会誌掲載論文の本文 PDF へのリンク約 2 万 9 千件についてリンク情報の付与・点検を継続した。『国語年鑑』1990～1993 年版の図書データを追加した。また、1957～1993 年版の論文集データを追加し、『国語年鑑』遡及分登録作業を完了した。Web ページをスマートフォン・タブレット端末にも対応したレスポンシブデザインに変更した。この改修によりアクセス数が倍増した（2019 年 1 月期と 2020 年 1 月期の比較による）。海外関係文献は、洋雑誌・韓国学会誌掲載論文の登録を継続するとともに、台湾の主要学会誌・主要大学紀要掲載論文の採録に着手した。
3. 「外来語に関する意識調査Ⅱ（全国調査）」及び「行政情報を分かりやすく伝える言葉遣いの工夫に関する意識調査（自治体調査）」の回答データセットを公開した（2019 年 12 月）。また、「鶴岡調査データベース ver. 3.0」において、2011 年調査（第 4 回）の回答データの追加を行い、公開した（2019 年 11 月）。
4. 研究資料室収蔵資料の利活用促進のため、研究資料室収蔵資料の各目録の整備を進め、「研究資料室収蔵資料データベース」に、「保存箱目録」と「音声・映像ファイル目録」を追加公開した（2019 年 10 月）。また、「中央資料庫地形図地勢図リスト」を公開した（2019 年 12 月）。「資料群一覧」には、2019 年度中に資料群 6 点（fo0247～fo0252）を追加公開した。
5. 研究資料室収蔵の音源・映像資料について、2,129 点の媒体変換（デジタル化）を進めた（カセットテープ 1,000 点、DAT テープ 501 点、ミニディスク 2 点、オープンリール録音 1 点、VHS テープ 532 点、β テープ 17 点、8 ミリビデオテープ 3 点、デジタルビデオ 73 点）。また、所内専用試視聴システム「音声・映像データベース」に上記のデジタル化資料を増補収録した（音声 3,237 点、映像 680 点）。
6. 第 2 期中期計画中に実施した共同研究プロジェクトの特設サイトのアーカイブサイトを作成した。

(2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画

7. 2019 年度共同利用型研究（公募型）の採択課題（全 12 件中 10 件が研究資料室収蔵資料の活用研究）に対して研究資料を提供し、共同利用に基づく共同研究体制を強化した。
8. 京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究中心主催の「東洋学へのコンピュータ利用第 31 回研究セミナー」に共催し、共同利用・共同研究拠点との連携活動を行った（参加者数 41 名）。
9. 『人間文化研究機構の情報関連事業第三期後半における基本方針』に基づく高度連携システムのデータ構築計画の募集に、代表機関：国文研、連携機関：国語研で応募し、採択された。（日本文学および日本語研究分野を包括する研究論文の分類語彙集構築）
10. 日本語学会機関誌『日本語の研究』展望論文執筆者に対して、文献 DB データの先行公開を実施した。

3. 教育に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した。
(1) 大学院等への教育協力に関する計画	
(2) 人材育成に関する計画	
1. 社会調査のデータセット等の整備・公開のため、プロジェクト非常勤研究員を1名新たに雇用した。また、「日本語研究・日本語教育文献データベース」の登録範囲拡張のため、プロジェクト非常勤研究員1名の雇用を継続し、その育成に務めた。	

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

自己点検評価	計画どおりに実施した
(1) 産業界や地域社会との連携に関する計画	
(2) 研究成果の社会への普及に関する計画	
1. 『国立国語研究所論集』第17号(2019年7月)と第18号(2020年1月)をオンラインと冊子体の両形態で発行した。また、担当委員制を導入し、編集体制を強化するとともに、外注内容を見直し編集校正作業を効率化した。	

5. その他の目標を達成するための措置

自己点検評価	計画を上回って実施した
(1) 国際的協業に関する計画	
(2) 国際的発信に関する計画	
1. 日本語学的・言語学的にパイオニア的価値を持ち、その評価がほぼ確立した日本語論文を英訳し、オープンアクセスで公開した(2019年11月, Pioneering Linguistic Works in Japan)。	

6. その他

1. ネットワーク・サーバ運用保守業務及びサポートデスク業務は、2019年度から情報基盤室に移管された。

令和元年度の評価

《評価結果》

計画どおりに実施している

(総括)

センター主管の研究としては特筆すべき成果は見当たらないが、学術情報リポジトリ、文献データベース、社会調査データセットなど各種データベースの整備・新規データ追加・オープンアクセス化、また研究資料室収蔵の音源・映像データのデジタル化などを通じて大学・研究機関の共同利用・共同研究に資するデータ公開が着実に進められており、研究プロジェクトは計画どおりに実施していると判断できる。今後は研究データ公開・発信に加えて利用度・成果把握を行い、研究情報発信方針策定に活用することを期待する。

《各項目別》

1. 研究について

研究所所蔵資料とそのデータベース構築・公開に関連して、計量国語学に学术论文1件、日本語学会、人間文化研究情報資源共有化研究会等での研究集会で発表9件を行なっている。それらは調査、資料収集、データベース構築の紹介・解説が中心であり、研究成果の質としてはやや物足りない。

2. 共同利用・共同研究について

所管するさまざまなデータベースコンテンツに関して、学術情報リポジトリのデータ整備・登録、オープンアクセスの推進、日本語研究・日本語教育文献データベース、国語年鑑、海外関係文献の収集追加、外来語意識調査、鶴岡調査データなどの社会調査データセットの公開、研究資料室収蔵の音源・映像資料のデジタル化などを通じてデータの整備・登録追加・アクセス向上が継続して積極的に進められている。また、京都大学人文科学研究所と共催で東洋学へのコンピュータ利用研究セミナー開催、人間文化研究機構の高度連携システムのデータ構築計画の募集に採択、共同利用型研究への研究資料提供など、共同利用・共同研究の実施体制整備が着実に進められている。共同利用・共同研究に関しては計画を上回って実施されていると判断される。今後は公開・提供された研究所所管の各種データ・資料を利用した研究成果について、外部も含めた全体的な活用について把握されることを期待する。

3. 教育について

非常勤研究員2名を雇用し、データの公開および拡充に当たるとともに育成を行っている。

4. 社会との連携及び社会貢献について

国立国語研究所論集の発行を継続して行なっている。

5. グローバル化について

日本語学・言語学分野で評価が確立した日本語論文を英訳し、Pioneering Linguistic Works in Japanとしてオープンアクセスで公開している。

6. その他特記事項

特になし。

令和元年度「管理業務」に関する評価シート

業務運営の改善及び効率化に関する目標を達成するために取るべき措置

1. 組織運営の改善に関する目標を達成するための措置

【計画】

外部有識者の参加を得て、運営会議及び各種委員会を開催するとともに、機関の組織運営に研究者コミュニティ等の意見を積極的に取り入れる。

【実績】

- ・運営会議において、外部委員から研究所の研究活動について意見等をいただき、以下のとおり見直しを図った。
- ・機関の長に係る任期及び教授称号等の取扱いについて審議した。
- ・次期所長の選考方法、選考スケジュールについて審議した。
- ・総合研究大学院大学への参入について意見交換を実施した。
- ・研究所のロゴマークについて、広報活動面から知的財産保護のため商標登録申請を実施した。

2. 教育研究組織の見直しに関する目標を達成するための措置

【計画】

機関拠点型基幹研究プロジェクトの共同研究プロジェクトを研究系とセンターにより推進し、国際学術機関等の連携及び国際協力の推進を国際連携室において図る。また、研究事業の進捗状況に関する情報を IR 推進室において管理する。

【実績】

- ・毎月開催している共同研究プロジェクト推進会議において基幹研究プロジェクトの進捗状況などを確認するとともに、コーパス開発センターでは、研究系と協力して「言語資源活用ワークショップ 2019」を開催し、各種言語資源関連プロジェクトの成果を公開形式で報告するとともに、言語資源活用の先進的な事例を紹介して知識を共有した。研究情報発信センターでは、学術研究及び教育活動の成果を「国立国語研究所学術情報リポジトリ」としてウェブで公開（公開件数 582 件）し、研究所の学術研究・教育活動の発展（アクセス数 79,592 件、ダウンロード数 174,577 件）に貢献した。
- ・国際発信力を高めるために、2 件の国際連携協定を締結し、共同研究を開始した。また、国際連携室が主導して、台湾の東呉大学においてチュートリアル授業「日本の言語の多様性 / 日本語の自然会話とディスコース・ポライトネス理論」を実施し、日本語学・言語学・日本語教育研究の諸分野における最新の研究成果や研究方法を若手研究者等に教授した。
- ・IR 推進室においては研究成果に関するデータを収集・管理するとともに、将来計画委員会及び自己点検・評価委員会等に情報を提供した。また、研究成果の分析指標のうち、社会への貢献をはかる指標の策定を目指し、IR シンポジウム「社会に魅せる研究力を測る－論文では見えてこない社会に貢献する研究を評価する指標－」を開催した。

3. 事務等の効率化・合理化に関する目標を達成するための措置

【計画】

機構内機関及び機構外機関との業務の共同実施

【実績】

- ・コピー用紙の調達について、機構内 3 機関（本部・国文研・国語研）と 2 機構 6 機関の計 9 機関で共同調達を実施した。

- ・自動販売機の設置・運営の業務委託を2機構4機関（国文研，国語研，統数研，極地研）共同で実施し，令和2年4月から運用することとなった。
- ・西東京地区国立大学法人等共同開催の職員研修1件に職員を参加させた。①令和元年度西東京地区国立大学法人等共同開催職員研修【同一労働同一賃金】（R1.10.18開催，参加者2名）
- ・関東甲信越地区国立大学法人等主催の職員研修2件に職員を参加させた。①第54回関東・甲信越地区国立大学法人等会計事務研修（R1.10.23，参加者1名）②2019年度東京地区及び関東甲信越地区国立大学法人等係長研修（R1.10.30，参加者1名）
- ・人間文化研究機構本部主催による研修2件に職員を参加させた。①令和元年度人間文化研究機構事務系職員の人事評定者研修（R1.10.30開催，参加者3名）②令和元年度ハラスメント相談員研修（R1.11.7開催 参加者6名）

自己点検評価

計画どおり実施した

《評価結果》

計画どおりに実施している

- 1（組織運営の改善に関する目標を達成するための措置）については，計画通り，外部委員からの意見聴取を行い，それを生かしていくつかの問題の審議・検討を行った。
- 2（教育研究組織の見直しに関する目標を達成するための措置）についても，計画通り行われている。共同研究プロジェクト推進会議を毎月開き，基幹研究プロジェクトとコーパス開発センターが協力してさまざまな活動を行った。2件の国際連携協定を締結し，台湾の東呉大学でチュートリアル授業を行うなど，積極的に国際発信を行った。IR推進室は適切に研究成果のデータを収集・管理し，将来計画委員会及び自己点検・評価委員会等に情報を提供し，IRシンポジウム「社会に魅せる研究力を測る－論文では見えてこない社会に貢献する研究を評価する指標－」を開催し，社会への貢献をはかった。
- 3（事務等の効率化・合理化に関する目標を達成するための措置）についても，計画通り，機構内機関及び機構外機関との業務の共同実施が適切に実行された。

財務内容の改善に関する目標を達成するためにとるべき措置

1. 外部研究資金，寄付金その他の自己収入の増加に関する目標を達成するための措置

【計画】

常勤研究者の科研費への研究代表者もしくは研究分担者としての参加率を毎年度80%以上にするため，競争的資金の申請に向けた説明会や研究計画書の作成支援等を実施する。

【実績】

- ・令和元年度に配分された科研費（新規及び継続課題）に研究代表者又は研究分担者として，常勤研究者33名のうち32名が参加した（参加率97%）。
- ・近隣の研究機関と合同で科研費説明会（9月27日）を開催した。
- ・外部資金についての公募情報を所内グループウェアに掲載するとともに，全研究者宛てに電子メールで周知した。特に，科研費については，常勤・非常勤を問わず全研究者を参加対象とした科研費申請準備会議を開催（10月3，4日）し，申請者が他分野を含む採択経験豊富な研究者と研究計画・方法について意見交換を行い，若手研究者の育成にも配慮しつつ申請書作成指導等科研費申請を奨励・支援した。（令和2年度分申請28件）
- ・『日本語話し言葉コーパス』『現代日本語書き言葉均衡コーパス』及び『日本語日常会話コーパス（モ

ニター版』の有償頒布を行い、総額 28,020 千円（前年度比約 300%）となる収入を得た。

2. 経費の抑制に関する目標を達成するための措置

【計画】

- (1) 一般管理費の分析を行い、分析結果を基に教職員に対しコスト意識の啓発を図るとともに、契約方法の見直し等を実施する。

【実績】

- ・研究所内の事務室内、廊下やエレベータ前、トイレに、電力節減、夏期の軽装励行のポスターを掲示し、職員に対するコスト意識・省エネ意識の啓発を図った他、4階テラスに遮光及びグリーンカーテンを設置し、昨年度に引き続き省エネ化を図った。
- ・複数年で契約締結している施設常駐管理・空調設備保守点検・消防設備等点検・清掃環境衛生の業務請負契約の期間満了に伴い、前回同様複数年契約による入札を実施し、業務の効率を図った。
- ・昨年度拡大したペーパーレス会議を、引き続き今年度も対象会議を拡大し合計4会議をペーパーレス化し、消耗品の節約と労務の軽減に努めた。

【計画】

- (2) 業務の外部委託等を促進させるとともに、職員の人件費や外部委託の状況を分析し、経費の抑制策を検討する。

【実績】

- ・働き方改革の一環として一部部署においてフレックスタイムを試行的に導入した。試行結果を検証した上で令和2年4月から正式に実施することが決定した。
- ・7、8月の2カ月間、管理部職員を対象に「ゆう活（夏の生活スタイル改革）」を実施し、対象者に対し定時で帰宅するよう促した他、実施しやすい環境にするため会議の設定時間や一定の時間以降に仕事の発注を行わないよう全職員へ働きかける等超過勤務の抑制とワークライフバランスの向上に努めた。
- ・昨年に引き続き水曜日の定時退勤日の所内放送及び全職員メールの送信により、意識啓発を促し超過勤務の削減を務めた。
- ・引き続き、施設管理業務及びネットワーク管理業務について外部委託を行い、業務の効率化を図った。

自己点検評価

計画どおり実施した

《評価結果》

計画を上回って実施している

- 1 (外部研究資金、寄付金その他の自己収入の増加に関する目標を達成するための措置) については、計画を上回り、科研費への常勤研究者参加率が97%に達した。自己収入もコーパスの有償頒布により総額 28,020 千円となり着実に増加した。
- 2 (経費の抑制に関する目標を達成するための措置) については、計画1、2ともさまざまな工夫を凝らして、積極的に実施されている。

自己点検・評価及び当該状況に係る情報の提供に関する目標を達成するためにとるべき措置

1. 評価の充実に関する目標を達成するための措置

【計画】

自己点検・評価等を実施し、組織運営の改善に活用する。

【実績】

- ・所内に自己点検・評価の実施，評価結果の公表及び活用に関することを目的とした自己点検・評価委員会（委員6人）と研究所が実施する共同研究プロジェクトの推進及び連携・調整を図ることを目的とした共同研究プロジェクト推進会議と連携して開催し，PDCAサイクルを管理している。
- ・自己点検及び評価の検証を行うための所外の専門家8名で構成される外部評価委員会による機関拠点型基幹研究プロジェクトの自己点検評価・外部評価を実施した。

2. 情報公開や情報発信等の推進に関する目標を達成するための措置**【計画】**

国立大学法人評価委員会の評価結果や業務実績報告書など評価に係る情報等を，ウェブサイト等に掲載し，広く社会に公開する。

【実績】

- ・国立大学法人評価委員会の評価結果や業務実績報告書に加えて，外部評価委員会による研究系・センターの実績及び組織運営の評価をまとめた外部評価報告書を，ウェブサイト及び『国立国語研究所年報』を通じて公開した。

自己点検評価

計画どおり実施した

《評価結果》**計画を上回って実施している**

- 1（評価の充実に関する目標を達成するための措置）については，計画通り，所内に自己点検・評価を実施しただけでなく，外部評価委員会による外部評価も実施した。
- 2（情報公開や情報発信等の推進に関する目標を達成するための措置）については，計画通り，国立大学法人評価委員会の評価結果や業務実績報告書をウェブサイト及び『国立国語研究所年報』で公開しただけでなく，外部評価委員会による外部評価報告書も公開した。

その他業務運営に関する重要目標を達成するためにとるべき措置**1. 施設設備の整備・活用等に関する目標を達成するための措置****【計画】**

施設整備・既存施設の維持管理及び省エネルギー対策を実施する。

【実績】

- ・研究所施設を関連外部団体による学会開催やTV番組撮影等のロケ用地として施設の外部貸出を実施し，収益の改善を図る共に既存施設の活用を促した。
- ・定期的な施設・設備の点検結果及び日常的な研究所内外の施設点検等（木の剪定，通路の補修等）により，計画的な維持管理を行い，職員及び利用者の適切な予防安全に努めた。
- ・研究所内の事務室内，廊下やエレベータ前，トイレに，電力節減，夏期の軽装励行のポスターを掲示し，職員に対するコスト意識・省エネ意識の啓発を図った他，4階テラスに遮光及びグリーンカーテンを設置し，昨年度に引き続き省エネを図った。

2. 安全管理に関する目標を達成するための措置**【計画】**

危機管理に関するマニュアルに基づく訓練や研修等を実施する。

【実績】

- ・建物耐震改修工事の関係で建物内での総合防災訓練及び各種体験訓練の実施ができなかったため，

代わりに、立川防災館で地震体験教室等4種類の防災体験学習及び消防訓練を実施した。(12月23日・24日)

- ・新型コロナウイルス感染拡大に伴う業務対応として、2月上旬に教員の在宅勤務を開始し感染拡大防止に取り組んだ。3月には管理部の在宅勤務について準備と業務の整理を始めた。所内会議、打合せをWEB会議に移行するためWEB会議システムを2月に導入し、在宅で所内会議を実施できるよう対応した。
- ・新型コロナウイルス感染防止を目的とした在宅勤務特例実施時の情報セキュリティの取り扱いの作成をした上で対応した。

3. 法令遵守等に関する目標を達成するための措置

【計画】

公的研究費の適正な使用に関する研修会等及び研究倫理教育等を実施し、受講者の理解度チェック及び受講状況の管理監督を行う。また、情報セキュリティに関する研修を実施する。

【実績】

- ・日本学術振興会が提供している研究倫理eラーニングコース[eL CoRE]を新規採用の研究者16名に受講させるとともに、採用時オリエンテーションを実施した。また、人間文化研究機構令和元年度コンプライアンス教育研修会及び研究倫理教育研修会(11月20日)に教職員を21名参加させた。
- ・人間文化研究機構本部主催の各情報セキュリティ研修に対象者を参加させるとともに、標準型攻撃メール訓練、やCSIRT訓練、報告体制確認訓練を実施した。また、CSIRT構成員を文部科学省主催・国立大学法人等CSIRT研修(9月19日・2月20日)、に参加させた。
- ・メール誤送信対策機能の設定マニュアルを配付する等、随時、情報セキュリティ対策に関する注意喚起を行った。

自己点検評価

計画どおり実施した

《評価結果》

計画どおりに実施している

- 1 (施設設備の整備・活用等に関する目標を達成するための措置) については、計画通り行われた。研究所施設を学会開催やTV番組撮影のロケ用地として貸し出すなどを実施し、既存施設を有効に活用し、かつ収益の改善を図るなどの工夫がなされた。省エネルギー対策もさまざまな方法で推進された。
- 2 (安全管理に関する目標を達成するための措置) については、計画通り、防災体験学習及び消防訓練が行われるとともに、新型コロナウイルス感染拡大に対しては、教員の在宅勤務やWEB会議の利用などで感染防止に努めた。
- 3 (法令遵守等に関する目標を達成するための措置) については、新規採用の研究者16名を公的研究費の適正な使用に関する研修会に参加させ、また対象者を情報セキュリティに関する研修に参加させるなど、計画通り行われた。

【総合評価】

管理業務はきわめて良好に行われており、すべての面で計画通りか計画を上回り、高い評価に値する。これ以降も、この良好な状態を維持することが期待される。

2. 資 料

国立国語研究所外部評価委員名簿（敬称略）

- ◎ 坂原 茂 東京大学名誉教授
専門： フランス語学，認知言語学
- 小野 正弘 明治大学教授
専門： 国語学・日本語史
- 上山あゆみ 九州大学教授
専門： 生成文法・日本語統語論
- 沖 裕子 信州大学名誉教授
専門： 談話，方言，日本語教育
- 片桐 恭弘 公立ほこだて未来大学学長
専門： 情報科学，社会言語学
- 砂川 裕一 群馬大学名誉教授
専門： 哲学，比較文化基礎論，言語文化教育論，日本語日本事情教育論
- 橋田 浩一 東京大学教授
専門： 自然言語処理
- 森山 卓郎 早稲田大学教授
専門： 日本語学，日本語文法

任期：平成30年10月1日～令和2年9月30日（2年）

◎委員長 ○副委員長

国立国語研究所令和元年度業務の実績に関する評価の実施について

1. 評価の実施の趣旨

国立国語研究所では、共同研究プロジェクト及び機関拠点型基幹研究プロジェクトにおける研究計画の実施状況について、プロジェクトの代表者が行った自己点検評価及び実績報告書の妥当性を検証するため外部評価委員会による評価を実施している。

2. 評価の実施方法

評価は書面審査で行った。研究所が作成した、令和元年度の計画及びその実施状況が記入された「元年度業務の実績報告書」（「プロジェクト・センターの研究活動」、「管理業務」）の内容を検証した。

「プロジェクトの研究活動に関する評価」の点検項目及び観点は次のとおりである。

点検項目	観 点
研究成果 (研究) (共同利用)	研究業績の量的側面 ・ どれだけ論文等のアウトプットがあるか
研究水準 (研究) (共同利用)	研究業績の質的側面 ・ どれほど学術的意義や社会的意義があるか
研究体制 (研究) (共同利用)	研究推進にあたっての制度的側面 ・ どれだけ大学と組織的に連携し、大学の機能強化に貢献しているか
教育	研究過程及び研究成果の教育的普及 ・ どれほど大学等の機能強化に貢献しているか
人材育成	若手研究者の育成、及び社会人の学び直し ・ どれだけ受け入れて取り組んでいるか
社会連携	自治体・産業界との連携など社会との協業 ・ どれほど社会と連携しているか
社会貢献	研究成果の社会への普及 ・ どれほど社会に向けて発信しているか
国際連携	研究体制における国際的協業 ・ どれだけ海外の組織と連携しているか
国際発信	研究過程及び研究成果の国際的発信 ・ どれだけ国際的に発信しているか
その他特記事項	

機関拠点型基幹研究プロジェクト一覧

研究領域	プロジェクト名	プロジェクト略称	リーダー
理論・対照研究領域	対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法	対照言語学	窪菌 晴夫
理論・対照研究領域	統語・意味解析コーパスの開発と言語研究	統語コーパス	プラシャント・パルデシ
言語変異研究領域	日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成	危機言語・方言	木部 暢子
言語変化研究領域	通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開	通時コーパス	小木曾 智信
音声言語研究領域	大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的な研究	日常会話コーパス	小磯 花絵
日本語教育研究領域	日本語学習者のコミュニケーションの多角的な解明	学習者のコミュニケーション	石黒 圭

国立国語研究所外部評価委員会規程

平成21年10月 1日

国語研規程第7号

改正 平成28年 4月 1日

改正 平成31年 4月 1日

(趣旨)

第1条 この規程は、国立国語研究所組織規程（国語研規程第1号）第16条の規定に基づき、国立国語研究所（以下「研究所」という。）外部評価委員会（以下「委員会」という。）の組織及び運営について定めるものとする。

(任務)

第2条 委員会は、次の各号に掲げる事項について審議する。

- (1) 自己点検・評価の結果に基づく評価に関すること。
- (2) 研究所の中期計画及び年度計画の評価に関すること。
- (3) 共同研究プロジェクト等の評価に関すること。
- (4) その他評価に関すること。

(組織)

第3条 委員会は、10名以内の委員をもって組織する。

2 委員は、研究所の設置目的について理解のある学外の学識経験者等の中から所長が委嘱する。

(任期)

第4条 委員の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、委員に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長)

第5条 委員会に委員長を置き、委員の互選により決定する。

2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

3 委員長に事故あるときは、あらかじめ委員長が指名した委員がその職務を代行する。

(議事)

第6条 委員会は、委員の過半数が出席しなければ、議事を開き、議決をすることができない。

2 委員会の議事は、出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

(意見の聴取)

第7条 委員会は、必要に応じて委員以外の者に出席を求め、意見を聴取することができる。

(外部評価の実施等)

第8条 外部評価の実施は、研究所の中期計画及び年度計画の実施に関する評価の時に行うものとする。

2 委員会は、評価の結果を所長に報告するものとする。

(庶務)

第9条 委員会の庶務は、管理部総務課において処理する。

(その他)

第10条 この規程に定めるもののほか、外部評価の実施に関し必要な事項は、委員会が別に定める。

附 則

この規程は、平成21年10月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成28年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成31年4月1日から施行する。

国立国語研究所外部評価委員会【令和元年度実績評価】（第1回）

日 時： 令和2年9月10日（木） 10:00～12:00

場 所： オンライン会議（ZOOM）

議 事：

1. 前回議事概要（案）確認
2. 機関拠点型基幹研究プロジェクト評価について
3. 令和元年度共同研究プロジェクト評価について
4. 令和元年度「コーパス開発センター」及び「研究情報発信センター」の評価について
5. 令和元年度「組織・運営」,「管理業務」の評価について
6. その他
4年目終了時評価について（報告）
大学共同利用機関の検証に係る自己検証結果報告書について（報告）

資 料：

1. 国立国語研究所外部評価委員名簿（令和2年4月1日現在）
2. 国立国語研究所外部評価委員会規程
3. 前回議事概要（案）（平成31年8月1日）
4. 国立国語研究所プロジェクト別 令和元年度評価担当
5. 機関拠点型基幹研究プロジェクト評価報告書
- 6-1～6-6. 令和元年度共同研究プロジェクト自己点検報告書及び
令和元年度共同研究プロジェクト評価結果
- 7-1～7-2. 令和元年度国立国語研究所2センターに関する実績報告書及び
令和元年度国立国語研究所2センターに関する評価結果
8. 令和元年度「組織・運営」,「管理業務」に関する評価結果
9. 令和元年度業務の実績に関する外部評価報告書の構成について
- 10-1. 研究業績説明書
- 10-2. 現況調査表
11. 自己検証結果報告書